ハイスクール・フリート　海賊艦隊で大ピンチ！

みん提督

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

海に生き、海を守り、海を往く。それが、ブルーマーメイド。

ブルーマーメイドの若きエースである青木彩は、親友であり、副長でもある神余久美ら、頼れるクルーたちと共に、日夜任務に励んでいた。

そんな彼女らの元に、艦隊を丸ごと盗み、強大な軍事力を得た海賊たちからとある犯行声明が届く。

混乱する世界を尻目に、刻一刻と悪化する状況の中、海賊たちのリーダー、大河原と大きな因縁を持つ青木は、ある捨て身の作戦を提案する。

ハイスクール・フリート二次創作です。あの世界の現用艦はどんな海戦をするのかなと気になって最近ずっと妄想してたのでこの構想を元に書いてみます。

なるべく定期的に連載できるようがんばります。

ハードな描写も入れる予定なので一応注意喚起の意味でタグ付けしときます。

（追記）

原作の雰囲気は崩壊しています。ハードな描写等、ご用心ください。

目次

プロローグ　襲撃でピンチ！ ―― 1
第１話　やりすぎちゃってピンチ！ ―― 5
第２話　犯行声明でピンチ！ ―― 11
第３話　大河原でピンチ！ ―― 17
第４話　出撃準備でピンチ！ ―― 23
第５話　生贄作戦でピンチ!? ―― 32
第６話　不穏な影でピンチ！ ―― 40
第７話　最悪のピンチ!? ―― 46
第８話　ロケット艦で大ピンチ！ ―― 54
第９話　アジトでピンチ!? ―― 64
第９・５話　人魚は泳ぐ ―― 73
第１０話　突入でピンチ！ ―― 85
第１１話　包囲網で大ピンチ!? ―― 100
最終話　決着でピンチ！ ―― 117
エピローグ ―― 136

プロローグ　襲撃でピンチ！

海に生き、海を守り、海を往く。それが、ブルーマーメイド。
このスローガンは世界中に点在する海洋安全整備機構”ブルーマーメイド”の共通の標語にして、最も気高き誓いの言葉でもある。
彼女たちは日夜、愛すべき人々や故郷、誇りを胸に厳しい訓練を重ねながら、海洋の安全を守りつづけている。

しかし、彼女らとて無敵万能ではない。地球表面の７割を占めるといわれる海を前にしては、世界的大組織でもカバーしきれるはずもなく、彼女らの感知し得ない所で重大な事件が起こりつつあるとは未だ誰も想像だにしていなかった。
２０１６年１１月某日。太平洋のとある島でのことである。

その日も退屈な仕事だった。いつもと同じルートを船でぐるぐると回るだけ。襲撃者どころか、船影すら見当たらない、寂しい海。自分等も含めて１０隻もいる武装監視船、高度な監視通報装置、何かあってもすぐに駆け付けてくれる隣の島に駐留するブルーマーメイド。何をとってもどう解釈しても、安全そのもの。というより過剰なまでだ。
「船長、一体なぜこんなにたくさんの見張りが必要なんすか？」
民間軍事会社（PMC）のジャケットを着た青年が船長と呼ばれる男に話しかける。
「しまってあるものがとても重要だからさ」
船長はぶっきらぼうに答える。
「そんなアバウトな話じゃなくて、どう考えたって過剰っすよこんな戦力。近くにブルーマーメイドもいるし、俺らまで駆り出されるワケがわからんって話っすよ」
口を尖らせる青年に、武装監視船の操縦桿を握ったまま、船長が答える。
「それでも依頼があるから、こうして俺たちが出てるんだよ。飯のあ

てなんだから黙って従うんだな」
　観念しろ。とでも言いたげな船長の言葉にさしもの青年もそれ以上の反攻を断念することにした。言われてみれば、こうして港の回りをぐるぐるするだけで金が貰えるなら結果オーライ、むしろラッキーだ。
「それもそうっすね。楽して金が貰えるんなら万々歳…」
　そこまで言った所で、青年は船長の顔色が変わったのを感じ取った。正確には背中越しなので、顔色というよりは気配、空気感のようなものだが。しかし、確かに変わる空気に青年は反射的に銃座に据え付けられた機関銃に手を伸ばす。なれた手付きで弾を込めると船長がじっと見ている方へ照準を合わせる。だが、そこには何もいなかった。いつも通りの寂しい海だ。拍子抜けした青年は機関銃から手を離すと船長を睨み付ける。文句でも垂らしてやろうと思った次の瞬間。
「静かに、しゃべるな」
　船長のドスの聞いたダミ声で制止される。間違いなく戦闘状態の船長。
　だが、どこに敵がいるのか不思議に思っていると、直後に正解がわかった。
　ピンという甲高い音があたりの寂しい海に響き、武装監視船に当たった瞬間、ガンという鈍い音に変わった。間違いない、何度も聞いたあの音だ。
「ピンガーだ！」
　船長はそう言うと船のスロットルを全開まで上げ、音のした方に船首を向けた。青年は危うく振り落とされそうになるが、なんとか耐える。他の船も気付いたらしく、一斉に同じ方向へ走り始める。腐っても歴戦の艦隊傭兵（フリート・マーセナリー）、動きに一切の迷いも隙もない。
「坊主、爆雷準備だ！」
　船長の命令に青年が復唱し、船尾のレールに固定してある爆雷の投下準備に入る。小型の爆雷では潜水艦を撃沈することは不可能だが、損傷を与えて潜航不可能にさせることができる。そうなればあとは

浮上した敵艦を艦内から攻略することが可能になる。
「いたぞ、あそこだ！」
仲間が叫ぶ。水面下に黒い船体がうっすらと浮かんでいる。間違いなく、潜水艦だ。こんな近くでピンガーを打つだなんて、相手のサブマリナーは素人なのか、それとも…
「爆雷セット完了！」
「全艦、爆雷投下せよ！」
船長の号令で一気に武装監視船の船尾から爆雷がボロボロとこぼれ落ちる。一瞬の静寂の後、水柱が数えきれないほど上がる。小型爆雷とはいえ、これだけの数の攻撃を受ければさしもの潜水艦も只ではすまないはず。
船団は爆発を確認すると、ゆっくりと転進し、敵が浮上するであろうポイントに機関銃を向ける。
しかし、
「……浮上してこないな」
「沈んだのか？」
「いや、いくら旧式でもあれくらいで沈むはずが…」
クルーたちは口々に不安を呟く。確かに爆発による水しぶきが収まったあとには破片や重油とみられる黒い液体、漏れ出た空気のようなものが確認できたが、肝心の船体は見えない。はたして本当に沈んだのか。
「……俺がみてくる」
船長がいの一番に確認に乗り出した。他のクルーたちはそれを固唾を飲んで見守る。
「船長、ここでもし敵が浮上してきたら……」
青年が不安そうに言う。もし、敵のクルーが機関銃やロケット砲でも持ってたら……蜂の巣にされる。
その恐怖から、青年が機関銃を握る手が震える。さすがの船長も脂汗がドッと噴き出る。そして、船はとうとう潜水艦の真上に来た。意を決して２人が水面を覗き込んだ瞬間、船長は叫んだ。

「罠（It's a trap!）だ！」

潜水艦はハリボテのニセモノだった。ベニヤ板とコンクリートで作られた漁礁のような物体。そもそもここの海域は潜水艦が入れるほど深くもない。完全に騙された。

船長が急いで反転しようとしたその時、船の側面で閃光が走った。船は真っ二つに裂け、破片が空高く舞う、青年も海に投げ飛ばされ、緊急用のエアバッグが作動する。

「魚……雷……!!」

ショックで薄れゆく意識のなか、彼は自分の船が”本物”からの攻撃を受けたことを察した。しかし、彼の意識は微睡み、最後に見たのは膨らむエアバッグの動作だけだった。

「ホセがやられた！」

「敵はどこにいる!?」

「ブルーマーメイドに報告は」

「してるが、間に合わない」

「またくるぞぉ！」

「ソーナーどうだ!?」

「爆音のせいでわからん」

「回避ィ、回避ィ！」

その後はほぼ蹂躙だった。艦隊傭兵たちはとうとう自分達を襲撃したのが何者なのか、それすらわからないまま、全員が失神してしまっていた。

あとに残ったのは残骸とエアバッグのみ。

そして、その様子を潜水艦のセイルから満足そうに眺める赤いベレー帽を被った男だけだった。

長い事件の幕開けだった。

第1話　やりすぎちゃってピンチ！

カモメたちはいつも呑気だ。傍目には港に屯して当てもなく旅をする吟遊詩人のような連中で、人間の活動範囲などお構いなしに我が物顔でテリトリーを築いている。

そんな彼らは海の上でも図々しい。ちょうどいい休憩所だとでも言わんばかりに、艦のマストや甲板、手すり、アンテナ、砲身。すべての構造物を余すことなく活用する。糞を落としていくこともあるし、船乗りにとっては海の名物でもあり、悩みの種でもあった。どうしたって艦に乗ってくるのは避けられないので半ば諦めている者も多い。

しかし、彼らとて反撃を受けない訳ではない。時折人間は仕返しをすることを生き甲斐とするのだ。

少し可哀想な気もするが、自業自得なので無問題だ。

甲板にけたたましいブザー音が鳴る。すでにこの段階で幾分かは逃げ出すが、それでも一部のカモメは図々しく居座っている。そんな彼らには強烈な仕返しがお見舞いされる。

甲板にある小さな蓋が開くと、間髪をいれずに炎が噴き出る。ここでようやく危機を察した他のカモメも脱出を決意する。炎は一瞬で人の身長を優に超えるほどに急成長し、黒い塊が炎を裂いて飛翔する。

あとに残ったのは、炎の燃焼後の煙と、誰もいなくなった甲板だけだった。

飛翔した塊は空中で向きを変え、指定された座標に向けて高速で巡航を開始する。しばらく飛んだ後、塊の先端が分離する。小さなパラシュートで減速した後、着水し、探針音を発しながら目標に吸い込まれるように突っ込んでいく。

次の瞬間、目標に命中した魚雷が爆発し、大きな水柱を上げる。命中した艦は大きく傾き、一瞬で濡れ鼠となる。

「命中。……されど的針、的速変わらず」

双眼鏡を覗きながらクルーが報告する。

「浸水判定のはずなのに全く変わらんとはね」
「ダメコンは向こうの方が優秀だしね～」
「元が外洋戦闘艦だし、そりゃそっか」
艦橋クルーたちが口々に呟く。
波を切り裂く鋭角的な艦首を持ち、船体に描かれた赤いラインと、三胴型の特徴的な船体を持つその艦の名は、ブルーマーメイド硫黄島要塞直属艦隊所属の戦闘艦『ちちじま』（ＢＰＦ―３１）だ。
ついさっき垂直発射装置（VLS）から放たれていたそれは墳進魚雷。魚雷をロケットで遠距離に高速で投射する兵器で、現代海戦の主力兵器となっている。
一方、先ほど被雷していた艦は『ちちじま』とは全く異なる姿をしていた。平均一般的な単胴型の船体を持ち、低いブリッジに見合わないほどに巨大な飛行船用格納庫とそれぞれ２本ずつのマストと煙突をもつ特徴的な艦影をもつ、赤いラインを携えた３５００ｔクラスの本格的な外洋戦闘艦『よるぎり』（ＷＰＦ―５３）だ。ブルーマーメイドと志、使命を等しくするも、女性主体の組織であるブルーマーメイドとは大きく異なり、男性主体の組織体系をもつホワイトドルフィンの所属艦艇だ。
一件『ちちじま』が不利に見えるが、そこを工夫と戦術で埋めるのが今回の演習の目的だった。
「落ち着いて、皆。今のは牽制射で、いわば開戦の合図。戦いはまだこれからだよ」
クルーをなだめるその声の主は『ちちじま』副長の神余久美だ。頭脳明晰、文武両道、容姿端麗、さらに海洋研究博士号までもってるという非の打ち所がない天才だ。
ここまで完璧ならもはや彼女が艦長でないのが不思議なほどだが、その疑問をもつクルーは『ちちじま』にはいなかった。つまり、艦長はそれ以上に天才だった。ということである。
「だよね、艦長？」
「うん」
艦長席に深く腰掛け、足をだらしなくぶらつかせているのがこの

『ちちじま』の主、青木彩艦長だった。見た目にはやる気を感じさせず、眠そうなタレ目からは優秀な人材であるとは思いもよらないほどだった。
「艦長、次の手は？」
「右舷短魚雷発射用意。無誘導で発射角３０。ずつ、『よるぎり』の進路上にばら蒔いて。起爆タイミング任せる」
命令は直ちに戦闘指揮所（CIC）に伝えられ、オペレーターたちが慌ただしく準備を始める。
「了解。右舷短魚雷発射管開放、発射準備」
水雷長の十六夜若葉の命令で、すぐさま右舷魚雷発射管が開く。
「魚雷、準備よろし」
「攻撃始め」
艦長の号令の直後、空気圧によって発射管から解き放たれた３本の魚雷は『よるぎり』の進路を妨害するルートへおどりでた。魚雷を回避しようとこちら側に艦首を向けた時、ようやく『よるぎり』の反撃が始まる。
「『よるぎり』も魚雷を発射した模様、それと７６ｍｍが動いてます」
『よるぎり』も負けじと『ちちじま』進路上に魚雷をばら蒔く。さらに主砲７６ｍｍ砲による砲撃が始まろうとしていた。
「機関、両舷最大戦速。ジグザグ航行」
航海長が復唱し、艦は一気に増速する。最大速度４４ノットを発揮する『ちちじま』こと改インディペンデンス級は並みの艦艇なら追い付くことは困難で、高度な戦闘システムと先進的な管制装置により、少ない武装搭載量を補って有り余るほどの優秀な艦だ。そこになら、勝機がある。と、多くの船乗りなら確信できるだろう。
しかし、青木の勝機は別のところにあった。
「『よるぎり』発砲！」
「衝撃に備え」
発砲炎が見えた数秒後、艦の前方に水柱が上がる。７６ｍｍ砲は、小型とはいえ改インディペンデンス級のような艦艇には十分脅威となる砲だ。被弾すればその度に戦闘機能を喪失していくだろう。

「当ててきませんね、艦長」
神余は不思議そうに呟く。
「たぶん、砲撃は囮だよ。さっきの魚雷と併せて注意をそちらに引かせたいんだ。本多さんらしいね」
青木は『よるぎり』側の意図を即座に読み取ると、次の1手を打つ。
「煙幕弾、全部焚いて」
「えぇ？」
マイク越しに聞こえる青木の指示に、ＣＩＣからは驚きの声が上がる。
「はやく、艦長の命令よ！」
時間との勝負だ。少しでも遅れたら負ける。その直感から神余が追撃する。
「り、了解」
艦橋両舷に装備される小型煙幕弾が軽い音を立ててすべて発射されると、『ちちじま』を覆い隠すように厚い煙幕のカーテンが出来上がる。
『よるぎり』もカーテンの向こうに隠れ、レーダーのみにその姿が映し出される。
「さて、あとは……!?」
耳をつんざく轟音に、咄嗟に耳を抑える。艦橋の前を高速で横切る物体が一瞬だけ視認できた。音の正体は。
「マジかよ……対空ロケット（シースパロー）だ！」
シースパローは、『よるぎり』艦尾に搭載されている8連装箱形ランチャーに収められた小型の対空兵器だ。元は高速飛行船用の制空兵器だったものを、艦載用に転用したもので、弾頭に装備されたレーダー範囲に目標を捕捉すると起爆し、敵の墳進魚雷や飛行船を撃墜するための兵器だ。それを艦に直射してきたとなれば、話は別だが。
「あのタヌキ親父、定石破りにもほどがあるだろ！」
「こっちの位置を炙り出したいんだ。これだけの煙幕だとレーダーじゃ完璧に捉えられないから」
慌てるクルーの様子を尻目に、神余は冷静そうだ。

「どうします？艦長」
青木が少し考えている間に２本目がきた。今度は艦尾格納庫の横をすり抜けていく。
３本目は当たるだろう。
「後進一杯、取り舵、９０度」
「オッケー」
神余はニヤリと笑うと機関室に命令を伝達する。ディーゼルとガスタービンのけたたましい音が響いていた『ちちじま』は一瞬の静寂の後再び鳴動する。今度はバックしつつ、円を描き始める。
そして、ちょうど後進に入ったタイミングで、３本目が見当違いの方向へ飛んでいく。やはり、まさかこの煙幕の中で後進に入っているとは思いもよらなかったようだ。
『よるぎり』は完全に、『ちちじま』を見失った。だが、それは『ちちじま』も同じで、煙幕から出ないことには敵を捕捉することすらままならない。
しかし、青木の考えは違った。
「またお話してたの？」
悪戯っ子のような優しい目で問いかける神余に小さくうんとだけ返す。
「機関前進一杯、面舵。たぶん、その先にいる」
青木の言葉に、呆れたようなクルーの声が返ってくる。
「また艦長の直感ですか？」
「まぁ、艦長が言うなら……」
「ホントにいたら酒おごります」
「言ったな？」
自由すぎない？とツッコミでも入れたくなるが、我慢する。
航海長が命令通り舵を切り、煙幕を抜けると……
「い、いた。ホントにいた！」
そこには無防備に側面を晒している『よるぎり』の姿があった。
あまりの近さに艦橋内で驚くクルーの慌てぶりさえも鮮明に見える。

「左舷短魚雷、全弾発射！主砲、敵水線上に撃ち込みまくれ！」
青木も珍しく気合いをいれて命令を飛ばす。
『よるぎり』との距離はわずか１００ｍ。反航戦の形になって『よるぎり』の側面を掠める『ちちじま』は持てる近接火力のほぼすべてを『よるぎり』にぶつける。
『よるぎり』は魚雷３本と５７ｍｍ砲１６発を水線付近に被弾した。特に機関部に集中して命中した２本の魚雷が決定打となり、『よるぎり』は戦闘不能と判定された。
……正確には判定ではなく、リアルガチに艦が壊れたとは、まだ『ちちじま』クルーは知らなかった。
故に、これから大量の始末書や叱責が待ち構えているとは全く予想だにしておらず、勝利の美酒に酔いしれていた。

第2話　犯行声明でピンチ！

東京から南へ約１３００ｋｍ。小笠原諸島で２番目に大きな島である父島からは約３００ｋｍの海上に浮かぶ小さな島、硫黄島。

ブルーマーメイドの編成前から重要な軍事拠点として利用されており、旧海軍の飛行船基地やドック、米軍が使用していた兵舎や格納庫などがそのまま残り、今でも使用されている歴史ある島でもある。

そんな硫黄島だが、現在では東京の南方海域制海権維持の要といわれる世界屈指の大要塞島へと姿を変えている。

３６サンチ連装砲４基を始めとして、島のあらゆる場所に砲台が設置され、摺鉢山の頂上には旧式戦艦の艦橋をそのまま設置した観測司令塔が天守閣の如く聳え立つ。

他にも、最大２０隻を収容可能な港湾施設、さらに最大８隻を収容できる水中潜水艦ドック、さらに大規模な修理や造船も可能な本土顔負けの本格的なドック、飛行船用の格納庫や発進道、自給自足が可能な食料生産プラントや避難壕など……ありとあらゆる施設を内包し、臨時の首都としても機能するほどの万能ぶりを見せている。

しかし、硫黄島要塞には最大の欠点があった。

それは、敵の侵攻を一度も受けたことがないことである。

そもそも地理的に東京から遠すぎるし、防衛拠点なら他の小笠原諸島の島々にも点在してるし、海賊たちはこの鉄壁過ぎる要塞を避けて通る。そうなるとせっかくの要塞設備が宝の持ち腐れとなってしまうのだ。

結果、海賊たちからは『鉄壁の要塞』、『ハリネズミ』と呼ばれ、恐れられる一方、脅威らしい脅威を経験せず、本土からは縮小論も上がるなど、厳しい状況に置かれる要塞でもあった。

だが、東京防衛、海賊への牽制などの目的から要塞の重要度はそこまで落ちず、今でも大半の設備が使用可能な状態で維持管理されている。

また、もう一つの特徴としてブルーマーメイドとホワイトドルフィン両組織の部隊がそれぞれ駐屯している。母港を別にすることが多

いブルーマーメイドとホワイトドルフィンがどちらも駐屯する基地は珍しく、何かと対立しがちな両組織の橋渡し的な役割ももっている。

そんな歴史と論争溢れる要塞の一角に置かれた執務室からは、長閑な南国風な島からは想像つかないほどの怒号が飛び出していた。

「バカモノ！何がやりすぎちゃって、だ！そんな子どもみたいな言い訳しおってからに、本当にお前ら反省してるのか？特に青木、貴様！」

景気よく怒号を飛ばしているのは要塞司令官でもある硫黄島要塞駐屯ブルーマーメイド作戦部隊司令官豊島文子。歴戦の隊員で、過去に壊滅させた裏組織は数知れず。佐世保校の校長を務めたこともあり、その実力は国内外でも知れ渡っている。

彼女にキツく叱責されているのは、先の演習で同要塞駐屯ホワイトドルフィン旗艦『よるぎり』を壊してしまったブルーマーメイド艦『ちちじま』のツートップ、青木彩艦長と神余久美副長だ。この一件は『よるぎり』座乗の本多司令官が快く許してくれたおかげで終息すると思った2人は安堵したが、ブルーマーメイドとしてはそれで終わりには出来なかった。

司令官公室の窓からも見える修理ドックには、機関部に盛大に2つの大きな穴が空き、まだ排水作業が続く、満身創痍の『よるぎり』の姿が見えた。訓練用の模擬魚雷とはいえ、接射するとかなりひどく壊れるものらしい。『よるぎり』は1ヶ月は戦線を離脱せねばならない。豊島が激怒するのはそのこともあった。

「2ヶ月前の要塞騒ぎ以降、各地で海賊やら何やらが活発に動いている。そんなくそ忙しい時期に、貴重な外洋艦を演習なんかで壊しおって、貴様ら何がしたいんじゃ！」

机をバンバン叩きながら怒り狂う豊島。他の若い隊員なら泣き出してしまいそうな迫力の持ち主だが、2人は冷静だった。なんなら反論までするので、結果火に油を注ぎ、どんどんとエスカレートさせるのだ。

「そうは言いますがね、豊島司令。本気で行けと仰られたのは貴女ですよ」

神余がまたしてもぶっきらぼうに答える。記憶力もいい彼女は、言われた言葉を逐一記憶しているのだ。
「確かに、アタシはそう言ったさ。だがね、『よるぎり』を大破させろとまでは言ってないぞ！」
豊島の止まらない怒りは同じ階の高官フロアだけでなく、すぐ下の階にある一般業務フロアにも響き渡っていた。叫ぶ度に古い建物は揺れ、パラパラと木屑まで落ちてきていた。
「今日もやってるねー、豊島さん」
「あの２人そろそろ降格されそう」
「艦長たちに責任押し付けたみたいで申し訳ないっすね……」
『ちちじま』のクルーたちはこの一件から、『よるぎり』の修理が完了するまでの１ヶ月の間、当面の陸上勤務（ようは謹慎である）を命じられていた。だが、結局のところ、罰の多くはツートップが受けているようなもので、監督者責任とはいえ、少々申し訳なくなっていた。
「じゃあ、私がそろそろ止めてくるよ」
そう言って立ち上がったのは、『ちちじま』航海長の斉賀千春。青木と神余の同期であり、幼なじみの彼女はこうして２人が上に突っ掛かっている時に間に入って仲裁するのが仕事だった。昔から歯に衣着せぬ言い方をしていた彼女らにとっては渡りに船だが、今回はどうだろうか。
３人分の紅茶を用意し、豊島の執務室の戸をノックする。彼女の返事が来る前に速攻で扉を開ける斉賀だが、直後に流れ弾を喰らう。
「今、取り込み中だ！後にしたまえ！」
思わず紅茶を載せたトレイを落としそうになる。あわてて体勢を立て直すと、気丈な声で。
「まぁまぁ、司令。そろそろ２人も懲りたと思いますよ。私からもキツーく言っておきますので、今回はその辺で許してやってくださいな」
と言いつつ、紅茶を勧める。断る余地を与えないのが彼女のやり方だった。何か言おうとしたが、グッとこらえ、出された紅茶を飲み始める豊島。こうなればこっちのものだ。と、リードを握った斉賀は２

人にも勧める。
「僕、コーヒー派なんだけど……」
青木が渋そうな顔をして、紅茶を断ろうとすると。
「たまにはいいじゃない。ね？」
お礼を言って先に紅茶をもらっていた神余が一口紅茶を啜る。
「やっぱり美味しいわね、貴女の紅茶。本場イギリス仕込みは格別ね」
斉賀は照れるといつもするクセで髪の毛をワシャワシャする。その仕草がなんだかかわいいと評判だった。ついでにファンも多い。
「……うん、美味い」
普段はコーヒー派な青木も、素直に味を認める一杯。こうなればこっちのものだ。
「ねぇ、豊島司令、２人も懲りたでしょうし、司令もまだお仕事ありますでしょ？お互い忙しい身ですし、今日はこの辺で勘弁してやってくださいな」
両手を合わせて頼み込む姿勢は彼女が完全にこの場を支配した証拠。こうなると豊島も黙るしかない。斉賀の不思議な才能の一つだ。
「……わかった、わかったよ。先方も許してくれたことだし、今回はこの辺にしとくよ。２人とも退室してよろしい」
豊島の言葉に２人は敬礼し、部屋を後にする。斉賀は最後に。
「ありがとうございます、おば様」
とウィンクして見せた。ため息をつくと、彼女にも退室を促す。
こうして、即座に終戦したお説教だったが、２人には第２ラウンドが待っていた。
「イタイイタイ、耳引っ張らないで！」
「なんで僕はほっぺなのさ……」
斉賀にほっぺと耳を引っ張られてれオフィスに連れ戻される２人。すれ違う隊員たちからはまたやってるよ。とか、懲りないねぇ。といった声がちらほら聞こえる。２人を仲裁した後は改めて、斉賀が叱るのがお約束だった。
オフィスは主に艦のメインクルーたちが勤務する士官室（ガンルーム）と、他の上陸隊員が執務を執る一般オフィスの２つがある。艦につき、それぞれ

1室ずつの2室が用意されている。
士官室（ガンルーム）には主にメインクルーたちのデスクがある。
「アンタたちは毎度毎度……なんでいちいち反論するのよ。素直に反省してるふりでもしてればいいのにさ」
「ふりでいいんだ」
斉賀のお叱りにツッコミの声もあがる。
「ちょっと黙ってて十六夜さん。ともかく、なんでアンタらは……」
豊島司令よりも厄介だ。何せまくし立てるようにお説教するし、正論だから何も言えない（豊島司令も正論ではあるが……）。もしくは単なる上司よりも、幼なじみの方が反論しづらいのかもしれない。
結局、2人はまともに反論できないまま、お説教は2時間に及んだ。
同日18時。要塞隊舎の食堂にて。ブルーマーメイドとホワイトドルフィンの両部隊は生活スペースを共通にしているため、食堂では男女の隊員たちが各々食事を摂っていた。
その中に、やたらと憔悴しているグループがいた。『ちちじま』メインクルーたちである。大量の始末書と決裁書類に追われ、残業確定な彼女たちには食事をリラックスして摂る余裕はなかった。むしろこの後待ち受ける残業に戦慄さえしていた。
「艦長、今度からあんな無茶するのやめません？」
「考えとくよ……」
力なく味噌汁を啜る青木。『ちちじま』組のやたら暗い雰囲気は他の隊員にも伝わっていた。
「向こうの奴ら、『ちちじま』組だろ。懲りないなぁ本当に」
「今度は本多さんの艦壊したらしい」
「え、『よるぎり』を？よく許してもらえたな」
「本多さん女には甘いからな」
嫌な会話だ。聞こえてないとでも思っているのか。規則正しく食事を口に運ぶ神余の耳にも、その会話は聞こえていた。ホワイトドルフィンとブルーマーメイドの確執以前に、生意気でよく事件を起こす『ちちじま』組は疎まれることが多く、あまりいい印象を抱かれていないのが事実だ。

「どしたの副長？」
「いや、何でもないよ」
聞こえていたのは自分だけらしい。モヤモヤした気分でご飯をかきこむ神余。すると今度は他の隊員たちのざわめきが聞こえてきた。今度は自分等に関することではないらしい。
「テレビの調子がおかしいぞ」
「チャンネル変えてみろ」
「電源入れ直したら？」
ざわつきは食堂に何個か置かれているテレビに関することだった。
突然砂嵐が起こり、ニュース番組が中断されたのだ。
すると次の瞬間、テレビにみすぼらしい格好の男性が映り込む。古い軍服に身を包み、赤いベレー帽を被っているその男に食堂は混乱の渦に巻き込まれる。
そして、その男をみた瞬間、青木の顔色が変わる。『ちちじま』クルーたちも見覚えのある男だった。
「！……彩……」
神余も顔が強ばる。いつも冷静沈着な青木の顔に冷や汗が伝う。
その男は、ゆっくりと口を開く。
「……日本国民の諸君。私は、海賊『マンボウ旅団』大船長、大河原彦次郎である」
長い事件の幕開けは、唐突だった。

第３話　大河原でピンチ！

フィリピン東方のとある無人島。そこにはかつて、島民５００人が暮らす小さな村があり、漁業や観光業で生計を立てていた。しかし、５０年ほど前に海賊が付近の海域を彷徨くようになると、漁の邪魔をされたり、治安の悪化で観光客が来なくなるなどして、村は徐々に廃れ、３０年前にとうとう無人島となった。

それ以降、だれもこの島に寄り付かなくなったが、それを逆手に数年前からとある海賊たちがこの島を拠点としていた。

島は所々コンクリートで固められ、観測塔や見張り台、速射砲や港湾施設が整えられた小さな要塞のようになっていた。硫黄島などの本格的な要塞とは比べるべくも無いが、それでも、付近を航行する一般商船などからしてみれば、恐ろしく凶悪な施設であるのに変わりはなかった。

海賊たちは、島の地下に複雑な地下通路を建設し、兵舎や弾薬庫、地下牢、整備工場などの専用設備を多数設け、敵襲にも対応していたまさにアリの巣のような島となっていた。

その名もなき島は残虐非道な元艦隊傭兵（フリート・マーセナリー）大河原が率いる海賊『マンボウ旅団』のアジトとなっていた。

アジトの地中深くにある地下牢。そこには３０人ほどの男たちが両手を縛られ拘束されている。程度の差はあれど、ほぼ全員が負傷しているようで、包帯を巻かれていたり、足にギブスがはめられている者までいる。

地下に無理やり作った空間であるため、天井からは染みでた海水が滴り、照明も弱々しく、薄暗い。さらに食事もまともに出されず、怪我の治療も必要最低限のもの。そんな最悪極まる環境ながら、数々の修羅場を乗り越えてきた屈強な男たち、もとい民間軍事会社（PMC）社員たちは根をあげることもなく、ただひたすらに救助を待っていた。

「船長、いつになったら助けが来るんすかね」

比較的怪我も少なく、憎まれ口を叩く余裕はある青年が、船長と呼ばれる髭面の男に話しかける。こちらは頬に大きな傷が出来ていた

ものの、ガーゼが貼られているだけで、傷から染みでた血がすでに赤黒く固まり、傷口と癒着してしまっている。見るからに痛そうだが、彼は気にする素振りも見せない。
「さぁな。そもそもどれくらい時間が経ってるのかもわからん。時計も、陽光もないんだからな」
船長は一通り部屋を見渡す。切れかかっている蛍光灯や、虫が這う湿った壁、海水が滴る天井、錆びてはいるが人の手では壊せそうもない鉄格子、そして、アサルトライフルを片手に目を光らせる赤いベレー帽を被った見張りの海賊が眼に映るだけだ。
「賑やかな部屋だ。選り取り見取りだぜ」
船長の軽口に社員たちは思わず吹き出す。こんな調子で、彼らは意外と気丈に振る舞っていた。見張りの海賊にはそれが目障りだったようだが。
「うるさいぞ、何度言ったらわかるんだ！」
銃床で鉄格子を叩いて黙らせようとするも、ヒスパニック系の愉快な社員たちには逆効果で、教師の言葉に逆張りする生徒のように、余計に盛り上がるだけだった。
とうとう堪忍袋の緒が切れたのか、アサルトライフルのセーフティを外し、射撃姿勢に入るが、直後に制止の声が聞こえ、動きが止まる。
「やめたまえ、彼らは大事な人質だ。殺したらその意味が無くなってしまう」
階段を降りる靴音は重い。軍用ブーツを履いているその男の顔に生気はなく、ボサボサの髪を赤いベレー帽の中に適当に収めるだけで、ファッションセンスのようなものは全く感じ取れない。
そんな男の言葉に、必要以上に畏まってみせる見張りの海賊。これだけみれば、かなり軍規の行き渡った精鋭軍人のようにもみえるほどだ。さっきまでの横暴な男は微塵も見えなくなっていた。
地下牢の前に立つと、生気のない顔とは思えない眼光で、船長らを睨み付ける。
「アンタはたしか……」
「大河原彦次郎だ。『マンボウ旅団』の大船長を務める者だ。同時に、

お前たちの命を預かる者でもある」
　思わず気圧される社員たち。どう考えても強い。が、どこか弱々しさを感じる。たしかに眼光は鋭く、冷たい眼には残虐非道な性格が滲み出ているが、体はそれに見合っていない。痩せこけた頬に、服の上からもわかる細い四肢、眼の下のひどいクマなど、まるで威厳のある人物には見えない。よくてヤク中だ。
「俺たちを閉じ込めて、一体どうするつもりだ？」
「まさか、風俗にでも売る気か？」
「野郎ばかりでつまらんじゃないか」
「いや、それが好きな多趣味な旦那もいるさ」
　もっともな疑問からなぜか、わりと最低なジョークが飛び交い始め、地下牢に下卑た笑いが響く。
「これではどちらが海賊か、わかりませんな……」
　大河原の横に控える副官がため息混じりに呟く。しかし、彼の言葉には耳を貸さず、大河原は続ける。
「お前たちの問いに答えてもいいが、そのためにはあることを徹底してもらおう」
「ほう、なにかな」
　船長が代表して答える。
「二度とその下卑た笑い声を発するな。非常に腹立たしい。不愉快だ」
　さっきまで愉快に笑っていた社員たちに緊張が走る。目の前の枯れ木のような男が、本当の悪人であるように見えたからだ。そのひどく無機質な声と、痩せこけた頬、それに見合わぬ眼光はアンバランスなようで、全てがマッチし、独特な違和感から来る不気味さが、その眼光の強さを助長していた。
　数十年ぶりに死の恐怖を味わった船長は、冷や汗が伝うのがバレないよう、あえて気丈に振る舞う。
「いいだろう。ウチの社員はものわかりがいいんでね。この通りさ」
　社員たちは各々頷く。たった1人の男にここまで怯えようとは、船長も含め考え付きもしなかった。

「静かになって何よりだ。ここは静かだから落ち着く」
　大河原は誰にでもなく呟いた。独り言なのか。
「さて、まずはお前たちの問いに答えよう。何故お前たちを閉じ込めてるのかについてだが、端的に言えば人質だ」
「さっきも言ってたな」
　船長の言葉に短くあぁ、とだけ答え、続ける。
「我々はブルーマーメイド、ひいては日本政府に恨みがある。元々私たちは傭兵だったのだが、政府は私たちを英雄ではなく、犯罪者として迎えたのだ」
　副官や見張りのが苦い顔をする。どうやら彼らは大河原と長い付き合いのようだ。
「傭兵法の改正とかいう、ごもっともな理由を掲げ、必要以上の破壊活動を行った……として、我々を逮捕しようとしたのだ。当然、私たちは反論したが、聞き入れられるはずもなく、捕まってしまった。それからは3年獄中で無為な時間を過ごしたよ」
　大河原は相変わらず無機質な声と、表情筋を無くしたような、顔面にへばりついた顔で話を続ける。
「そこから助けてくれたのは昔馴染みのマフィアだった。それから私は仲間たちと共に海賊に転職したわけさ。傭兵時代には雑誌の表紙を飾るほどの英雄だったのにな」
　自虐気味に続けるが、話が見えない。かといって、話を遮ったらどうなるか、わからないわけではない。社員たちは困惑で顔を見合わせつつ、静かに話を聞く。
「それからは色々したさ。主に薬物の輸送や製造、殺人請負、兵器の調達……忙しい日々は傷心した我々を癒してくれた。だが、その先に待っていたのは地獄の日々だ」
　一呼吸置き、今度は少し熱を帯びて続ける。彼の拳が震える。
「あの女が現れたんだ。無機質で冷酷、手段を選ばないずるい女だ。俺がやって来たことを、政府が法律を盾に禁止させていたことを、あいつは同じ政府の後ろ楯で平然とやってのけているのさ。不公平じゃないか？」

鉄格子に拳を打ち付ける。痩せ細った体躯からは想像つかないほどに強力な拳は地下牢を震わせ、アジト中に響くような轟音を立てる。
「しかも俺は2度、2度もあの女に負けたんだ。ずるい女だ。2度目は俺を罠にハメやがった。仲間を人質にとられ、俺1人逮捕されれば仲間は解放されると、取り引きを持ちかけられたんだ。だが、あいつは俺を騙した。仲間はすでに本国へ送還され、俺含めて全員を一網打尽にしようとしていたんだ。俺は逃げようとしたが、あいつは容赦しなかった。追撃でおれは右腕を失い、とうとう逮捕された。今ではこの通り、サイボーグだ」
右の袖をめくると、チューブ型の人工筋肉や、カーボンの外板がみえる義手が露になった。なるほど、あの体躯に見合わないパワーはこれが理由か。船長は1人納得し、彼の話を黙って聞く。
「あいつは俺から全部奪ったんだ。なのにあいつは、ブルーマーメイド希代の英雄とかいわれて、今でもチヤホヤされている。それが許せねぇんだよ」
最後はもはや叫びながら一息に呪詛をたっぷりと塗り込んだ言葉を吐き捨てる。
「なるほどな。俺も傭兵やってるし、気持ちはわからんでもないよ。だが、さっきの宣戦布告とやらとは内容がどうも違うようだな」
大河原の顔が歪む。
「なんだと?なぜお前が宣戦布告を聞いているんだ」
すると、見張りの海賊が申し訳なさそうに。
「す、すんません、大船長。大船長の晴れ姿を自慢してやろうと、コイツらにも見せたんです……」
驚いた顔の大河原だが、すぐに事情を察し、即座に彼を許した。見張りの海賊はさっきまでの高圧的な態度とは打って変わり、借りてきた猫のようにおとなしくなった。
「とりあえず、さっきの宣戦布告とやらでは、アンタは腐敗し、堕落した日本政府を矯正してやるとかなんとか言っていたが、本心はその女に復讐したいってことなんだろ。違うか?」

すでに彼らの前でその女への呪詛を吐き散らかした後では誤魔化しようもない。
「そうだとも。この宣戦布告も、あいつを誘き出すための作戦の一つさ。あいつは俺が動いたと知れば、必ず俺を止めようとするはずだからな」
「そうしてのこのこ出てきた所を殺そうってか？」
社員たちに動揺が走る。さっきの剣幕をみればわかるように、大河原は正気ではない。いつ暴走するともわからない火薬庫のような男をこれ以上刺激すれば、どうなるか。わからないわけではない。
「船長……その辺にした方がいいっすよ」
「黙ってろ坊主」
青年が止めようとするも船長に引く気はない。
「どうなんだ？大船長どの。図星か？」
一触即発の空気感の中、大河原は不気味な笑みをこぼすだけだった。

第４話　出撃準備でピンチ！

犯行声明から数時間後、硫黄島要塞の一角、高官フロアのとある執務室に、２人の隊員が出頭していた。
「『ちちじま』も出撃するので？」
同艦副長の神余は不思議そうに返した。相手は直属の上司である豊島司令だ。
「そうだよ。何か異論あるかい？」
忙しそうに書類やＰＣを確認する豊島。神余は思わず、親友兼艦長の青木と顔を見合わせる。
「豊島司令、『ちちじま』は今日から向こう１ヶ月は謹慎処分だったはずでは？」
青木も不思議そうに尋ねる。
「謹慎処分はいったん取り消しだよ。正式な命令はすぐに出るさ」
少しぶっきらぼうに答える。意外と言えば意外だが、当然と言えば当然か。
「一応、理由を聞いてもよろしいですか？」
「なんだい、心当たりあるじゃないか」
豊島は作業の手を止めず、つっけんどんに答える。
「艦の数が足りないからさ」
端的に理由だけ述べる豊島だが、２人はあまりに意外な決定にしばし呆然としていた。
「なんだい？話は終わったよ。アンタらもとっとと準備しな」
「司令、本当の理由は別にあるのではないでしょうか？」
青木は一歩前に出て、彼女の真意を尋ねる。
「……聞いてどうすんだい」
一瞬、作業の手をとめて、青木を睨み付ける豊島。
「確信を得たいからです。理由もわからず戦うのは、私の本分に反します」
書類をいったん机に置き、老眼鏡を外す豊島。青木を再度睨む。彼女の眼に迷いはない。

「……いいさ、隠すようなことでもないからね」
そう前置きし、豊島は続ける。
「アンタらが大河原と因縁があるからさ。あのイカれ野郎に対処できる人間を現場に派遣するのは、そんなに不自然かい？」
言い分はもっともだ。まだ何かあるようだが、珍しく食い下がる青木は、神余と共に執務室を後にした。

「何を考えてるのかな、おば様は」
おば様、というのは豊島のあだ名だ。隊員たちは敬意を込めてそう呼んでいるが、彼女はこのあだ名を使うと怒るため、あまり本人の前では言わないようにしていた。斉賀は別だが。
「それがわからない。僕らと大河原の間に何があったのか、知らないはずもないし」
大河原との因縁から、てっきり任務から外されるとふんでいた青木は、あっさり決まる出撃に拍子抜けしていた。
ダメと言われたら、許可されるまで交渉するか、あるいはもっと上に直談判する手筈だったが、不発に終わった。
「恨みから独断専行に走る可能性あり。って言われたら何も言い返せないもんね」
黙って廊下を歩く2人、もう夜の10時を過ぎるというのに、隊員たちが慌ただし動き回っている。出撃準備や、作戦案の作成、備品の積み込みや艦の準備など、仕事は山積みだ。
「今日は結局残業だね」
「そうね」
ふいに立ち止まる青木。なにかを考え込むような表情だ。どうせまたよからぬことを考えているのだろう。
「ねぇ、久美……」
青木の言葉を遮るように自然と言葉が出る。
「だめ」
ハトが豆鉄砲を喰らったような顔になる青木。神余からの反論は考えていなかったようだ。

「まだ何も言ってないじゃん」
「考え込んじゃって、らしくない。まさか、エリカの敵討ちなんて考えてないよね？」
「でも、僕は……」
　青木は何か言いかけて、そのまま黙ってしまう。その目には、めずらしく自信がなかった。遠い日を見ているような、寂しい目だった。
「ふう、やれやれだね」
　意図を察した神余は、携帯端末を取り出し、準備を続ける『ちちじま』に連絡をかける。相手は『ちちじま』航海長の斉賀だ。
「千春、そっちはどう。出航準備は進んでる？　そう、焦っては元も子もないからね。焦らず急いで正確に、ね。あと、機関室には近付かないでね。月島ちゃん、仮眠中に叩き起こされてご立腹だから。あと、私もそっち行くから。うん、また後で」
　電話を切ると、青木が首をかしげていた。
「……出航準備していろ。なんて言ってないよね？」
　神余は何を今さらと言わんばかりにため息をつくと、
「艦長がやる気なのに、クルーがついてこなくてどうすんの？」
　と一言。ウィンクをして艦に向かう神余。呆気にとられる青木だが、しばらくしてようやく理解する。
「いいクルー……いや、友達を持ったな」
　さっきよりは整えた覚悟で、彼女にお礼を言った。
「ありがとう。久美」
　振り返ると、彼女はとびきりの笑顔で返答してくれた。
「何を今さらだよ、親友兼艦長どの！」
　２人はそれぞれの仕事場へ、踵を返して歩き出した。

　要塞の一角にある士官専用会議室。専用の防音設備や、秘匿性の高い専用回線、高級感あるアンティーク調の内装など、静かで落ち着いた雰囲気の部屋だ。
　その部屋に、作戦に参加する８人の艦長たちと作戦司令官である豊島司令官らが一堂に会していた。

「さて、まずは現状を整理しましょう」
　進行役の司令官専属副官が指示棒を取り出し、ホワイトボードにまとめられた資料と大型ディスプレイを指しながら説明を始める。
「昨日の夕刻、インドネシアにある旧米軍や治安維持機関の退役艦艇を保管する第３９予備役艦隊基地が襲撃されました」
　ディスプレイに表示されるのは、旧くなったものの、まだ使えそうな夥しい数の中古艦艇だ。米国では艦艇を大量に配備するため、その更新の度に大量の艦艇が退役し、中古市場へ流れる。その中で、有事に米軍に編入するために、活動状態で保管される艦が一定数用意される。これがいわゆる予備役艦隊だ。世界中にこうした設備があり、日本も国内各所にこうした拠点をもっている。
「同基地を警備していた民間軍事会社（PMC）社員たちは死者こそ出ていないものの、全員が海賊に捕えられてしまっていて、彼らは人質となっている模様です」
　民間軍事会社のメンバーは３０人ほどで、それがそっくりそのまま人質になったとあれば大事件だ。だが、それだけではすまない。
「しかし、彼らは人質の他に艦隊まで丸ごと盗んでいきました。確認される限り、オリバー・ハザード・ペリー級フリゲート５隻、キッド級駆逐艦１隻、スプルーアンス級駆逐艦２隻の計８隻の盗難が確認されています」
　会議室がざわつく。艦隊泥棒とか言われているが、そんな可愛らしい表現で済む数ではないだろうと。全艦が高い戦闘能力を持つ正規の艦艇で、しかも広域防空能力や、場合によっては長距離水上戦能力まで持っているかもしれない。非常にやっかいな相手だ。
「他にも、盗まれた艦艇があると思われますが、第３９予備役艦隊基地の管理記録が破壊されており、また本土とは違う管理体制にあったため、元々どれだけの艦が保管されていたのかもわからなくなっています」
　副官は一呼吸置き、今度は臨時の艦隊編成表に目を移す。
「これに対して、我が方の戦力は不足しています。この硫黄島要塞からは豊島司令座乗の『ほたか』、黒橋艦長の『まごじま』、高崎艦長の

『あねじま』、高崎艦長の『いもうとじま』、青木艦長の『ちちじま』、藤崎艦長の『たきゆき』、国分艦長の『なぎさぎり』、草川艦長の『ながしお』、の8隻が第1部隊として出撃します。第2部隊は本土の各部隊から引き抜かれた艦艇で構成される混成部隊です。数の上では15隻と、第1部隊の倍近い戦力を有しますが、艦隊を集合して再編成するのにてこずると思われ、到着は遅れる見込みです」

敵の構成が何もわからないも同然で、こちらは数的不利がほぼ確定している。厳しい戦いになるのは目に見えている。

「実質的に俺たちだけで何とかしないといけないってことっすね」

『ながしお』艦長、草川が言う。サブマリナーのくせに、だいぶうるさい奴で、陸ではお調子者だ。

他のメンバーには、衝撃と動揺が混じった空気感が漂う。

「敵の戦力がまるでわからん」

「艦隊を盗まれるのはさておき、杜撰な管理体制の方が問題だな」

「今その段階の話をするべきではないでしょう」

「近くにブルーマーメイド基地があったはずだが、何をしてたんだ」

「通報を受けて駆け付けたときには全て終わっていたらしい。これだけスピーディーに動けるなら、敵さんもかなりの手練れだろう」

「あの『マンボウ旅団』だからな」

参加メンバーは口々に呟く。しかし、海上要塞騒動もそうだが、いくらなんでも海賊に盗られすぎではないだろうか。そうした声も聞こえる。

「我が国としても一大事であるこの事件に対し、投入できる戦力は多くありません。主犯が我が国の重要指名手配犯であるのもあって、他国の積極的な協力は望めません」

この報告に、双子の艦長、高崎姉妹が首をかしげる。

「なんで大河原が日本人なのと、他国の支援が望めないことに関係性があるのさ」

妹の直子の疑問に、すかさず姉の直葉が答える。

「ようは国のプライドとか面子さ。自国の犯罪者をてめぇで捕まえらんないでどうすんだって話さ」

口が悪い直葉の回答がどうも気に入らない様子だが、青木と違って引き際を弁えているのでそれ以上は何も言わなかった。
「一応、米国はハワイ所属の艦がいくらか出るようですが、第二ラインの警戒に専念するとのことです」
いざとなれば出てくるということか。あの自由の帝国はいつも虎視眈々とおこぼれを狙っている。自分の不始末は他国に押し付けるくせに、だ。
副官が続ける。
「戦力編成は、先に申し上げた我が要塞艦隊所属の8隻を基幹とした第1部隊と、本土の各部隊から引き抜かれた第2部隊で構成されます。第1部隊は主に斥候として、敵の戦力把握や、敵アジトの無力化及び人質の救出、前哨戦力の排除が主な任務となります」
「ようは第2部隊到着まで、戦線をもたせれば良い、という訳か」
「そういう訳です。藤崎艦長」
副官がディスプレイの表示を切り替えると、作戦に参加する各艦のデータが表示される。
「まぁ、それにしたって艦が足らんな。要塞艦隊をもっと出せないのか？」
そうぼやくのは『まごじま』艦長、黒橋だ。ベテランのブルーマーメイド隊員で、横須賀校の教官を務めたこともある。
「黒橋艦長、お気持ちわかりますし、出来ることなら活動可能な全艦を出したい所ですが、要塞艦隊にも持ち場があります。整備、修理中の艦や、現在任務中の艦もいますし、ここまで戦線が拡大した時の予備兵力を残す意味もありますので……」
申し訳なさそうに汗をぬぐう副官。彼女としても、やりきれないだろう。
「うん、そのことはよくわかってるさ。フィリピン支部やインドネシア支部だって余裕がないしね」
戦力の低下を嘆くメンバーの中で、1人の艦長が発言する。
「ところで、本来この場にいるべきでない隊員がいるのですが、なぜ誰も指摘しないのでしょうか」

メンバーの目線を一身に受けるのはホワイトドルフィン作戦艦艇『なぎさぎり』の若き艦長、国分隆一だ。規律を重んじ、正義感に溢れた性格で有名な艦長だ。曖昧なことや優柔不断を嫌い、これまでに多くの民間人救助に活躍したいわゆる英雄だ。その性格から、彼を慕うものも多く、事実彼の乗艦『なぎさぎり』のクルーは多くが彼の公明正大な人格に惹かれていた。だが、高すぎる正義感ゆえに他人と衝突することも多く、命令違反も多々あるため、上層部からは煙たがられている人物でもある。目をつけられたら面倒なことになると、専らの評判である。

「誰かねそれは」

ベテランの落ち着いた声で問う藤崎に、国分は純然たる怒りを携えた瞳で答える。

「『ちちじま』艦長、青木彩2等保安監督官です」

「え？」

思ってもいない所からの攻撃に、思わずコーヒーをこぼしそうになる青木。しばしフリーズするほどに、唐突だった。会議中ずっと黙ってコーヒーを啜っていたから余計に面食らっていた。

「なぜ、青木艦長が？」

「青木艦長は、本日の演習で本多司令官座乗の『よるぎり』を必要以上に破壊し、その罰として向こう1ヶ月の謹慎処分を受けていたはずです。それがなぜ、さも当然のように作戦に参加しようとしているのか、青木艦長の素行に問題があると見られて然るべきではないでしょうか」

この訴えに、豊島は頭を抱える。彼の評判はホワイトドルフィンどころか、ブルーマーメイドでも広く知れ渡っていた。豊島も、何度か行われた協同作戦でそのことは骨身に染みていた。

「国分艦長、いきなり無礼だよアンタ」

豊島はあきれたような声で制止を試みるが、火に油だった。

「なぜです司令官。この場で間違いなく、規律違反を犯しているのは青木艦長ですよ」

もはやあきれて、ものも言えないような雰囲気になる会議場。

「伝達不足だったなら、こちらの不手際だが、彼女の謹慎処分はついさっき解かれたよ」
　タブレットに表示された命令書を国分に見せる。少し納得したのか、それとも反撃されて狼狽したのか、まだ豊島に噛み付こうとしてくる。
「我々はまだ聞いていませんでした。こちらにも不手際があったかもしれないので、それに関しては謝意を表明します。しかし、それはそれとしてなぜ、わざわざ謹慎処分を解いてまで『ちちじま』を出すので？　理由をお聞かせ願いたい」
「艦の数が足らんからさ。別に壊れてる訳でもないんだし、動かせるなら動かした方がいいだろうよ。もちろん、この作戦が終わったら改めて謹慎を命じるさ」
　豊島の言葉に、また青木は驚く。
「初耳ですが？」
　大きくため息をついて、豊島は説教モードで言う。
「いったん取り消しだと言っただろう。聞いてなかったのかい？」
　肩を落とす青木だが、次の一言でさらに落胆させられることになる。
「ただし、今回の作戦次第では謹慎期間が延びると覚悟しておきな」
　まるで思考を先読みされたみたいだ。暗に無茶なことはするなということだろうか。
（土台、無理な注文だよ、おば様）
　すでに、青木の中で人生最大の無茶を決め込むことにしていたので、今さらだった。もっと早くにそう言っていれば、また変わったかもしれないが。
「そういうことでしたら、私はもう何も言いません。青木艦長、ご無礼お許しください」
　丁寧に堅苦しい謝罪をする国分だが、実質的に討論してたのは豊島司令なので、そっちに謝るべきだろうが。
「いえ、別になんとも思っていませんので、お気になさらず」
　少し不満げな顔で席に戻る国分。横で聞いていた藤崎はため息を

つき、草川は茶化すように笑っていた。
「……えー、では作戦案を詰めていきましょうか。皆さんの積極的な議論を期待するところです」
副官が脱線した会議を軌道に戻すと同時に、青木はとある作戦案を提案する。
「よろしいですか、司令」
珍しく挙手する青木に、豊島は少し驚いていた。
「まともな案なんだろうね？」
その問いに、青木はさぁとだけ返し、自身の作戦案を説明した。
一同に衝撃が走る。目を見開き、ただ驚く者がほとんどだった。しかし、青木の目は本気だった。
しばらくの沈黙の後、豊島はゆっくりと口を開いた。
「……もう一回だけ、結論を述べてくれないかい……？」
青木はもう一度、迷いなく、自分の意思を伝える。
「私を生贄にする。という作戦です」

第５話　生贄作戦でピンチ!?

何処までも続く水平線。見渡す限りの大洋に、晴れやかな透き通る空。波の心地よい音が響く海上を、陽光を全身に浴びながら、白波を立てて７つの巨体が滑っていく。遠くには鯨の潮吹きや、優雅に空を飛ぶ渡り鳥の群れが見える。

いたって平凡、平和な海だが、７つの巨体ことブルーマーメイド・ホワイトドルフィン連合艦隊には、それを享受する余裕はなかった。

単縦陣を組む艦隊陣形の中ほどに位置するブルーマーメイド作戦艦艇『ちちじま』の艦内はてんやわんやだった。

「艦長代理、航海計画改定案が出来ました。承認願います」

艦長代理と呼ばれるのは、本来の『ちちじま』副長神余久美（かなまくみ）だ。諸事情で艦長不在の同艦では、副長が代わりにその任務についていた。

「うん……うん、いいと思うよ。補給艦隊とのランデブーもお願いね」

提出されたタブレット端末に、指紋認証で承認する。若干の遅れはあるものの、概ね航海は順調だ。航海士は了解と返し、艦橋から降りていった。

「ＣＩＣ、レーダーどう？」

続けて、ＣＩＣの状況を確認する。

「レーダー、特に反応無し。ソーナーにも魚しか見えません」

レーダー・ソーナー管制官兼ＣＩＣ主任オペレーター、柊透子（ひいらぎとうこ）が答える。ビン底メガネがトレードマークで、無口だが気は良い性格。

「ありがとう。その調子でお願いね」

続けて別のマイクをとり、今度は機関室に繋げる。

「月島さん、機関室はどう？」

「今日は特に調子良いよ。ぐっすり眠ってたのに叩き起こされて、残業させられたアタシに比べればね」

相手は『ちちじま』機関長の月島（つきしま）カエデだ。大人しそうな見た目だが、中身は生粋のメカニック。気性はかなり荒い方である。

「月島さんも元気そうでよかった。その調子でお願いね」

月島はまだ何か言っていたが、神余は通話をぶち切って言わせな

かった。『ちちじま』は少し個性的なメンバーが多いが、特に不思議ちゃんな艦長がいないと、艦は少しだけまともな優等生クラスのようになるのが不思議なところだ。
副長席に腰掛け、タブレット端末で航海計画や作戦準備案に目を通す神余。ブリッジでは、操艦以外にも艦長代理として多くの業務があり、休める暇は多くなかった。
「つかれてない？　艦長代理」
突然の声かけにすこし驚く。声の主は航海長（主操舵手）の斉賀千春（さいがちはる）だ。
「んー、大丈夫。むしろこのくらいの方が気にならないよ」
それを聞くと、斉賀は少し意地悪そうな顔になる。柄になくテンションが下がってる様子なのは、最愛の彼女がいないせいだろう。こういう状態の神余をからかうのが、斉賀には楽しみな時間でもあった。
「そうかぁー、わかるよぉー、私も船乗りだもの」
先進的なスティックタイプの操縦装置を握りながら、体をくねらせて大袈裟に言う斉賀。彼女のおふざけモードから、艦橋組は瞬時に臨戦態勢に入る。
「え、なに急に」
唐突のおふざけモードに困惑する神余。いつもなら軽くあしらって不発させる所だが、今日はそんな余裕はなかったようだ。
「わかります、艦長代理。私も入港どころか、本土に行った時しか会えませんもの」
斉賀の隣に座り、同じく操縦装置を握るのは航海科の柿沼有紗（かきぬまありさ）だ。副操舵手を務めている。
「いや、だから何の話？」
困惑する神余を尻目に、今度は両翼見張り員も攻勢に参加する。
「艦長代理、お熱いですしね～」
右舷見張り員の関光子（せきみつこ）だ。気と背は小さいが、仲間内のふざけ合いは全力で参加する愉快犯である。
「え、え、あぁ！」

ようやく何について言われていたのか察し、手元からポロリとタブレット端末が落ちていく。落としたのも気にできないほどに、耳まで真っ赤に染まった彼女の顔は、普段のクールさからは想像できないほど可愛らしいものとなっている。本人はそれどころではないが。

「仕事中ですぜ、艦長代理。そういう想像は控えて頂かないとな」

ケラケラ笑いながらからかうのは左舷見張り員の黒丸里野（くろまるさとの）だ。少し口が悪いが、仲間思いで、知識も豊富、千里眼と称される驚異的な視力をもつ若きエースの1人だ。ついでに背が高い。

「だ、誰が彩とそんな……！」

墓穴を掘った。直後にそう悟るも時既に遅し。常に即決即断な彼女の性格が裏目に出た。

「おや、誰も我らが青木艦長どのとだなんて、言ってませんがね？」

黒丸は八重歯を見せながらケラケラと笑う。腹が立つが、何分完敗なので何も言えない。顔を抑えて恥ずかしがり、今にも蒸気を吹き出しそうな神余。少し可哀想にもみえる光景だった。

「みんな、その辺にしとこうよ。艦長代理がそろそろオーバーヒートしそうだし」

副操舵手の柿沼が鎮火を図る。こうした時に火消し役を買って出るのは彼女の役目だった。ふわふわした性格からケンカを止めるのも異常に上手く、『ちちじま』ではマスコット的な立ち位置を獲得していた。

落ち着きを取り戻した神余だが、まだ真っ赤な耳からまだ少し復帰しきれていない様子だった。艦橋が笑いに包まれる中、改めて、斉賀は神余を勇気づける。

「ね、私らはこんなことやってる余裕があるんだから、きっとアイツも大丈夫だよ」

笑顔で言う斉賀に、少し驚きの表情を見せる神余。

「そうですよ。艦長は不死身ですから」

右舷見張り員の関が続ける。艦長への信頼は、『ちちじま』の全クルーが等しくすることだった。

「また、ケロッとした顔で帰ってくるさ」

今度は、左舷見張り員の黒丸が答える。八重歯とサムズアップを見せつけるのが、彼女のサインの1つだ。
「みんなに寂しい思いをさせた罰として、全員分のラーメン奢らせません？」
副操舵手の柿沼の悪魔の提案に、両舷見張り員は即座に賛成の声を入れる。青木も、自分が知らない所で、財布が狙われているとは思いもしないだろう。
明るい雰囲気の艦橋に、神余は自然と笑みがこぼれる。
「ね？　意外とみんな大丈夫だから。きっとあの子も大丈夫だよ」
「根拠ないじゃん、それ」
斉賀の言葉に、苦笑混じりに神余が返す。
「でも、その通りかもね」
誰にでもなく、ポツリと呟く。艦長代理となっても決して座らない、空席のままの艦長席を見つめる。いつものように、やる気なく足をブラつかせて、深く椅子に腰掛ける親友兼艦長の姿が見えるような気がした。ほんの一瞬だけ。
「……彩が帰ってきたら、1発ビンタでも入れてやろうかな」
またしてもそれいいなぁとか、1人1発で、とか彼女の預かり知らぬ所で、色々と盛り上がる『ちちじま』艦橋。こうした賑やかさは、時折悩みを忘れさせ、気を楽にさせてくれる。遠い海の先にいるはずの親友兼艦長の姿を想像しながら、神余は決意を呟く。
「待っててね、私の艦長」
その言葉が届くかどうかは、海神（わだつみ）のみぞ知る。といったところだった。
連合艦隊は着実に、作戦海域へと近づきつつあった。

連合艦隊が作戦海域へ急行する中、フィリピン東方の無人島は昼間だというのに、淀んだ空と海に囲まれ、夜のような暗い風景に包まれていた。
先ほどまでの美しい海とは反対に、付近のスラム街と化したフロート艦から垂れ流されている生活排水やゴミが海面を覆い、異臭を放っ

ている。生き物も少なく、空には瀕死のカモメが弱々しく飛んでいる。さらに、治安の悪化で、ブルーマーメイドも手が出せず、商船も航路から真っ先に外すほどの凶悪な海域と化していた。
　こうした堅気が寄り付かなくなるエリアでは、古今東西、裏組織が幅を効かせるようになる。この海域も例外ではなく、大小数十隻の艦艇を保有する海賊『マンボウ旅団』がアジトである無人島を中心に、付近の海域にテリトリーを築いていた。
　ブルーマーメイドも匙を投げる凶悪な海域で、彼らは思い付く限りの全ての犯罪行為を行い、フロート艦も事実上の領土としていた。
　そんな太平洋の掃き溜めとも言われる海域には、複数の哨戒艇が周回していた。『マンボウ旅団』の船だ。
　アジトの警戒や、みかじめ料の徴収、商船への切り込みや違法薬物の輸送など、様々な仕事をこなす『マンボウ旅団』の主力艦艇だ。
　その内の1隻、赤いベレー帽を被った3人の海賊が乗り込む『哨戒艇3号』は黒く淀んだ海の上をゆっくりと進んでいた。海賊たちはつまらない任務に身が入らず、不真面目な態度で仕事に従事していた。
「あぁーあ、つまらねぇな」
　肩からアサルトライフルを下げる海賊の1人が大袈裟にぼやく。こうして半日は海に出て監視するのだが、最近は特に船など見えず、代わり映えしない汚い景色の中を何度も行き来していることになるので、つまらなく感じるのも無理はない。
「あんまり大声でそういうこと言うなよ。大船長に聞かれたら殺されるぞ」
　もう1人の海賊が注意するも、ぼやきは止まらない。
「かまわねぇよ。聞こえるはずもないし、第一最近の大船長はアレのせいでボロボロだ。どっちにしろ聞こえやしねぇよ」
　すると、さらにもう1人、操縦桿を握る海賊が質問する。
「ところでよ、お前ら。最後に女抱いたのはいつだよ」
　2人は一瞬きょとんとしてから顔を見合わせる。
「なんだよ急に」
「いや、なに気になってな。ちなみに俺は3ヶ月抱いてないんだがな」

操縦桿を握る海賊は、聞いてもないのに答える。彼は大の女好きだ。そのことをよく知る2人は、彼の質問の意図を察する。
「お前、今回の作戦でもまたやる気か」
「あれ、うるさいからやめてもらいたいな……臭いも酷いし」
あれ、というのは彼の苛虐志向のことだ。実を言えば、彼は敵船に乗っている好みの女を三日三晩陵辱した後に殺害するという、常軌を逸した趣味をもっていた。海賊に限らず、こうした裏稼業を営む者の中にはこうした歪んだ性癖をもつ者も多い。しかし、元が艦隊傭兵や公人であったメンバーが多い『マンボウ旅団』では、こうしたあからさまな志向をもつ者はわりかし珍しかった。
「んなこと言ってるわりには、おれが盛ってると毎回ハエみてぇにたかってくるじゃねぇか。特にあの時のブルーマーメイドの女マワした時とかよぉ」
男はすかさず反撃する。
「まぁ、確かに全く興味ねぇ訳じゃねぇが。とは言ってもなぁ、おれは死体じゃ勃たねぇんだよ」
「おれは生きてる女一択だな」
倫理観の薄い会話が続く。裏稼業をやっていると、どうやらその気が全く無くても、死生観が狂ってしまうようだ。
「つれねぇなぁ。だがまぁ、いいさ。その分俺の取り分が多くなるからな」
グヘヘと下卑た笑みを浮かべる男に、2人は呆れるより他無かった。
頭のおかしい他人を見ると、どうやら気持ちが締まるようだ。2人は身震いした後に元の仕事に戻り、双眼鏡であたりの汚れた海の監視を再開した。
その直後だ。
「ん？　あれ船じゃないか？」
進行方向右側に、たしかに白い船首波が見えた。小型のスキッパーのようで、どんどん近付いているようにも見えた。
「なに本当か？」

操縦桿を握る男も、その方向を見る。やはりスキッパーが見える。
「大船長はたしか、近付く船は沈めて良いって言ってたよな……」
彼の声に、男は無言で機関銃をかまえる。
「おいおい、待てよ。もしかしたら女が乗ってるかも知れねぇだろ。もしそうだったら勿体無いぞ」
操縦桿を握る男はそう言うが、あまり説得力はない。
「お前は死体でもいいんだろ？　沈めたって構わねぇじゃねぇか」
「わかってねぇなぁ、これだからセカンド童貞は」
「なんだと?!」
今にもケンカが始まりそうな険悪な空気。嫌な空間から目をそらすように、もう1人の海賊はスキッパーの方を監視する。ようやく彼は異変に気付いた。
「あれ、あのスキッパー白旗あげてるぞ」
「なに？」
仲良くケンカしてた2人が同時にこちらを向く。白旗とはどういうことか。3人の頭上にはクエスチョンマークが踊った。
「白旗ということは、降伏か」
「なんで急に白旗あげて近付くんだ？」
仲良くケンカしてた2人だが、いつの間にかライフルを構えて臨戦態勢を整えている。仲が良いのか、悪いのかやら。
「罠かも」
1人がそう呟いた瞬間に、艇内の空気はさらに緊張で重くなる。犯罪者を取り締まるためなら卑劣な罠も使うブルーマーメイドのことだ。罠である可能性も十分にある。
爆発物を満載した無人機かもしれない。
3人は顔を見合わせて頷き、スキッパーに照準を合わせる。ギリギリま引き付け、確実に沈めるつもりだ。
スキッパー特有の甲高いエンジン音と、水飛沫をあげる音がどんどん大きくなってくる。距離５００ｍより近付いた時、引き金に指をかけたその刹那、銃弾が発射され……
なかった。

「撃たないでほしい。僕は降伏するよ」
両手をあげて、スキッパーの乗員が立ち上がる。けたたましいエンジンを切り、完全に止まったスキッパーの乗員を見たとき、3人は驚きと同時に新たな不信感を得ていた。なぜ大船長(あ)の天敵(女)がいるのかと。

「僕は、日本支部ブルーマーメイド所属、『ちちじま』艦長の青木彩だ。君たちのボスと会わせてほしい」

彼女もとい、青木は海賊たちにそう告げる。決死の行動が果たしてどういう結果をもたらすか。彼女含め、誰にもわからなかった。

第6話　不穏な影でピンチ！

ブルーマーメイド・ホワイトドルフィン連合艦隊第1部隊は、フィリピン東方の所定海域に到達していた。

二列縦陣を作りつつ、艦隊は主力第2部隊の到着を待つため、海域を遊弋していた。既に日が落ちはじめて来た海は、次第に青い姿を喪い、何もかも飲み込んで消し去りそうな黒い姿へ変わって行く。

夜の支配領域が広がっていくのと平行して、連合艦隊には焦りの表情が見え始めていた。

連合艦隊旗艦『ほたか』の飛行船格納庫内には、広域艦隊行動司令部が置かれ、10人の艦隊指揮スタッフが詰めていた。元々は飛行船の複数機同時運用を行うために建造された『くらま型飛行船母艦』の派生型の1つである『ほたか』の旧格納庫、もとい司令部では徐々に混乱が広がっていた。

「第2部隊と連絡が取れない？」

「はい。本来は1時間前にはランデブーし、艦隊再編を終えているはずだったんですが……」

作戦の要といえる主力艦隊、第2部隊が未だに到着していない。作戦遂行のために必要不可欠な要素の1つが丸々いないなど想定しきれない状況だ。司令部クルーも慌ただし動き始める。

「第2部隊に何かあったのだろうか」

「連絡艇は？」

「出そうにも何処にいるかすらわからない」

「通信装置の不具合では？」

「『なぎさぎり』、『たきゆき』、『あねじま』の3艦からも連絡を試みたんだが、全て応答なしだ」

「まさか、沈（や）られたか？」

「あっちは15隻の大艦隊だぞ？　そうそう沈られるはずがない……」

「じゃ、なんでいないんだよ」

司令部に走る動揺に、流石の連合艦隊司令官豊島（とよしま）も焦りを隠せなく

なっていた。しかし、司令官として部下に強気な態度を見せるのもまた、彼女の仕事だ。
「落ち着きな、アンタら。第2部隊がどうなったのかはまだわからんが、今は目の前の敵に集中するんだ。艦隊は予定通り、二列縦陣を組んで敵に備え、引き続き第2部隊を呼び出しておいとくれ。以上」
豊島の強気な態度に冷静さを取り戻したクルーたちは敬礼し、それぞれの持ち場に戻る。受話器をとって、艦隊に指示を出す者や、海図にコンパスを当てて、第2部隊の推定位置を算出しようとする者、艦橋に上がって現場指揮を執る者。それぞれが仕事に戻るのを見計らい、豊島は思案にふける。横にいる副官も、不安そうな表情で豊島を見つめる。
「大丈夫ですかね、司令」
豊島は苛立ったように返す。
「大丈夫な訳ないよ。ホワイトドルフィン主力の第2部隊の火力あっての作戦なんだからな。アタシらだけじゃ、敵の斥候抑えるので精一杯だよ」
「そうですよね……」
苦虫を噛み潰したような顔で、副官は答える。
だが、全く当てがないわけでもなかった。
「せめて、あの生意気ひよっ子が時間を稼いでくれればね……」
艦隊に走る緊張感の原因は、第2部隊の遅れだけではなかった。
二列縦陣の右翼、機動力に劣るものの、安定した性能を持ち、改インディペンデンス級よりも防御力に勝るホワイトドルフィン外洋艦はつゆき型戦闘艦『たきゆき』の艦橋から、それは見えていた。
「レーダーにも映っています。確実に艦です。何なら目を凝らせば見えますよ」
すっかり日が落ち、あたり一面真っ暗闇に包まれた海上に、連合艦隊を監視するかのような位置に陣取る1隻の艦影が見えた。
「あれか」
赤と青の半々に塗り分けられた、艦長専用であることを表すストラップ付きの双眼鏡で、クルーの指差す方向を見る大柄な男、『たきゆ

き』の藤崎(ふじさき)艦長だ。
その横にいるのは、青一色のストラップ付き双眼鏡を覗く同艦の副長だ。
「はい。艦種は護衛艦、情報通りならキャノン級護衛艦に間違いありません」
灯火を落とし、艦隊前方を行く艦影は、３門の３インチ砲や５３３ｍｍ魚雷発射管を始め、２０ｍｍ、４０ｍｍの各種機関砲、対潜迫撃砲などをハリネズミのように装備した旧式護衛艦で、とっくの昔に退役しているはずの艦だ。
「かつては黎明期ブルーマーメイドを支えた名艦も、中古市場に流れてからは悲惨だな」
藤崎の言葉に、副長が相槌を撃打つ。
「まったくです。今や裏組織御用達の水上艦ですからね」
艦隊前方で警戒を続けるキャノン級を眺めながら、２人は対策を練ろうとしていた。
「しかし、あの位置では我々を追跡するというよりも先導しているみたいですね」
「緊張をかけたいのか、それとも素人なのか……」
光を漏らさないように、照明を落とした艦橋で藤崎は副長らと協議を始める。対象は当然、件のキャノン級についてである。
「我が艦隊の位置は既にアジトに伝わっているでしょうし、いつ主力が現れてもおかしくないかと」
「沈めるか？」
「いや、作戦通りなら青木さんが交渉を続けているはず。もう少し待つのは……」
「しかし、このままでは先手をとられる危険性が……」
『たきゆき』艦橋では議論が続く。積極的な攻撃を提案する者もいるが、概ね静観する方向でまとまりつつあった。
「ところで、豊島司令はなんと？」
藤崎が副長に確認を入れようとする。
「先ほど積極論も併せて、打電しました。回答はまだ……!?」

言葉を詰まらせたのは副長だけではなかった。艦長の藤崎ら、艦橋クルーは唖然として、後方から飛翔する物体に目を奪われる。
墳進魚雷だ。
「なんだ急に！　敵の攻撃か!?」
「敵にしては様子がおかしい」
「キャノン級の方へ飛んでったぞ！」
『たきゆき』の艦橋は一瞬にして混乱に包まれた。突然の事態に対処しきれなかったクルーの中で、唯一藤崎だけは状況を瞬時に理解した。後方に布陣する僚艦を睨み付けると、苦々しく呟く。
「『なぎさぎり』だ……あんの国分（バカ）、勝手に撃ちやがって……！」
墳進魚雷を撃ったのは、国分艦長率いるホワイトドルフィン艦『なぎさぎり』だった。艦首に装備された特徴的な箱形ランチャーからまだ発射煙が燻っているのを見るに、今まさに発射されたに違いなかった。
攻撃を想定していなかったであろうキャノン級は、なんとか対空攻撃を始めるも、時既に遅く、魚雷は着水していた。
その直後、逃げる暇もなかったキャノン級の横腹に大きな水柱が上がる。魚雷は小型とはいえ、旧式小型のキャノン級を戦闘不能にするには十分すぎる威力を持っていた。キャノン級の甲板が炎上し、大きく傾いて急速に沈没する様子がはっきりと確認できた。
あまりに突然のことに、艦隊は一時時が止まったかのようだった。
最初に動いたのは『ほたか』の豊島司令だった。
「何してんだいあのバカ助は！　今すぐ回線を繋ぎな！」
豊島の喝に、ようやく他の隊員たちは動き始める。すぐさま『なぎさぎり』と直接回線が繋がれた。
「国分艦長！　何勝手なマネをしてるんだい！　攻撃許可はまだ出してないよ!!」
開口一番、凄まじい剣幕で国分に怒りをぶつける豊島だが、受話器の向こうにいる彼はいたって冷静だった。
「許可を得ずに攻撃を開始したことに関しては陳謝いたします。しかし、既に敵は我々に宣戦布告し、戦闘行動をとっています。これを排

除するのに何をためらう必要がありましょうか」
　国分は静かな声で反論を綴る。確かに言わんとしていることはわかる。戦闘行為を始めるのが遅いか、早いか。それだけが問題となる現場だったのも事実だが、しかし。
「……『ヤマタノオロチ作戦』の基本策定案を無視してでもかい？」
　この言葉に、国分は少し反応を見せる。彼にとっては許せない人物の1人が立ち上げたも同然の作戦であるから無理はない。
「無論、基本案は周知しております。しかし、それとこれとは話は別です。青木2等保安監督官が交渉を続けたとしても、開戦は免れません。ならば、先制攻撃を加えるのが海戦の定石です」
　いちいちごもっともだ。そもそも国分は間違ったことは言っていない。基本に忠実で、かつ徹底的にこなしているだけだ。ようは敵艦を見逃す方向で纏まりつつあった雰囲気を壊し、最悪の場合、青木の決死の作戦を無下にするかもしれないという状況に、豊島らの怒りがある。つまり、国分は真面目すぎるが故に、空気が読めなかったといえる。もはやそんな軽い表現で終わらせられる事態ではないが。
「……ふん、起こしたことはもうしょうがないさね。ただし、これ以降にアタシの命令を無視した場合には更迭してやるから覚悟しておきな」
　怒りを鎮めた豊島の言葉に、やはり無機質な声で国分が返答する。
「了解しました。肝に銘じておきます」
　国分が受話器を置くと、不安げな顔で部下が尋ねる。
「いいんですか、艦長。司令かなり怒っておられましたが」
　部下の言葉に返しながら、国分は艦長帽を被り直し、艦長席に着席する。
「いいさ。言わせておけばいい」
　続けて、墳進魚雷の再装填を命じつつ、国分は言葉を続ける。
「〝自由戦闘指令〟も発令されているんだ。僕の判断は本部の見解を拝借するなら予防防衛。攻撃の可能性ありと見られた敵艦を排除したまで。むしろ部下に余計な叱責を浴びせたとして司令が処罰される可能性もある」

「さすがは艦長。機転を効かせた見事な判断です」
国分の言葉に完全肯定するのは彼だけではなかった。彼の部下はそのほとんどが彼の意志、あるいは戦い方に感銘を受けており、特に『なぎさぎり』の艦内は彼の支持者で占められていた。
公明正大、規律を重んじ、伝統を墨守する彼の精神に感銘を受ける士官は多いが、同時に上層部からは熱狂的な支持者による軍閥化を懸念されたり、格上や年長者であっても怖じけず物申す格好をよく思われなかったりと、上層部の間では扱いに困る腫れ物のような扱いだった。今作戦でも上記の性格から来る協調性の無さが不安視されていたが、それが早くも露呈することとなった。
「困りましたね、〝ホワイトドルフィンの猟犬〟とやらは……」
『ほたか』艦内では、副官が困り顔で豊島に愚痴をこぼしていた。当の豊島はといえば、もはや怒りを通り越してあきれた顔で作戦卓を睨み付けている。
「猟犬なんて頭の良い奴じゃないよ。その渾名を考えた奴には比喩表現力が足りないね」
そうして話す2人の元に、1人の部下が慌てて駆け寄ってきた。
「た、大変です！　司令！」
息を切らして通信室から走ってきたらしい彼女が豊島に1枚の暗号文を手渡す。
瞬時に解読し、内容を理解した豊島は唇を尖らす。
副官が尋ねるより先に、豊島は苦ったらしく呟く。
「先行していた『ながしお』と『まごじま』が敵主力を捉えた。もう動き出してるようだね」
暗号通信紙を握りつぶしながら、怒りに震える豊島。
副官含め、その場で聞いていた全員が、嫌な嫌な想像をしてしまっていた。
「間に合わなかったってのかい……青木……」
太陽はすっかり水平線の向こうに隠れ、次第に黒さを増していく海上に、さらなる暗雲が立ち込めることなど知る由もない連合艦隊は、決戦へと近付きつつあった。

第7話　最悪のピンチ!?

時間を少し遡り、フィリピン東方の無人島近海、『マンボウ旅団』のアジト海域にて。

普段通りの喧騒と、怪しげな機械の轟音がとどろくフロート艦群の横を、小綺麗な中古艦艇が航行していく場違いな光景が広がっている海域は、いつもよりも騒がしかった。

「ペリー級各艦は準備完了まで残り2時間……いや、1時間半で終わらせる」

「長距離巡航大型魚雷投射ロケット積込み完了」

「キッド級、まだ釜の温度が上がりきっていないぞ」

「参加各艦の船長は最終コマンド会議を開く。5分以内に旗艦『べんぼう』に集まれ」

「日用品は後回しでいい。武器弾薬搭載を優先しろ」

決戦に備えて弾薬の補給や作戦の最終確認、艦隊の再編など、普段は特段やる気を見せない海賊たちもこの日ばかりは真剣に作業に取り組み、数日前に手に入れたばかりの新しい艦を入念に磨き上げていた。

一方、港の海賊たちの忙しさとは裏腹に、アジト内は静まり返っていた。

虫が這う湿った地下通路は水滴が定期的にポタリと落ちる音だけが響き渡り、誰が見ても不衛生極まる最悪な環境であった。

そんな地下の一角には、人質や捕えた者を幽閉するための専用区画があり、海賊たちからは専ら”監獄”と呼ばれていた。その中でも、現在使われている部屋は2つあった。1つは、人質となっている民間軍事会社（PMC）の社員たちが捕えられている大部屋で、もう1つは特別な器具が並べられた専用設備を持つ特別室だ。

特別室には1人の女性が捕えられていた。簡素で古びた椅子に座らされ、両手両足を縛られて身動きがとれなくなっているにも関わらず、彼女の顔に焦りは見えなかった。肝が座っているのか、それともただの見栄っ張りか。

部屋の中を見渡し、少し唸った後ようやく彼女は一言呟く。
「……これ意外とピンチなんじゃ……」
彼女の名は青木彩(あおきあや)。ブルーマーメイドに所属する若きエース隊員で、現在は作戦のためにわざと敵アジトに捕まっているわけだが、意外と殺意が高い部屋に通され、次第に自分はとんでもないことをやらかそうとしてることに気づき始めていた。
そうして思考がぐるぐるしていると、3人の男が部屋に入ってきた。旧式のアサルトライフルや拳銃、コンバットナイフで武装し、赤いベレー帽を被った、統一された色彩の軍服の上からでもわかるほどに鍛えられた体躯の男たちだ。
「えーっと……サカキだっけか」
「アオキだよ。なぁ、嬢ちゃん」
「サカキってなに？　どう聞いたらそうなるんだよ」
ガヤガヤしながら入ってくるその3人は、見覚えのある人物だった。青木を捕らえた海賊たちだ。
「あぁ、さっきの……へっぽこトリオだね」
余裕綽々で、少しからかってみせる青木だが、直後に顔面に強い衝撃を受け、表情を歪める。
「!?……」
あまりに突然のことに一瞬、意識が飛びそうになるがなんとか耐える。
気を取り戻した青木の視界にうつったのは、アサルトライフルの固い木製の銃床だった。どうやら海賊の1人に銃床で殴られたらしい。歯が欠けていないか、舌で確認するよりも前に舌の上に血の味が広がる。久しぶりの鉄の味がした。
「あんまりナメた事言うなよ、クソアマ。殺されてぇか？」
海賊の物騒な一言を聞き流しながら、青木は口内に滲み出る血を吐き、予想外の展開に考えを巡らす。
今ここで弱気な姿勢を見せれば海賊は調子にのってもっと攻撃するに違いない。だが、かといってあまり煽っても同じことだ。それよりは態度を変えず、さっきと同じように返すのが一番だろう。との結

論に辿り着く。
「女の子を急に殴ったりしたらモテないよ？」
　血が口から溢れて首筋を伝っていくくすぐったい感覚を感じる。それと同時に、海賊はとうとう堪忍袋の緒でも切れたか、血走った目でアサルトライフルのセーフティを外し、トリガーに指をかけ、そして……。
「おい、よせタキトウ。何してるんだよ。大船長が来る前に殺しちまう気か？」
「そうだよ、タキトウさん。あんまりボコすと後が怖いって……」
　もはやボコすという優しい表現ですむ話ではない気がするが、今度こそ黙ることを決める青木。どうやら本当に頭のネジが消し飛んでる男らしい。ここに来てようやく命の危機を感じ始めたからには、おとなしくする他あるまい。
　タキトウと呼ばれるこの男を特に注意せねばならないと確信した時、特別室にノックの音が響く。
　その音を聞いた途端、タキトウは不服そうに舌打ちしながら呟く。
「チッ、命拾いしたな」
　アサルトライフルを肩に掛け直すと、他の2人と共に部屋の脇に控えるように立つ。3人にバレないように小さく一息つくが、その暇もない内に今度は扉が開く。まず入ってきたのは中肉中背の男で、さっきの3人と同じ軍服と赤いベレー帽を身に付けていた。飾緒が肩にかかっているのを見るに、参謀か何かであるように見える。
　そして、問題は2人目の男だった。
「あ……」
　思わず声が出る。こうして面と向き合って再会するのは実に2年ぶりだ。前回出会った場所が強烈すぎたのもあったが、それでも記憶に強く残り、今でもあの冷徹で憎らしい顔は鮮明にうかぶ。しかし、男はあの時ほど筋骨隆々というわけでもなく、頬は痩せこけ、軍服の上からでもわかるほどに四肢は細く、パッと見の印象は薬物か何かの依存症患者のようだ。しかし、その目に宿す眼力は健在だ。この男の眼は獰猛な猛禽類のそれと同じだ。

睨まれたら最後、彼に捕食される他に道はない。
それだけの恐ろしい男を前にしても、青木は怯えない。正確にはそれを悟られないように必死で耐えていた。あの男の眼力に呑まれれば最期、いっかんの終わりだ。
そうしている内に、男は青木のすぐ目の前に立っていた。男はようやく、ゆっくりと口を開いた。
「久しぶりだな。青木二等保安監督正」
男改め、海賊『マンボウ旅団』の大頭にして残虐非道な国際指名手配犯、大河原彦次郎（おおがわらひこじろう）は彼女を見下ろし、冷たくいい放つ。お互いわかりきった顔だ。今さら確認の必要もなかろう。彼女は質問には答えず、代わりに間違いを指摘する。
「今は二等保安監督官だよ。お陰さまで昇進してね」
またしても生意気な発言に怒ったか、それとも大河原をなめているとでも思ったのか、タキトウがアサルトライフルを構えようとするも、大河原に制止される。正直、話のわかる大河原よりも厄介な男だ。
「その様子を見るに、我がクルーが粗相を働いたようだな」
口から垂れる血を見ながら誰にでもなく呟く大河原。少しタキトウが反応したが、気にする素振りは見せていない。
「痛いのは慣れてるから問題ないさ。問題なのは君らの歓迎の仕方だね。一応、降伏して僕は捕虜扱いのはずなんだけどなぁ」
最初の態度を全く崩さない青木に、全く表情を変えない不気味な面のような顔で大河原は逆に、不満を漏らす。
「捕虜をとるのは軍事組織の話だろう。我々は海賊、お前たちのような国際的なルールやマナーもないのでな」
「そうかい。じゃあ、コーヒーを貰えないかな。無ければ水でもいいけど」
こうした意味の無いように見える応酬も、実際には重要な作戦の1つだった。
「口数の減らない女だな……。だが、俺の質問に答えれば、コーヒーぐらいなら出してやろう」
大河原の提案に、青木は目を輝かせながら快諾する。

「へぇ、気が利くじゃないか。で、その質問ってのは？」
彼の顔に苛立ちのようなものが見えた気がした。わずかに口角がピクリと動いたが、青木は特に気にしていない。
「何が目的だ？」
恐ろしく簡素な彼の質問。青木は素直な感想として、意外というよりはしまったと思っていた。彼の苛立ちは真意の見えない青木へのものだったのだ。
「これは、失礼したよ。じゃ、結論から言おう。君を止めに来たんだ」
なるべく彼をここに引き留め、無意味とわかっていても交渉を続けようとした青木だが、それさえ看過されていたとは思いもしていなかった。
「それはわかってる。そうではなく、一体何のために時間稼ぎをしているのか……を聞いているんだ」
血の気が引いていく感覚がした。髪の毛の先まで凍りつくような緊張感が青木の全身を急襲する。
（やっぱり手強いな……）
一呼吸置き、冷や汗が垂れるのがバレないかヒヤリとしつつも、尚態度を崩さず言い返す。
「時間稼ぎだなんて、人聞きの悪い。僕は平和的に戦争を回避しようとしているだけだよ」
平和的に。という言葉に何か思うことでもあるのか、青木は、一瞬歪めた彼の表情を見逃さなかった。
「平和的に……だと？」
彼の背後に控えるへっぽこトリオと副官が息を飲む。見るからに怒気を含んだ拳を震わせる彼に、恐怖を感じているようだ。
どうやら地雷を踏んだらしい。と、冷静に分析しても『反省しても後悔はしない』という彼女の心情が直後に事態を悪化させることになる。
青木がとあることに気付いたからだ。
「あ……その右腕……!!」
次の瞬間、彼女の首に重たい衝撃がかかる。一瞬息が止まり、間髪

をいれずに金属製の冷たい機械仕掛けの義手がギリギリと細い首を絞め上げていた。
「……俺の右腕が、何だってんだ!?」
視界が白黒に点滅し、世界がぼやける。狭くなった気道が、酸素を取り入れようとするが、物理的に気道が塞がれているため意味はない。
「あ……が……」
「お前にやられた傷さ。ハハッ、お前は都合がいいから忘れてるだろうがな。だが、俺は死ぬまでお前の所業を忘れはしないぞ。地獄に堕ちたって、忘れるものか!」
大河原の声はほぼ青木には届いていない。すでに義手のフルパワーで首を絞められ、数秒の内に気道や血管が塞がったせいで脳へ血液や酸素が届かなくなり、視界は点滅を通り越し、暗くなり始めていた。
「うぇ……げ……え」
(ヤバい……マジで落ちる……!)
口からは血が混じった唾液や泡が止めどなく溢れ、椅子に縛られて身動きが取れない体も小刻みに震える。瞳孔は開ききり、目玉が飛び出しそうになる。とうとう三途の川岸が見え始めていた。
「大船長! やりすぎだって、マジで死ぬって!」
「殺しちゃ意味ねぇって言ってたのアンタだろうが!」
タキトウをのぞく2人の男が、大河原を無理やり引き剥がしたため、なんとか拘束から逃れられた。
「ゲホッ……ゲホ……オェ……」
(訂正しよう。タキトウとか言うのよりもコッチの方が100倍ヤバい)
青木はなんとか息を吸おうとするが、まだ元の太さに戻りきっていない気道が痙攣し、血やら泡やら唾液やらが喉につまり、大きくむせ返る。酸素が全く入らないよりはマシだが。
「離せ、お前たち! コイツは訳が違うんだ、コイツだけは殺してやる!」

「おい、大船長暴れんなよ！　落ち着けって！」
「タキトウ、鎮静剤打ってくれ！」
海賊たちはかなり慌てた様子だ。慣れた手付きで大河原の首もとに鎮静剤を注射すると、しばらくもがいていた彼は次第に抵抗をやめ、呼吸も安定していった。
一方の青木は、突然のことに混乱しつつも、徐々に復活しつつあった。自分の何にでも興味をもって迂闊に首を突っ込む癖は直さなければならない。と、強い教訓と反省を得た彼女だが、同時に情緒不安定にも見える大河原の態度に疑問を抱き始めていた。
（おかしい。僕に恨みがあるのはわかるが、だからといってあんなに急に爆発するものかな……体格も性格も、あの時とは全く違う）
大河原に抱いていた違和感を考察しながら、彼を改めて観察する。無気力な顔と、痩せ細った体。うつらな目の下にある大きなくまに、不安定な精神。さらに鎮静剤を常用的に打ってること。
ここまで来れば、彼がどうしてああなってるのか、嫌でもわかるものだろう。
「まさか、君って……」
そこまで言って、言葉を飲み込む。さすがにさっきの首絞めで懲りた。余計な一言なら言わないが吉だろう。
「……殺してやるぞ、お前の仲間をそうしてからな」
大河原は副官に肩を借され、うわ言のようにぶつぶつとなにかを呟きながら部屋を出ていった。３人の部屋番も、気まずくなったのか、順々に同じく部屋を出ていった。
１人になった部屋で、ようやく大きなため息をつけた。緊張から一時的だが解放され、椅子に全体重を委ねる。ギシリと古い椅子が軋んだ。
「とんでもないこと、具申しちゃったなぁ……この後どうしよう」
軽く言い放つが、内心は作戦が破綻するかもしれない恐怖心と焦りから、穏やかではいられなかった。
結局、彼女が拷問された時間だけ、なんとか稼げただけだった。

海賊たちが全艦を上げて出撃したのはこの３０分後のことである。

第８話　ロケット艦で大ピンチ！

夜も深まりつつある午後７時過ぎ。生き物も眠りにつきはじめたフィリピン東方の静かな南海の風景は、長閑で平和そのものといえた。

ただし、実際問題として海域は平和とは言い難い状況だった。

「敵墳進魚雷迫る！　右舷２時の方向、距離８万（ｍ）」

「囮魚雷（デコイ）散布、２時方向へ２発……いや３発全部撃て。取り舵回避行動」

「主砲、対空自動迎撃開始しました」

「『あねじま』が邪魔だ。面舵回避、第一戦速黒２０」

「主砲、対水上戦闘に切り替え。目標、敵右翼のペリー級フリゲート艦。撃ちぃ方ぁ始めー！」

「旗艦『ほたか』被雷！」

ブルーマーメイド・ホワイトドルフィン連合艦隊第１部隊は海賊『マンボウ旅団』の海賊艦隊と今まさに交戦中だった。

１時間以上前に開戦したこの戦いは、連合艦隊の防戦一方となり、戦況は混沌とし、苦戦を強いられていた。

敵艦隊に近い位置に陣取る戦闘序列第１列先頭に位置する旗艦『ほたか』艦内も、混乱の真っ只中にあった。

「被害確認！」

ブリッジで手すりにしがみつきながら、なんとか体勢を保とうとしている艦長の元にはよくない報告ばかりが飛び込んできた。

「右舷艦橋直下に被雷しました。ダメコン要員を急行させています」

「死傷者は？」

「３人が当該区画にいましたが、生死不明。ブロックを封鎖したので、何とも……」

「機関室は無事です。釜もぴんぴんしてます」

「敵弾来ます！　着弾まで１０秒」

「衝撃に備え！」

またしても敵５インチ砲や７６ｍｍ砲が雨あられと降ってくる。

船体がその度に大きく揺れ、多量の海水をかぶる。ほぼ全艦がすでに被弾損傷し、戦況はますます不利になりつつある。
そんな中でも、艦隊司令官豊島の目から闘志が消えることはない。
「1本喰らった程度でなんだい。この艦はそんなにヤワじゃないさ、沈みはしないよ。それよりも敵ペリー級に火力を集中、ロケット艦を先にやらないと消耗戦で不利なのはこっちだよ！」
豊島の命令に、各員は復唱し、艦隊各艦に指示を飛ばす。
リアルタイム戦況モニターには、輪形陣を組む6隻の敵艦隊と、2列縦陣を保ちつつ、敵の頭を抑えようと回頭する同じく6隻の連合艦隊が映し出されていた。
数の上では互角でも、苦戦するのには理由があった。
「……防空網厚いですね、敵艦隊」
ブリッジに備え付けられた指揮官席の背もたれにしがみつきながら戦況モニターを眺めていた副官が呟く。そう、問題は敵の防空網だ。
「ペリー級が厄介だね。対水上戦闘能力は低いくせに、墳進魚雷をバカスカ撃ち落としやがって」
ペリー級とは、オリバー・ハザード・ペリー級フリゲート艦のことである。墳進魚雷はロケットで小型魚雷をより遠くへ、より速く投射することが目的の兵器だ。それを弾頭が着水する前に空中で撃破する戦法が編み出され、そのための専用艦として建造されたのがロケット防御艦だ。ペリー級はロケット防御艦の中でも小型で、対水上戦闘能力を削った代わりに、高い防空戦闘能力と量産性を持ち、一時はアメリカ支部ホワイトドルフィン主力艦艇として配備されていた艦でもある。
Ｍｋ．１３ランチャーは単発式で、連射速度は劣るものの、高い汎用性により大型魚雷投射ロケット（ハープーン）や、墳進魚雷、対潜墳進爆雷など多彩な兵器を運用できる。
単発とはいえ、百発百中の命中率を誇るＭｋ．１３ランチャーや、７６ｍｍ砲に２０ｍｍ自動機関砲、５インチ砲やシースパローなど、十重二十重の防空網が形成され、墳進魚雷は悉く撃墜され、逆に連合

艦隊が被弾被雷を蓄積させていた。
「やはり、墳進魚雷の着水距離をもっと短くした方が……」
艦隊参謀の1人が具申するが、問題があった。
「いやだめだ。そうなると命中まで時間がかかるし、敵がデコイや音響ダミーを使うかもしれない」
魚雷は、水中ではソーナーを使って敵艦の位置を特定し、主にスクリュー音やエンジン音を探知して攻撃を行う。これから逃れるためには、艦と同じ音を発するデコイを発射し、魚雷をそちらに引き付けるか、もしくは曳航式のダミーに命中させるといった対策が必要になる。
つまり、命中までに対策をとる時間が増え、結局命中しなくなってしまう。かといって無誘導ではそもそも避けられる。
「ですが、あれを沈めない限りはこっちの攻撃はほぼ無意味ですよ。どうするんですか」
参謀たちも頭を悩ますなか、豊島はマイクをとり、とある艦に通信をつなぐ。
「聞こえるかい?」
「はい、おば様。聞こえますよ」
通信機の向こうにいる相手は柔らかな声の持ち主だった。その声を聞くや否や、参謀たちは豊島が何をしようとしているのか理解した。
そして、豊島は短く一言だけ命令を伝える。
「敵陣形をぶった斬ってやれ。頼んだよ神余艦長代理」
通信の相手は戦闘序列第2列先頭に配置されているフリゲート艦『ちちじま』艦長代理の神余だ。彼女は親友兼艦長から預かった艦長帽をゆっくりと被り、力強く答える。
「了解です、おば様」
彼女の返答を待っていたかのごとく、『ちちじま』は急加速し、第1列先頭『ほたか』の前をすり抜け、敵艦隊へ向けて全速で突っ込んで行く。

「機関、最大戦速。少なくとも１０分は維持して。続いて墳進魚雷、８番から１２番まで順次発射用意」
神余の命令に、景気よく復唱し、各員が持ち場につく。
『ちちじま』の役割は、陣形を固持する敵艦隊へ吶喊してこれを突き崩し、ロケット艦を1隻でも多く敵艦隊から引き剥がして味方の攻撃を有利にすることだ。
「……そのためには速攻が命。止まったら死だね」
主操舵手であり、操縦用のスティックを握る斉賀の手にじんわりと手汗が滲む。単艦での突撃は慣れっこではあるが、それでも毎回死に物狂いだ。
「敵艦1隻がこちらに向かってきます、ペリー級です！」
右舷見張り員の関が報告をあげる。コンソールのレーダー画面にもはっきりと映っている。
「一対一（サシ）でやろうってか。おもしれぇ」
左舷見張り員の黒丸にも見えていたようで、自慢の八重歯を覗かせながらニタリと笑う。
「墳進魚雷、目標諸元変更。全弾あのペリー級にぶつけて」
神余の指示に、ＣＩＣから呆れともいえる反応が飛び出る。
「いいんですか、１隻に5本も使って？」
水雷長の十六夜から反論が来るが、ブリッジではどこ吹く風だ。
「いいからやって、十六夜さん。迷ってると敵弾が飛んでく……ほらね」
言い終わらない間にペリー級が主砲を撃ち込んで来ていた。ペリー級の主砲である７６ｍｍ砲は艦上構造物の中央部に配置されている。そのため、前方にいる敵艦に射撃する時には艦を斜めにするか、横向きにさせるしかない。この場合、『ちちじま』は多数の魚雷を撃ち込みやすいポジションにあるといえる。
「７６ｍｍ怖！　ウチの５７ｍｍとは全然違うじゃん！」
双眼鏡にしがみつきながら叫ぶ関。ウィングにいるとやはり迫力が違うのだろう。
「墳進魚雷、諸元変更完了。いつでもどうぞ」

ＣＩＣ指揮官である林の小鳥のような優しい声からは想像つかないほどに物騒なワードを聞き、神余は笑みを浮かべる。
「よろしい、全弾発射！」
直後、艦橋窓は爆炎と煙に覆われ、一時的に視界はゼロになる。５発の墳進魚雷は順次発射され、夜闇に小さな太陽を作り出したかのような目映い光を放ち、ペリー級の方へ飛んで行く。
近距離での墳進魚雷一斉射に、ペリー級は露骨に慌てていた。自慢のＭｋ．１３ランチャーはすでに反応できる限界距離を超えており、こうなれば主砲を含めた兵装を対水上戦から対空戦に切り替えなければならない。
その一瞬の隙にを神余は見逃さない。
「主砲、対水上戦闘！　わざと当てないように撃って！」
ＣＩＣから聞こえるやる気のない返事に頷き、墳進魚雷の航跡を確認する。既に低高度巡航に入っているが砲撃で１本が撃墜されていた。だが、それも作戦の内だ。
改インディペンデンス級の主砲であるボフォース５７ｍｍ砲Ｍｋ．４はペリー級のオート・メラーラ７６ｍｍ砲に比べれば威力も低く、正規外洋艦相手では性能不足であることは否めない。しかし、それをあり余った速射性能がある。しかも、当たらないとあれば油断も生じる。
敵は迫り来る墳進魚雷と当たりそうで当たらない砲撃の両方の攻撃により、プレッシャーを与えられ続けるのだ。
「墳進魚雷第一波、命中まで１０秒……」
ＣＩＣからの報告に、艦橋で緊張が走る。そして、その直後、４つの水柱がペリー級を包み、その３０００トンクラスの船体は瞬く間に炎上し、致命的な打撃を被った。
『ちちじま』の艦橋、ＣＩＣには歓喜の声が溢れる。
「やった、やった！　撃沈です、ペリー級１隻撃沈！」
関が双眼鏡を覗きながら嬉しさのあまり小さく跳び跳ねながら報告する。
「艦長どの無しでも案外イけるな、アタシら」

黒丸もニヤリと笑みを浮かべながら言う。確かに、青木なしでの作戦は初めてだ。興奮するのも無理はない。
「……ふぅ」
まずは1隻の敵艦を撃沈し、安堵する神余。だが、同時に自分の技量が親友兼艦長に全く届かないことを強く自覚していた。
「彩のようには行かないな……って顔してるでしょ？」
斉賀の言葉に息を呑む。また見透かされていたようで、少し悔しい。
「まぁね。きっと彩なら2隻同時にやってただろうし」
「言えてますね」
柿沼は笑いながら答える。神余は確かに優秀だが、柔軟で大胆な思考回路を持つ青木には敵わない。彼女がうまく戦えるのは、青木の指揮を間近で常に見てきたからだ。真似事は出来ても、本人にはなれない。
「そこが悔しいところなんだよね。あの子の隣にも立てない」
（それが寂しい……だなんてはさすがに言えないか）
神余の独白は誰にも伝えたことのない本音だった。少なくとも、まだ数時間は伝えられないままの。
「艦長代理！　敵艦撃沈の高揚感に浸るのもいいですが、まだ敵いますからね!?」
関の言葉に、ようやく艦橋は戦闘態勢に戻る。そうだった、まだ戦いは続いているんだ。全員が現実に引き戻った頃、今度は敵陣形中央に居座っていたスプルーアンス級が動き出す。
「来ました、ボスキャラです。スプルーアンス級、ペリー級各1隻ずつ、本艦に接近します」
ＣＩＣから届く報告に、ブリッジメンバーは再び気を引き締める。
しかし、神余が指示を飛ばすより先に、スプルーアンス級とペリー級の横腹に水柱が上がる。
「んん？　急に敵艦がやられましたよ？」
双眼鏡を覗いていた関が不思議そうに言う。誰が答えるでもなく、答えはすぐにわかった。

「あの連携技……高崎姉妹ね」
『ちちじま』後方から急速に近付く2隻の艦影、ブルーマーメイド随一の戦果を誇る双子の姉妹がそれぞれ艦長を務める『あねじま』と『いもうとじま』だ。
『あねじま』艦長は姉の高崎直葉（たかさきすぐは）。『いもうとじま』艦長は妹の高崎直子（たかさきなおこ）だ。
「お姉ちゃん遅い。もっと早く」
妹の直子はふてぶてしく言う。容姿は全く見分けがつかないほどに似ている2人だが、性格は真逆だ。
「うるせぇなぁ、間に合ったんだからいいだろうが」
粗暴な言葉遣いなのは姉の直葉だ。一見して凸凹、仲の悪そうな2人だが、実戦では幾度となく仲間の窮地を救い、多くの人命を守ってきた生粋のブルーマーメイド隊員だ。今この瞬間にも『ちちじま』の救援に駆け付けたことからも、勇敢な性格がうかがえる。
「お姉ちゃんは右、私は左やるね」
一方的に姉に伝えると、文句を言いたげな相手を無視し、直子は通信を切った。『いもうとじま』はさらに増速し、敵艦隊の右側へ艦首を向ける。
「仁科さん。多少『あねじま』に当たってもいいから砲撃始めて」
砲術長に命令を入れると、乱暴な操艦で左に回り込もうとする『あねじま』が見えた。文句を言わせると面倒なので、いつも押し付ける時はガチャぎりで用件を伝える。面倒くさがりだが、同時に負けず嫌いなので、意外と素直に言うことを聞いてくれるのだ。
「あとでお姉ちゃんにうどん奢らないとなぁ」
敵艦隊への突入を前に、なぜか呑気な彼女を尻目に、戦況は刻一刻と有利な状況に変化しつつあった。
「『ちちじま』、一旦後退します。あと高崎姉妹への援護お願いします」
神余の意見に、通話越しに豊島が了解する。
「わかってるよ。それについてはもうやってる」
ちょうどその時、第1列各艦が墳進魚雷を発射しているのが見えた。今度は大型魚雷（ハープーン）投射ロケットまで撃ち込み、一気に攻勢に出てい

るようだ。
「キメに行ってますね、司令」
「案外呆気なかったな」
「所詮は海賊ってことかな～？」
　艦橋メンバーも口々に呟く。確かに、連合艦隊は優勢だ。だが、果たしてそれが勝利に繋がるだろうか。
「さて、どうかな」
　神余はポツリと呟く。説明できない胸の中の違和感を拭いきれなかった彼女は、いたずらに増幅するそれに不安を抱いていた。
「久美、嫌な予感がするんでしょ？」
　千春の言葉に頷き、続ける。
「うん。どうも変な感じがする。大河原にしては消極的すぎるし、なにより数が足りない」
「ペリー級3隻しかいないしね。情報なら5隻以上だったのに……」
　悩む2人だが、すでに勝利ムードな他メンバーはどこ吹く風だ。
「情報が間違ってるんじゃないですかね。正式な数はけっきょくわかんなかったですし」
　関の言葉に、他の2人も続く。
「もしかしたらそもそも大河原も来てないんじゃないか？　すでに体はヤクと怪我でボロボロらしいしな」
「確かにそれも一理あるね、黒丸さん。でもね……」
　考え込む神余だが、答えは出ない。そもそも敵アジトがどうなってるかもわからない。敵は本当にこれで終わりなのか、何故今このタイミングで蜂起するのか。敵の本当の狙いはなにか。
「……彩だったらどうするかな」
　滅多には見られない、神余の自信のない表情に、艦橋メンバーは言葉を詰まらせる。
　こうなればただならないことが起きるのが確定だからだ。
「……ていうか、我らが艦長どのは無事なんだろうな……」
　黒丸が言い終わらない内に、嫌な予感は最悪な現実となって実現する。

「ＣＩＣより艦橋へ。至急、至急の電文です！」
「何？」
マイクをとった神余の表情がみるみる凍り付く。
「わかった。うん、了解」
艦長帽を脱ぎ、髪の毛をかきむしる神余。戦慄する艦橋メンバーに、ようやく最悪な知らせが届けられる。
「悪いニュースが２つある。悪い方とより悪い方、どっちから聞きたい？」
「……悪い方から」
神余はゆっくりと返答する。
「悪い方のニュースは、第２部隊が来れなくなったこと」
「……は!?」
困惑するメンバーを尻目に補足説明を始める。
「第２部隊が敵潜水艦艦隊の奇襲を受けたらしい。現在それと交戦中。足の遅い輸送艦もいるから苦戦しているみたい」
彼女の言葉に、艦橋メンバーは落胆の声をあげる。
「そんな……この『ヤマタノオロチ作戦』自体、第２部隊あっての作戦ですよね？　それが来れないなんて……」
「……より悪い方は？」
ここからが本題と言わんばかりに、神余は怒りさえも携えながら口を開く。
「敵の増援艦隊が２個も来ている。しかも、未確認のイージス艦らしき艦影を認める艦隊だ」
「……イージス……艦……」
静寂が制圧する艦橋に、副長席の肘掛けを強く強く叩き付ける音だけが響く。
「騙されたんだ……最初っからずっと……敵の作戦にのせられてたんだ！」
有利な戦況は一転し、今や三方から包囲される危機に直面した連合艦隊。
悪化する戦場に、焦りを感じつつ、神余の脳裏には親友兼艦長の姿

が浮かび上がっていた。
「彩……私たちの身に何かあったとしても、貴女だけでも無事でいて……！」
フィリピン東方の海域は、闇と重油と、下衆な思惑で塗りつぶされようとしていた。

第9話　アジトでピンチ!?

フィリピン東方の南海海上。海賊『マンボウ旅団』アジトへ向け、2隻の艦が全速で航行していた。1隻は水上で波を裂き、もう1隻は水中を疾走していた。ブルーマーメイド作戦艦艇『まごじま』と、ホワイトドルフィン潜水艦『ながしお』だ。

「増速？　もう無理ですよ。エンジンが焼けちゃいます」

機関室からの報告にため息をつくのは、『まごじま』艦長の黒橋（くろはし）だ。ブルーマーメイド一筋で20年以上現場に留まっている大ベテランの1人だ。

彼女らはブルーマーメイド・ホワイトドルフィン連合艦隊第1部隊から分離先行し、敵アジトへ偵察のために潜入し、第2部隊地上班支援のためのアジト内のマッピングや人質を確保することが任務だった。

「本隊が奇襲されているらしい。そっちに行くべきだと思うかい？」

黒橋の言葉に、副長が進言する。

「今行ったところで、何にもならないかと……。第2部隊も来れなくなった今、地上部隊は我々だけです。『ヤマタノオロチ作戦』は続行するべきかと」

黒橋は頷き、地上班隊長八巻（やまき）にも意見を仰ぐ。

「ふむ。地上班としてはどうだい？」

「副長と同意見です。しかし、本来300人規模の兵力を投入するはずだった作戦に、本艦と『ながしお』の地上班全員を合わせても40人に満たない数で挑むことになります。苦戦は免れないかと」

「ふーむ……」

顎に手を置いて思案する黒橋。明らかに不利かつ、危機的な状況だが、人質のことを考えれば多少強引でも作戦は続行するのが吉だろう。

「ところで、飛行船からの連絡は？」

アジトの情報収集のために発進させてた飛行船のことを思い出した黒橋はその事を副長に問いかける。

「まだ特に連絡はありません。しかし、敵は人質奪還のことも考慮に入れているはずですし、何らかの艦艇は残されているかと」
黒橋はまた考えるポーズをとる。作戦続行はヨシとしても、果たしてどう動くべきか。考えを巡らせようにも1人では限界があった。
とそこへ、ちょうどいいタイミングで通信が入ってきた。
「艦長、『ながしお』の草川（くさがわ）艦長から通信が入ってます」
渡りに船とはこのこと。即座に電話回線を開くように指示し、艦長席に据え付けられている受話器を手に取る。
「ちょうどアンタを呼ぼうとしてたとこだよ」
「これは奇遇。俺たち気が合いますなぁ！」
電話越しに聞こえるお調子者の声。いかにもな風貌のザチャラ男、草川艦長だ。
「今は冗談言ってる場合じゃないよ。草川艦長」
またしても大きなため息を吐いて言う黒橋。この状況でやたら明るいのは逆効果だろう。
「まぁまぁ。挨拶はこれくらいにしといて、本題にはいるぜ黒橋さん」
「急に喋りすぎだよアンタ」
草川のペースにのせられそうになるが、なんとか耐え、話を続けさせる。
「俺たち『ながしお』は敵にバレないように先行チームを送るのが任務だろ」
草川は話を続ける。
「そこで、だ。チームを送ったら、その後は『まごじま』の護衛が任務だろ？」
「そうだね」
自分勝手なようで、しっかり黒橋に話を合わせている。根は真面目なのだろう。
「だが、敵のアジト近海はやたらと水深が浅い。深いところでも１００ｍもない。近くにはフロート艦もいるし、潜水艦は超不利だ」
雑音混じりの水中電話越しに、彼は続ける。
「で、今になって第1部隊に敵が襲撃かけてる。それで思ったんだが

……」
草川が何を言いたいのか、黒橋はなんとなく勘づき始めた。
「……もしやアンタ、第1部隊援護に向かおうってんじゃないよね？」
電話越しに、彼の愉快な声が聞こえてくる。
「ビンゴ！　さすが黒橋さん」
「……はぁ～～～」
ここ数十年で一番のため息を吐く黒橋。ブリッジクルーもなんとなく、彼の提案がどんなものか察していた。
「どしたんすか？」
「どしたんすか、じゃないよ。トンでもないこと言い出しおってに」
護衛役がその仕事から離れようと言う提案に、二つ返事でいいよなんて言えるはずもない。普通なら、だが。
「でも、黒橋さん。その反応からしてあんたも同じこと考えてたんじゃないの？」
黒橋は少し黙る。図星をつかれたからだ。草川はその隙をついて自身の考えを伝える。
「軽く俺の考え伝えとくっすよ。まず、『まごじま』は敵アジトのレーダー範囲外で待機する。その隙に全速で本艦が敵アジト近海に向かい、チームを発進させる。で、その後に本艦は第1部隊援護に向かう。俺たちと入れ替わりに『まごじま』が突入して敵の注意をひく。砲台の破壊と同時進行でチームが動きやすいように囮になるわけっすね。で、チームが人質を確保したら、あとは『まごじま』の地上班も乗り込んで敵アジトを制圧する……ね。簡単だし、第1部隊にも援護が出来る、良い作戦だと思うんすけどね」
簡単ではないだろう。というツッコミを入れたくなるのを我慢し、一口に説明される作戦を頭にインプットする。確かに悪くない。むしろ現状を考えれば最良と言えるだろう。しかし、問題もある。
「簡単かどうか置いといて、問題はありそうだね。もし、敵アジトにかなりの数の艦艇が残っていて、『まごじま』では倒しきれなかったらどうするんだい」
「それは無いっすよ」

あまり堂々と言い切る彼に驚く黒橋。楽観主義か、それとも偵察の結果か。
「なぜ言い切れるんだい？」
雑音が酷くなってきた水中電話越しに、彼は続ける。
「まず、第１部隊を襲撃した部隊がかなり大規模なことっすね。確認されている『マンボウ旅団』全艦艇とほぼ同数が戦線に到着したみたいっすからね」
意外としっかりしているじゃないか。黒橋は出かけた言葉を飲み込み、さらに彼の作戦を聞く。
「だが、潜水艦は？　奴ら相当な数の潜水艦も持っていたはずだが？」
それについても大丈夫っす。と、彼は前置きし。
「第２部隊を襲撃した潜水艦隊もかなりの規模っす。１０隻前後の群狼戦術らしいし。レポートによると『マンボウ旅団』の潜水艦は多くて１２隻。最低でも８隻くらいなんで、ほぼ全艦で間違いないっすよ」
「なるほどね」
やはりしっかりと考えられている。データも根拠もはっきりしてるし、フラフラしてるただのチャラ男と思っていたが、なかなかどうして対した男だ。若冠２５歳で潜水艦艦長になった経歴は伊達ではないようだ。
しばし考え込むポーズを取る黒橋。
（人質のことを考えれば、時間は多くない。青木艦長の安否も不明だし、第１部隊もすぐさま救援に向かわなければ間に合わないかもしれない……）
１人で考えても仕方ないと、メインクルーや八巻にも意見を仰ぐ。
「副長はどう思う？」
横で話を聞いていた副長は少し唸った後、考えを述べる。
「概ね草川艦長に賛成です。でも、もし敵艦隊が現れた時を思うと……」
素直な意見だ。『まごじま』は改フリーダム級の１隻。元々艦隊決戦が得意な艦とは言えないのだ。

「地上班としてはどうかい？」
今度は艦橋に集まっていた地上班幹部に聞く。代表して八巻が答える。
「地上班としては、艦隊戦について言うことはありません。しかし、どちらにしても人質確保のための斥候は必要ですし、『まごじま』が注意をひく必要もあると思います。草川艦長の策が最善かと」
他の幹部、メインクルーも概ね賛成のようだ。少し懸念は残るが、こうなればやるしかあるまい。
黒橋は艦長帽を被り直し、草川に見解を伝える。
「草川艦長、貴官の案に賛同する。作戦準備に入ってくれ」
その言葉に、メインクルーたちはそれぞれ持ち場につき、地上班は突入に向けた準備を始める。水中電話の向こうから聞こえる草川の喜びの声を尻目に、黒橋は正式に命令を出す。
「全艦、作戦開始せよ」
クルーの復唱を聞くと同時に、『ながしお』は鳴動し、全速で『まごじま』から遠ざかっていった。

同時刻、『マンボウ旅団』アジト地下、監獄区画にて。
時計も窓もない特別室には時間を推し測れるものはなく、どれほどの時間が経ったのか、わからなくなっていた。
時々、海賊の見張りが部屋を覗きに来るくらいで、それ以外は全く変化のない寂しい部屋で、青木は焦り始めていた。
（皆無事かな……）
脳裏に過るのは仲間たちの顔だった。弱気になってはならないと自分に喝を入れようにも、四肢を縛られ、体の自由が効かない現状では限界があった。長く同じ姿勢なのもあって血流も悪くなり、思考も纏まらない。頭が常にぼやけるような感覚だ。一度寝てすっきりしようにも、海賊が常に見張っている状況ではリラックスも出来ず、そもそも奴らは寝るのを許さないだろう。
（聞いてみるか……）
まともな答えが返ってくるはずも無いが、物は試しだ。

「ねぇ、見張りさん。今何時かな？」
少し間を空けて、鋼鉄製の扉に備え付けられた小窓が開き、海賊が顔を覗かせる。
「知るかよ。話しかけんな殺すぞ」
乱暴な言葉を投げて、小窓はピシャリと閉められた。やはりだめか。と、肩を落とすがショックを受けてばかりではいられなかった。
（予定通りなら、特殊部隊が潜入を始めるはず。騒ぎになる前に、なんとか脱出の手がかりを見つけないと）
だが、武器はもちろん、ヘアピンなどの金属製品も没収され、手足を縛る縄を破る方法はない。腕力だけでは到底外せないし、そもそも力が入らない。隙を見計らって海賊の装備を奪うのが一番だが、多数が相手では不利になる。1人から武器を奪って脱出しようとしている隙に他の海賊に撃ち殺されるのが目に見える。
纏まらない脳内であれこれ考えていると、見張り達に動きがあった。どうやら誰か来たようだ。
「いいんですか？　大船長に断りなく」
「殺しちゃったら大船長に殺されますよ。タキトウさん」
聞き覚えのある名前に、脳は一気に冴え渡る。大河原の次に注意すべき人物の名だ。
「いいんだよ。ちょっっとお話するだけだからよぉ」
声を聞くだけでもわかるほどに酔っているらしい。尊大な言い方は、酒を呑んで気が大きくなったからか、それとも元々幹部クラスなのか。
「……わかりましたよ。ただし、半殺しに留めてくださいよ。俺たちまで大船長に殺されちまう」
「わーかった、わーかったから」
直後、仰々しい音を立てて鋼鉄製の扉がゆっくりと開く。アサルトライフルやらで武装した不安げな表情の2人の見張りと、鼻が曲がりそうなほどの酒と何か別の臭いを放つ男、タキトウが立っていた。どうやら居残り組だったらしい。仲間と酒盛りでもしてたのだろうか。
「じゃ、くれぐれも頼みますよ」

「へいへい」
タキトウは筋骨隆々な体躯をフラフラさせていた。大分酔いが回っているらしい。
「……ずいぶん呑んでいたみたいだね」
少し言葉を選んでから発言する。この男を少しでも怒らせたら何をされるかわからないからだ。
「んん、まぁな。前夜祭ってとこかな」
意外と普通に返答することに青木は少し面食らう。素面の時よりも幾分か言動が丸くなるのだろうか。
「なるほどね。……前夜祭のわりにハメを外しすぎじゃないかな？」
タキトウが何をしたいのかまだわからないが、素直に会話が成立することに違和感を感じるのはすぐだった。
「あぁ、俺たちがブルーマーメイドの阿婆擦れ共に勝利する記念日の前祝いだからなぁ、嬉しくもなるさ」
「え……」
タキトウの言葉に、思わず声が漏れる。背中に嫌な汗が吹き出し、脳内は不穏な思考に戦慄し、しばし硬直する。単なる威勢だけの戯れ言などではない、本気の言葉だ。アルコールが気を大きくしているわけでない限り、その言葉は真実だろう。
嫌な思考が瞬間的に脳内を巡ったのを察知したのか、タキトウはニヤつきながら青木の顔を覗き込む。
「そう、その表情が見たかったんだ。勝ち気で一歩も引かねぇ強ぇ女が恐怖で顔を歪めるやつ……たまらねぇな……」
薄暗い照明に照らされる彼の不気味な笑顔に対抗し、反射的に彼を睨み返すが、恐怖に堕ちた女の顔をしたあとでは効果はない。
「……どうして、ブルーマーメイドが負けると断言できるんだい？ウチの艦隊はそっちの倍以上の戦力がある。そっちに勝機があるようには思えないけどね」
ハッタリをかましたものの、タキトウはきょとんとして青木を見つめるだけだった。少し後に静かに笑い始める。不気味な笑い声だ、今更ながら悪趣味な男であることを確信する。

「クックック……『ヤマタノオロチ作戦』……だろ？」
「!?……」
　思わず息を呑む。まさか作戦がバレているのか？　いや、自分を揺すろうとしているだけかもしれない。もしくはすでに潜入していた味方を捕まえて吐かせたのか……。思考をさまざま巡らせるが、動揺を感じ取ったタキトウが歪んだ笑みを浮かべる。
「ぜーんぶ知ってるぜ俺らは。２個にわけた艦隊で時間差攻撃するんだろ？　その隙にアジトに乗り込んで制圧するのも、お前が俺たちの気を引くためにわざと捕まることも……な」
　最悪、その一言に尽きる。なぜ作戦が短時間の内にバレたのか。疑問に対する答えがあっても、それを鵜呑みにすることはできなかった。考えたくもないからだ。
「……なぜ作戦がそうだと言い切れるんだい。　君らの勘違いかもしれないよ？」
「さぁな。俺は下っ端なんでその辺については知らねぇよ。ま、お前らん中に内通者でも紛れてんじゃねーのか？」
　白々しい物言いは完全に黒だ。信じたくない説が真実であることを知り、青木はより思考速度を加速させる。
（スパイがいるのはどうやら確実。いや今はその事よりも敵に作戦がバレてることを味方に伝えなきゃ……でもどうすれば……）
　タキトウの持ち物を確認しても、通信装置の類いは見つからない。もしあったとしても遠く離れた艦隊には出力不足で届かないだろう。では、ここで拘束を解いて敵の通信室を使って……これもダメだ。通信室が何処にあるかわからないし、そもそも敵は３人。拘束を解いても射殺されるだろう。
　打開案は見当たらない。タキトウはそうして焦る青木を見て興奮しているようにも見えた。どうやら異常性癖の持ち主でもあるようだ。
「ああ、あとついでに言っておくがな。お前らの艦隊は既にウチの艦隊が奇襲かけてるぜ。今頃全滅してるだろうな、ハハッ！」
「な……」

身体の芯から凍り付く感覚がした。良くない想像と、予想が脳内を巡るが、それに集中することは許されなかった。
タキトウが拳銃を抜いたからだ。
「っつー訳でよ。大船長が帰ってきたらお前も殺(バラ)されるのさ。余興として、他に捕まえた女どもの目の前で首を落とすってのもありだな」
おおよそ常人のそれではない残虐極まる言動に、青木は恐怖する。仲間がやられ、泣きじゃくって命乞いをしながら無様に果てる自身の未来さえ想像してしまう。
根元的な恐怖は、目の前に映る現実(リアル)でしかない。止まらない手足の震えをごまかそうと強気に振る舞うのも限界があった。
「さて、どうかな?」
なんとか絞り出した言葉でさえ、もはや届かない。へらへら不気味に笑うタキトウは、無敵状態。一瞬でも会話が成立すると思った自分を嘆くしかなかった。
「へへっ、そうやって強気でいられるのも今のうちだぜ」
そう言いながら、彼は拳銃を青木の足に押しつける。反射的にビクリと反応するのを楽しむように、銃口を足から腹、胸まで這わせる。
「……っ」
思わずあげそうになる悲鳴を圧し殺す。耐える。しかし、それも彼にとっては欲求を満たすスパイスだった。
「へへひひ……さぁて、本題はここからだ。すぐにぶっ壊れんなよ」
眉間に銃口を押しつけられる。冷たい金属の感触が、青木の身体の芯の芯まで冷やしていた。
もはや自分の運命など考えるまでもなかった。
迫る死の予感に、彼女の本能は死んだ親友のことを欲していた。
「エリカ……」
彼女の意識は微睡み、ただ刹那の内に、彼女の中にある記憶を呼び覚まそうとしていた。

第9．5話　人魚は泳ぐ

２００８年　春。佐世保女子海洋学校。
桜の花が散っている。港に停泊する艦の甲板に降り積もる桜の花びらは、生徒達の新たな船出を祝福しているかのようだった。卒業式を直前に控え、浮き足だってはしゃぐ生徒達を、ショートカットの青みがかった黒髪の少女が艦橋から眺めていた。
「皆はしゃいじゃって……」
憂いを帯びた目で見つめる彼女は、大型直接教育艦『霧島』の艦長、青木彩だ。
「貴女ははしゃがないの、青木艦長さん」
声のする方へ振り向くと、見知った顔があった。少しカールした栗色の長髪を揺らす彼女は、優しく彩に語りかける。
「エリカ……いつの間に来てたんだい？」
山本エリカ。彩の親友で、超大型直接教育艦『紀伊』の艦長だ。
「たった今。黄昏てるとこ邪魔しちゃった？」
「いいや、別に」
彼女は自然と彩の横に来ると、一緒にはしゃぐクルーを眺め始めた。
しばらくそうしていると、風が吹いてきた。エリカは髪を抑え、慈悲慈愛に溢れた笑顔を見せている。
「……キレイだね、エリカ」
彩の言葉に少し驚き、フッと笑い出す。
「急になに？　そんなの今さらでしょ」
眩しいエリカの笑顔に、彩はどんどん惹かれていく。
「エリカ」
彩はエリカの顔を覗き込む。何をしたいのか、どうしてほしいのか。エリカは彩を受け入れた。
「いいよ」
エリカの肩に手を回す。お互いの鼻息でくすぐったくなる。そして、唇を合わせ……。

「艦長ぉ、何してるんですかぁ?!」
甲板にいたクルーが声をかけてくる。残念そうな彩の唇をエリカは人差し指でふさぐ。
「残念。またあとでね」
手をひらひらと振って、エリカは足早に艦橋を降りていった。
艦橋には呆気にとられ、ただ立ちつくす彩だけが残された。
クルーの声が、やたらと遠くから聞こえてきた気がした。

２００９年　夏。長崎県佐世保市。
暑い夏の昼下がりだった。横須賀と比べてまだ陸地が多く残っている佐世保では、基地や学校などの主要施設のほとんどが陸上に設置されていた。そのため、船よりも車の方が馴染みの深い珍しい街だった。
「……暇だ」
彩はその日、非番だった。ブルーマーメイドに正式配属になってからは多忙な日々を過ごしていた彼女にとっては貴重な休日だった。……が、同期の友人である久美や千春は休日が合わなかった上、エリカとも連絡が取れていなかったため、1人で市内をドライブするという、実に寂しく、暇な時間を過ごしていた。決して、この3人以外に友人がいないというわけではない。そう自分に暗示していた。
信号に引っ掛かり、考える時間が増える度に悶々とする。そうしていると突然、車の窓をノックする音が聞こえた。音のする方を見ると、見覚えのある青いワンピースの人物がいた。
「エリカじゃないか。どうしてここに?」
その人物は親友兼幼なじみの山本エリカだった。笑顔でこちらを覗き込む彼女に、彩は驚きを隠せない。
「たまたま今日休みになってね。散歩してたら彩の車見つけたから」
彩は驚きつつ、エリカに助手席に乗るよう促す。出会いは意外な所で起こるものだ。
「エリカが今日休みだったなら、こんな寂しいことしてなかったのに」
苦笑する彩に、助手席に乗り込みながらエリカは申し訳なさそうに

言う。
「今朝入港したんだよ。ごめんね、連絡もせずに」
　両手を合わせて悪戯っ子のように謝る彼女が眩しかった。理由なんてどうでもいいほどに可愛らしい笑顔だ。
「いいよ、気にしなくて。……それよりも行きたい所あるかい？」
　その言葉に、エリカは少し考えるポーズを取ったあと、じゃあと前置きして答えた。
「セイルタワーがいいな」
「学生時代にも何度も行ったじゃん。相変わらず好きだね」
　そう返しながら、彩は車を発進させた。
　海上安全整備局　佐世保史料館。セイルタワーと呼ばれ、親しまれている佐世保のランドマークだ。旧海軍からブルーマーメイドに至るまでの日本の海上安全整備機構に関する展示物が多い歴史博物館でもある。古い建物と新しい建物が融合する、今のブルーマーメイドを象徴する建造物の1つだ。
　その3階、ブルーマーメイドの歴史に関する展示コーナーの人気は少なかった。平日だからか、疎らに人がいるだけの館内は静かだった。そのため、2人の来館者は展示物をじっくり、時間をかけて眺めることができていた。
「ほらこれ、佐世保校の初期の姿。今とは違って小さなフロート艦の集まりだったんだよ」
「学校で習ったよ」
　はしゃぐエリカのすぐ横で、ばっさりと返す彩。昔から言いたいことはすぐに言う性格だった。
「さっきから彩そればっかりでつまんない」
　頬を膨らまして大袈裟な怒り顔になるエリカに、彩はまた少し笑う。
「はは、だってもう数えきれないほどここにきてるじゃん。その度に同じこと言われたら飽きるよ」
　バサバサ切り捨てる彩だが、エリカも負けていない。
「そしたらその度に私を楽しませないと。デートの基本だよ」

「え、デ……は!?」
急にデートなどというワードが出てきて彩はわかりやすく狼狽える。
「ふふふ、彩のその驚いた表情可愛いから好き。でも声は抑えないとね」
人差し指を唇にあてるジェスチャーするエリカ。あわてて口を抑えるも、他の来館者がこちらをみていた。恥ずかしい思いをしたものだ。
「エリカってば……」
困り顔の彩に満足したのか、次の展示を見に行くエリカ。心なしかスキップしているようだ。
そしてふと、とあるショーケースの前で立ち止まる。あぁ、いつもの場所か。そう思った彩はエリカのあとを追いかける。ショーケースの写真の人物は、ブルーマーメイドなら誰もが知っている伝説の男だった。
写真の下に置いてあるプレートにはこう書いてあった。
―横須賀女子海洋学校初代主席教官　山本五十六―
「エリカの……ひいおじいさんだね」
小さく頷くエリカ。彼女の姓である山本はあの山本家のことだ。正確には彼女は分家の扱いらしいが、それでも現在まで絶大な影響力を残しているのは変わらない。彼女も、幼少期からその事を常に自覚しながら生きてきたという。
「……会ったこともないひいお祖父さんと比べられるのはもう慣れっこだけどね」
それでも、と一言おいてエリカは続ける。
「やっぱりわかんないよ。ただ彼のひ孫っていうだけで皆から勝手に期待されて、勝手に失望されて、勝手に褒められて……恨んだことないなんて言えばウソになるね」
いつもそうだ。ここに来ると必ずエリカは彼と対話を試みる。会ったこともない曾祖父に振り回される人生など、彩には想像もつかないことだった。

そして、こういう時に気の効いた台詞を言えないのが彩だ。だから彼女は何も言わず、ただ話を聞き、彼女の横に立っている。
「……エリカは……これでいいの？」
エリカの手をゆっくりと、優しく握りながら尋ねる。
「うん」
エリカは短く答えた。その後はしばらく2人で、写真の中の彼を眺めていた。

セイルタワーの帰り、駐車場に止めていた車内で、2人はキスをしていた。
なるべく時間をかけて、お互いを深く味わうように。
エリカが舌を入れてくれれば、彩は負けじとやり返し、彼女のピンク色の艶やかな唇を舌で濡らす。
それを繰り返している間は、2人にとって至福の時間だった。誰にも邪魔されない、2人だけの時間。
エリカが唇を離せば、それが終わりの合図だった。
「……甘い……」
彩はポツリと呟く。エリカの全てが、彩にとっては間宮に勝るほどの甘味だった。
「へんたい」
クスリと笑い、エリカがそう言うのがいつものやり取りだった。
「今日は楽しかったよ。卒業以来久しぶりに会えて」
彩の言葉に、エリカははにかみ顔になる。
「私も。お互い仕事が忙しいもんね。私なんて呉勤務だし」
卒業後、エリカは佐世保ではなく呉に配属されることが決まっていた。というのも、彼女は元々呉本校に入学することが決まっていたのだが、色々あって佐世保校に入学することになったらしい。詳しくは知らないし、教えてくれないが、恐らく家の都合だろう。
「勤務地が離れると辛いね」
「だよね」
エリカの笑顔はまぶしい。近くで見るとよりそれを実感する。こ

んなに可愛い娘をついさっきまで自分は……。
そう思うと征服欲と独占欲、そして何故だか少しの罪悪感を感じた。
「……」
「……」
少し気まずい。勢いでするからいつもこうなるのだ。雰囲気重視なのはいいが、すこし向こう見ずすぎる。どうやらその場のノリに任せる癖があるようだ。
そして、その空気を打開しようと手を打ったのは彩だった。
「ねぇ……もう一回しない？」
反省しない女である。自分の口から出た言葉を耳で受け止めながらそう思う。だがしかし。
「いいよ」
あっさりとエリカは了承した。またあの眩しい笑顔で。
「うん」
エリカの肩に手を回し、彼女の顔を覗き込む。吐息がほほを湿らせ、柔らかな唇に舌を這わそうとする……が、直後に鳴ったケータイの着信音でコトは中断してしまった。
「あ、ごめん」
申し訳なさそうにケータイを確認するエリカ。仕事のことだったら遅れれば一大事だ。だから彩も何も言わず、彼女がケータイを見ることを許した。
「……久美からメールきてる。仕事終わったから一緒にお茶でもどう？　って」
それはいい案だ。そう思うと同時にコトの最中を中断されたことに少しヤキモキする。
「いいね。久しぶりに3人集まれるし」
しかし、仮にもブルーマーメイド隊員だ。切り替えの早さは自慢できる。
彩の言葉に、エリカが付け加える。
「3人じゃなくて、4人……ね。千春も来るって」

笑顔で言う彼女に、彩は頬を緩める。
「じゃあ、久しぶりにあの紅茶が飲めるのか。それは楽しみだね」
千春の淹れる絶品の紅茶に胸を躍らせる彩。と、その横で少し浮かれない表情のエリカ。
「う～ん……たしかに千春の紅茶は美味しいけど、私コーヒー派なんだよね」
そういうエリカに対し、彩は。
「いいじゃないか、たまには……ね」
「それもそうね」
気持ちを切り替え、エンジンをかける彩。さっきまでの湿っぽい空気はすっかり入れ替わり、友人との一時を楽しみにするごくごく普通な光景に戻っていた。
２人を迎えに行くため、彩は車を発進させた。

２０１２年　秋。ブルーマーメイド沖縄第４フロート艦。
「エリカ、本当に行くの？」
フロート艦ドッグの第５埠頭（バース）には、２人の隊員がいた。１人は、重巡洋艦『るもい』艦長の山本エリカ。もう１人は旗艦作戦部参謀の青木彩だ。
間も無く日が落ちるという時間だったが、作戦準備のために隊員たちは慌ただしく動き回っていた。
そんな中、心配そうな表情の彩はエリカを引き留めようとしていた。
「もちろん。命令だからね」
エリカはいつも通りの笑顔を見せてくれる。何でもないと言う彼女の言葉が、今回ばかりは逆効果だった。嫌な予感は増幅する。
「たしかに、命令だけど……。そうじゃなくて、今回の敵は今までとはワケが違うんだ。あの男、大河原は……」
そこまで言うも、エリカは彩の口を人差し指でふさぐ。落ち着いて、という彼女のジェスチャーだ。
言う通り、少しばかり頭を冷やした彩は、泣きそうな顔でエリカを

見つめている。
「わかってる。心配してくれてるんでしょ？」
眩しい笑顔だ。この笑顔を見ると、気持ちが和らぐ。深呼吸して心を落ち着かせた後、改めて彼女に問う。
「……本当に行くんだね。ならもう止めないよ。けどあの男には十分気を付けるんだよ、いいね？」
エリカの肩を掴み、冷静に、丁寧に彼女の目を見て問う。エリカは静かに頷いた。
「作戦のことなら心配はないよ。だって彩が考えた作戦だもの。絶対成功するよ」
優しく彩を抱き締めながら、エリカは言ってくれた。安心できるあの声で、いつも励ましてくれたあの声で。
「うん……うん……」
泣きそうな声を圧し殺して、彩はただ頷いた。そしてふと、エリカは吹き出す。その笑い声に、彩もつられて笑い出す。大丈夫だ、もう心配ない。彩は親友兼幼なじみに任せることにした。
「変なの。今生の別れってわけでもないのに」
「大袈裟かな？」
「そうだよ」
エリカはまた笑う。可愛らしい彼女の笑顔に、彩の不安は取り除かれた。
「山本艦長ー、間も無く出航です。ブリッジへ来てください！」
『るもい』のクルーに声をかけられたエリカはすぐ行くと伝え、艦長帽を被り直した。
「じゃあ、エリカ。どうか無事に帰ってきてね」
彩は敬礼でエリカを見送る。彼女が答礼したのを見届けて、彩も旗艦に戻ろうとした。振り返った直後。
「彩！」
彼女が呼ぶ声に振り向くと、彩に決意表明を送ってきた。
「人は生まれる場所は選べないけど、死ぬ場所は選べるんだよ。私は……私はここで死ぬ女じゃない」

力強い彼女の決意、エリカの一番の魅力はその芯の強さだった。誰にも負けない心と、強い信念を持つ彼女に怖いものなどないのだ。
その気迫に圧されることなく、彩は力強く、ただ一言答える。
「しってるよ、僕は」
お互いが背負うべきものを背負い、２人は踵を返して持ち場へ戻った。２人とも振り返らなかった。

重巡洋艦『るもい』が消息を絶ったのはその日の深夜だった。

さらに3日後、艦長山本エリカ2等保安監督官以下、４５名のクルーの内、４２名が無惨な遺体となって発見された。
艦長山本エリカも発見時には既に死亡が確認されていた。

同年。ブルーマーメイド佐世保基地作戦部オフィス。
親友兼幼なじみの死から1週間が経っていたが、ブルーマーメイドとしての責務はその感傷に浸り続けることを許さなかった。
被害をまとめたレポートの作成や編成の見直し、詳細調査といった事後処理の他、出入港管理などの一般業務もこなさなければならず、

忙しない日々を送っていた。彩にとってはこれが幸いしていた。仕事に邁進することで、エリカの死から意識を逸らし、現実逃避が出来ていたからだ。だがしかし彩は彼女の死をまだ認めきれていなかった。

「ごめん、ちょっと手が離せないからこの書類頼めるかな、エリカ……」

不意に彼女の名前を呼んでしまった。オフィスに流れていた時間は一瞬氷結する。隊員たちのネガティブな感情を孕んだ目線に耐えきれなくなる。彩は静かに立ち上がり、独り言のように呟く。

「……少し……少しだけ休憩してくる……」

返事を待たず、彩は足早にオフィスから出ていった。

他のオフィスから聞こえてくる騒々しい音など、今の彼女には入ってこなかった。

海風にでもあたって気分転換をしようと廊下を歩いていると、ふいに後ろから声をかけられた。

「彩……今、時間ある？」

後ろから聞こえてきたのは同期で、もう一人の親友兼幼なじみの神余久美だった。

「……久美か。どうしたんだい？」

力なく答える彩に、彼女は黒いファイルを無言で差し出す。促されるがままファイルを受け取ると、表紙を見て目を丸くする。

――『巡洋艦るもい事件　第1次調査記録報告書』――

「どうやってこれを……？」

彩の疑問に、久美は答える。

「司令に掛け合ったの。本当は調査委員会しか見れないらしいけど、特別にって」

エリカのことを聞いた後、彩ふくめた3人はエリカがどんな最期を辿ったのかを知ろうとしていた。それをようやく見ることができる。彩は真実に近付ける高揚と同時に恐怖を感じていた。

エリカがどういう死に方をしたのか、知らなければならないが、知りたくない。目の前にある情報に震えが止まらなくなる。

「……久美は見たの？」
彩の質問に、久美は首を横に振りながら俯いて答える。
「見てないよ……千春も、私も怖いんだよ。あの子がどうなったのか……」

「怖い……か」
自室に戻った彩は、彼女の言葉を繰り返していた。机上に置いてある黒いファイルをゆっくりと開き、一言一句漏らさず、丁寧に読み進めていった。
思っていた通り、乗員発見時の様子や、凄惨を極める『るもい』艦内の調査結果、犯人たちの情報など、事細かに地獄が記録されていた。
そして、とうとう『るもい』幹部クルーの死因について言及されたページに辿り着く。
憧れ、愛し、共に誓いを立てた親友兼幼なじみの最期は、残酷で唐突なものだった。
彼女の無念、悔しさ、怖さ、その何れからも救うことが出来なかった己の無力さをひどく痛感する
レポートを何度読み直しても、ページに印字された文字が変わるわけではないし、変わったからといって事実には何の不都合もない。
いつの間にか溢れていた涙は、紙面に丸いシミを作り、広がっていく。
止まらない涙は、まるでこれから生きていく間に流す全ての涙を流し尽くそうとしているようだった。
―「人は生まれる場所は選べないけど、死ぬ場所は選べるんだよ。私は……私はここで死ぬ女じゃない」―
頭のなかで、エリカがくれた最期の言葉を思い出す。
彩は嗚咽混じりに、その声に問い詰める。
「……なんでだよ、なんでだよエリカ……君は死なないって言ったじゃないか……なのに、こんなの……君は、うそつきだ」
消え入りそうな声で言葉を紡ぐ。もはや2度と届かない声だとわかっててても、言わずにはいられない。

「エリカ……エリカ……なんで」

この日の慟哭を境に、彼女は人が変わったと言う。
ある者は、前よりも落ち着いているようだ、と。
またある者は、感情がわかりにくくなった、と。
そして、またある者からはこう言われるようになる。

あの事件の後、まるでエリカみたいになった、と。

第１０話　突入でピンチ！

すっかり日も暮れたフィリピン東方の海域。に、浮かぶ無人島、その地下にて。

「へへ、走馬灯でも見てたかぁ？」

下卑た笑みを浮かべる男の言葉に、微睡んでいた意識は覚醒する。

「……」

何も言い返さず、ただ彼を睨み付けるのは囚われの身となっているブルーマーメイドエース隊員である青木彩だ。

「死の間際がわかる気分ってどんなのだ？」

海賊タキトウは気にせず質問する。答える気分ではなかった。

「俺はよぉ、ずっと殺る側だったからよ、殺られる方の気持ちとかわかんねぇ訳よ。だから聞いておきたいって訳」

彼は間髪を入れずに拳を振りかぶる。

「おいおい、黙ってんじゃねぇよ。なんか言ってみろよ！　さっきまでペラペラ喋ってたくせによぉ！」

ついに顔面に拳が飛んでくる。１発だけではない、２発、３発と拳が顔面にめり込む。

「う……が……！」

口内に血の味が広がり、視界は衝撃と涙で滲む。

「へへへ……さて、お楽しみはこれからだぜ。ブルーマーメイドとヤるのはこれが２度目だぜ」

タキトウの言葉が引っかかる。嫌な感じがする言い方だ。

「……２度目だって？」

血反吐を吐き出しながら彼に問いかける。タキトウは変わらずへらへらしながら自慢げに答える。

「あぁ、巡洋艦を捕まえた時以来さ」

巡洋艦？

「俺たちを捕まえるつもりだったのに罠にハマったバカな艦だった。４０人ぐれぇの活きの良い強気な女たちが選り取り見取りの、それは楽しいパーティーだったぜ」

４０人？
「やっぱりあの艦長は良かったなぁ……そいつだけだよ、殺して後悔したのは。まぁ、死んだあとも使い込んだがな、ヘハハ！」
間違いない。タキトウが言う１度目というのは彼女のことだ。
「……その艦長の……名は……」
怒りと悲しみと、憎しみ、負の感情がない交ぜになる。
「あぁ？」
タキトウの言葉は耳に入らない。
「……山本エリカ……僕の親友……だった子だよ」

同時刻、アジト内の兵員区画では激しい銃撃戦が起こっていた。海賊たちは机や土嚢を積んだ即席のバリケードを作り、食堂を拠点にして防衛陣地を築いていた。
ただでさえ兵力差が大きな戦いだったのに、敵が完全に地の利を得ていることに隠密中のホワイトドルフィン特殊上陸班は危機感を抱いていた。
「班長、奴ら籠城するつもりのようです。どうします？」
小銃のマガジンを手際よく交換しながら、サザンカ３というコードネームの隊員が班長（サザンカ１）に指示を仰ぐ。
「どうしますったって……俺たちゃ隠密メインだぞ。正面切って数十人と戦うのは想定してねぇ」
ヘルメット越しに頭を抱える班長は、ここからの戦い方を決めあぐねていた。
『まごじま』に助けを呼んでも到着は今すぐというわけには行かない。ある程度は自分達でなんとかしなければならないが、それも弾薬や装備を見れば難しかった。
「なに、別行動中のサザンカ４、５に監獄区画をおさえてもらうまでの辛抱だよ」
「……それもそうか」
まだ少し納得しきれない班長だが、彼よりも経験豊富なベテランであるサザンカ２の言葉に賛同することにした。

「で、具体的にどうします？　地の利は向こうにあるし、回り込まれるのも時間の問題っすよ」
銃を素早く入れ替えて攻撃しながら、サザンカ３が問う。
班長がここからの動きを決めあぐねていると思ったようだが、どうするかは既に決めていた。
「心配ない。その内向こうが勝手に動くさ」
「はぁ……？」
班長の言葉の意味をよくわかっていないサザンカ３は首を傾げるが、班長は少し自信がついていた。
その直後、爆発音がしてアジトは大きく揺れた。
「なんだ?!」
「弾薬庫に引火したか」
「おい、上は何してる！」
バリケードの奥に隠れていた海賊たちが口々にそう言うのが聞こえてきた。海賊たちが状況を把握するより先に、特殊上陸班はその爆発音の正体に気付いた。
「なるほど！　班長たちが待ってたのはこれですか」
サザンカ３が武器を近距離離用の９ミリ機関拳銃に持ちかえながらうわずった声を出す。班長とサザンカ２も同じように近距離戦武器を用意する。
「よし、海賊どもをキルゾーンに追い込むぞ。『まごじま』に続けぇ！」
角に集まって隠れていた３人が一斉に飛び出す。３人の射撃は、混乱した海賊たちの無秩序な銃撃よりも正確だった。
「敵がこっち来たぞ！」
「怯むな、撃てぇぇ！」
海賊も負けじと応戦するが、有利だった自分達が襲われている状況に素早く順応することは出来なかった。
瞬く間に食堂近辺を制圧した３人は、先行したメンバーに合流するため、地下を目指して行動を開始した。
「主砲、右４０度。距離４０００。第２射撃ち方始めぇ！」

ブルーマーメイド作戦艦艇『まごじま』の艦首に装備された５７ｍｍ砲は、第１射で破壊した重油タンクに続き、アジトに備えられた観測塔やレーダーに砲弾を叩き込んでいた。
「事前情報によれば、南側に砲は無いはず。安心してぶちこみまくりな」
黒橋は平静を装っていたが、内心は違和感を抱いていた。多少は敵も迎撃を準備していると予想していたのに、敵艦艇の１隻も見えず、さらに海賊たちの反応も遅い。
（罠か？）
深まる疑問と違和感から、そう感じるのも無理はない。
経験則は関係なく、『まごじま』のクルーは一様にその疑惑を感じていた。
「反撃がほとんどありませんね。ロケットでも飛んでくると思ってたのに」
副長も不安がある様子だが、だからといって攻撃をやめるわけにもいかない。
「少し不安はあるけど、やるしかない。次は砲台を破壊して敵の注意を引くぞ。それと、上陸隊は突入準備」
後部格納庫で待機していた八巻ら、上陸隊は気合い充分、準備を整えていた。
「了解！」
上陸隊隊員たちの頼もしい返事を聞き、黒橋は作戦の成功を祈る。
「たのもしいね、そうでなくっちゃ」
『まごじま』の格納庫は、戦闘の余波で空気が震えているようだった。
その中で、隊長の八巻は落ち着いた様子で、愛銃を撫でていた。幾度となく窮地を救ってくれた相棒を、特に念入りに手入れする。
「さあ、貴様ら。間も無く出番だ、覚悟はいいか？」
八巻は格納庫を見渡し、１人残らず彼女自身の手で鍛え上げた信頼する部下たちに問いかける。全員の目に、迷いはない。八巻も無言でうなづく。
「聞くまでもないな」

上陸隊は覚悟も準備も整っていた。
作戦を進めていく突入部隊と時を同じくして、監獄区画でも動きがあった。

「ブルーマーメイドが来たみてぇだな」
「そのようだね」
地響きやら爆音が聞こえる地下の一室、1組の男女がいた。今まさに襲撃されている側と、襲撃している側なのだが、それを気にする様子は両名ともなかった。
「降伏したらどうだい？　こっちにはまだ切り札だってあるんだからね」
椅子に縛られて絶賛ピンチなのに、強がる様子を見せる青木だが、はったりなのはとっくに見破られていた。
「切り札だぁ……？」
余裕綽々といった感じにとぼけるタキトウ。
「そうさ、16インチ砲の火力にかかれば、君たちの艦隊なんて敵じゃないよ」
顔をしかめるタキトウだが、すぐにあの下卑た笑顔に戻る。
「16インチ……。あぁ、ご自慢の学生艦隊か。だが、その心配はいらねぇよ」
不気味なせせら嗤いに不快感を感じる。
「なぜ、そう言い切れるのさ。フィリピンに寄港してるウチの学生艦隊がすぐにでも駆け付けられるよ？」
タキトウは誇らしげにこたえる。
「ブルーマーメイドの動きは逐一確認してるからな。内部の情報も入手できるし、お前らの動きはぜーんぶわかってるぜ？」
そして、彼はやたらと自慢気に、大袈裟に語り始める。
「学生艦隊は確かに、今フィリピンにいる。だが、今から向かったとて絶対に間に合わねぇよ。俺たちはお前らの3倍の戦力を投入したんだ。今頃なまいきなブルーマーメイド共は皆海の底さ、残念だったな」

なるほど、そう来るか。具体的なことをはぐらして、マインドをぐらつかせる作戦に出たようだ。だが、すでに壊された後だった彼女の脳内はある程度修復を済ませていた。
すっきりとした脳内で、この後のやり取りで何が最適か考え、様々に思考を巡らしていく。
そして、ふと思い付く。にわかに口角を上げ、薄い笑みを浮かべながら、静かに呟く。
「……じゃあ、君たちの作戦は破綻してるわけだね」
タキトウの肩がピクリと震えたのを見逃さなかった。
動揺した彼にすかさず2撃目を喰らわす。
「本当の作戦内容は、さすがに知らないみたいだね。内通者さんも、そこまで知ってる筈ないし」
押し黙るタキトウ。さっきまでの余裕は見えず、嘲笑のオーラは警戒のオーラへと瞬時に姿を変える。
「本当の作戦……だと？」
食い付いた。しめたとばかりに、場の主導権を初めて獲得した青木はそれまでと打って代わり、自信ありげに答える。
「あぁ、そうだよ。この事は作戦に参加してる艦長クラスしか知らないんだよ。当然、僕もその1人」
身を乗り出して話を聞こうとする。彼の目にはまだ、疑いの感情があった。
「……へっ、どうせ負け惜しみだろ。それとも同情か？」
少しだけ元の調子に戻るタキトウ。しかし、額に流れる汗までは隠せない。やはり、自分が圧倒的優位と思っている状況がひっくり返ると、人は大分混乱するようだ。
「もし……そうじゃなかったら？」
またしても、彼の肩が震える。今度は余裕のなさそうな目でこちらを見つめる。彼の中で、葛藤があるのだろう。
幾度か響いた爆発音や騒ぐ兵士の声が、かなり遠くから聞こえているようだった。
逡巡の末、彼はゆっくりと口を開く。

「……その内容ってのは……なんだ？」
信じた。あとは穏便に取引をするだけだ。
「話してもいいけど……条件があるよ」
「言ってみろ」
タキトウは早くしろと言わんばかりだった。当然だろう。自分達が負けるかもしれない情報を、目の前の女が持っていると聞かされれば、誰だって焦りの一つぐらい見せるだろう。
青木はじゃあ、と前置きしてタキトウの目をまっすぐ見て答える。
「僕を解放してくれ」
「……!?」
驚きの声を上げるも、彼に残された時間は少なかった。
鉄扉に付けられた小窓が開き、慌てた様子の見張りたちが顔を覗かせる。
「タキトウさん、ブルーマーメイドがすぐそこまで来てますよ……上がやられちまったのかもしれません！」
「そうっすよ、その女から情報抜き出すなら早めにした方がいいっすよ！」
それだけ言うと、ピシャリと小窓を閉めた。何も言う暇がなかったタキトウは、ようやく自分達が追い詰められ、負けるかもしれないという恐怖を感じ始めた。
青木からしてみれば、願ったり叶ったりのチャンスだ。彼が心変わりしない内に次の手を打つ。
「……だって。さ、早く縄を解いてよ」
澄ました顔で言う青木に、苛立つタキトウだが、このピンチに手段を選んでいられなくなった。
「てめぇ……」
そのまま腰のホルスターに手を伸ばし銃を引き抜こうとするが、寸前で思いとどまる。
「そうだよね。僕を殺せば、その情報は二度と手に入らなくなる。かといって、僕を解放するか悩んでたらブルーマーメイドに捕まる。僕を解放して味方を救うか、僕を殺して君も捕まるか。２つに１つだ

よ」
今までにないほどに強く殺気を感じるが、もはやこの際それは関係ない。ただ、彼の目を見る。
冷や汗が背中を伝い、下着やシャツを濡らす不快な感覚がする。
長いようで、一瞬だった沈黙を破り、彼はホルスターに伸ばした手を引っ込める。
「……わかった、縄を解いてやる」
緊張感から解き放たれ、青木は小さく息を吐く。
「ありがとう」
「ただし、妙な真似したらすぐに殺すからな」
そう言うと、ナイフを取り出し、青木の手足を縛っていた縄を器用に解く。数時間ぶりに自由を取り戻した四肢をいたわる暇もなく、タキトウは乱暴に彼女の胸ぐらをつかんで引き寄せる。
「で、その作戦ってのはなんなんだ？　答えろ！」
シャツを引っ張られて少し苦しいが、そんなこと関係ないと言わんばかりの凄まじい剣幕だ。しかしやはり、青木に恐怖は無い。
「それはね……」
勿体振るように言う青木に、苛立ちが増していく。
「なんだ、さっさと言え！」
しかし、次の瞬間。青木はタキトウに抱き付いた。突然のことに、彼は著しく困惑する。
「こういうことだよ」
青木は徐にタキトウの耳に噛みつく。最初はその意味がわからなかったらしいが、直後にその意図に気付く。
「え……いやまさか、おいヤメロ……！」
人間の噛む力は、体重とほぼ同じ。条件が揃えば指も骨ごと食い千切ることができる。その力で柔らかい耳に噛みつけば、どうなるかは言わずもがなだ。
全身に残った力を込めて、強く噛みつく。痛みと突然の出来事で混乱しているタキトウのことなど意に介さず、思いっきり、全体重をかけて彼の耳を……食い千切る。

「が……あ、あ、あ、あぁアアアアアアアアア!?」
耳からは決壊したダムのように血が吹き出す。赤黒い血は、彼の制服だけでなく、無機質なコンクリートの床にも大きな染みを作っていく。痛みに悶え、倒れ込んで暴れまわるタキトウを見下ろしながら、青木は口内に残る耳の欠片を吐き出す。噛み千切った耳から溢れる血で、青木の顔面と胸元はベットリと汚れていた。それを拭うサマなど、相手からしたら吸血鬼か何かに見えただろう。
当然、タキトウは怒り狂う。
「騙したな……また騙したな……貴様ぁぁアアア!!」
だが、怒りに任せて冷静さを失った者が、勝てる道理は無い。
冷静に彼の顔面にひざ蹴りを喰らわす。今度は鼻が潰れ、またしても血が吹き出す。歯も何本か欠けたらしく、呂律が回らなくなる。
「……許さん……よくも……殺してやるぅぅぅぅぇげべが!?」
銃を抜くより先に、彼の右腕の関節を踏み砕く。利き腕が使えなければ、銃も握れないだろう。
「……いくら悪人とは言え、確かに騙すのは気が引けるよ……けどね」
さっきまで自分が縛られていた椅子を徐に持ち上げ、タキトウに叩きつける。
「げはぁ!?」
そして、大量に出血したショックと、止めの椅子打撃で、そのまま失神してしまった。
彼のホルスターから拳銃を抜き取りながら、すでに動けなくなった敵に最後の言葉をかける。
「こっちだって自分の命かかってるんだよ。手加減なんか出来ないさ」
こうして、単騎での制圧に成功した青木だが、敵はまだ残されていた。外の2人の見張りだ。
2人ともアサルトライフルを装備し、現状の唯一の武器である拳銃1丁では心許ない。しかも、大きな音を立ててしまったため、敵が入ってくるのも時間の問題だった。
（室内にあるもので、急いで迎撃の準備を……）

そう思った次の瞬間、鉄扉が解錠される音が聞こえた。
「え……？」
あわてて振り返り、銃を構える。敵が出てきたその一瞬で勝負を決めなければやられる。その緊張感で手にじんわりと冷や汗が出る。
ゆっくりと開かれる鉄扉の先に全神経を集中する。そして、引き金に指をかけ、そのまま引こうとしたその時。
「撃つな、敵ではない。我々はホワイトドルフィンだ」
鉄扉の向こうから現れたのは古くさい軍服とベレー帽の海賊ではなく、黒い戦闘服とタクティカルベストに身を包んだホワイトドルフィンの特殊部隊隊員だった。
「あ……味方か。ごめん、撃っちゃうトコだったよ」
銃を下げながら、ようやく会えた味方に安堵する。特殊部隊隊員も同じく安堵している様子だった。
「青木艦長、ご無事で何よりです。—サザンカ５よりサザンカ１へ、青木艦長の無事を確認。同時に、人質になっていたＰＭＣ社員も全員の無事を確認」
労いの言葉をかけると、すぐさまリーダーに報告を入れる。その様子を見て、青木は安心して少し体の力が抜けてしまった。へたりとその場に座り込むのを見て隊員が急いで駆け寄ってくる。
「大丈夫ですか、青木艦長！　これは……酷い出血ですね。すぐに手当てを」
しかし、青木は他のチームに連絡しようとする彼を制止する。
「怪我なら大丈夫。これ、僕の血じゃないから……」
横に倒れているタキトウの方を指差す。大方の状況を理解した隊員は頭を抱えているように見えた。
「いやいや……。あんた、なんて無茶を……」
「あはは……」
苦笑してごまかすのが精一杯だった。
「それと……この事は『ちちじま』のクルーには黙っててほしいな……」
『ちちじま』のクルーに聞かれれば、からかわれるのは必然だからだ。

そんなことを考えたとき、彼女の脳内に『ちちじま』クルーたちの姿が浮かび上がる。
次の瞬間には、隊員にしがみついていた。
「そうだ、艦隊は……『ちちじま』はどうなったの?!」
隊員はバツが悪そうに少し目を背ける。最悪な想像をしてしまう。
「……艦隊は……第2部隊が足止めを食らって、第1部隊も攻撃を受けているとのことですが……詳しい状況は……その……」
しどろもどろな隊員の言いぶりに、思っていた以上に酷い状況であることを察する。もはや、考えてなどいられなかった。
「……『まごじま』……いや、黒橋さんはいる?」
その問いなら、と隊員は答える。
「敵の桟橋を確保したと連絡が来ました。そのままなら、おそらく桟橋に艦が付いているはずです」
「なら……」
まだ完全に回復していない身体に鞭を打ち、立ち上がる。隊員は心配している面持ちだが、青木は構わない。
「今すぐ、僕を連れていって」

「……アジト内のほぼ全てのエリアを制圧。拘束者は100人超えです」
「本艦のダメージは最小限で済みましたが、突入隊に負傷者多数。重傷者も出ています」
「人質は全員の無事を確認。順次手当てを受けています」
「本隊とは未だに連絡が取れず、状況は不明」
「重傷者を優先的に飛行船へ」
アジト北側にある桟橋に接舷しているのは、ブルーマーメイド作戦艦艇『まごじま』だった。少数の突入部隊はなんとかアジトの制圧に成功し、桟橋を橋頭堡にして状況を整理していた。
「あの若造の言う通りになるとはね……なんだか癪だよ」
『まごじま』艦橋でそうぼやくのは同艦艦長の黒橋だ。アジトを制圧し、襲来した敵小型艇を撃退したのは良いが、この後はどうするか、決

めかねていた。
「とにかく、負傷者と拘束者を収容しなきゃね。……一番近くの艦は？」
副長がタブレットで確認する。
「えぇと……あ、ちょうど佐世保校の病院船が近くにいます」
タブレットには3隻の艦船が映る海図が表示される。病院船『氷川丸』（Ｓ２５０２）と、護衛の航洋艦だ。
「学生艦か……やむを得まい、すぐに負傷者収容が可能か確認してくれ」
「了解」
副長が準備に出たのを見て、他のクルーを呼び寄せる。
「それと、後の事を引き継げる作戦艦艇はいるか？　さすがに学生艦に拘束者を乗せるわけにはいかないからね」
「はい。近くにアメリカ支部作戦艦艇『モリソン』と、フィリピン支部作戦艦艇『スリガオ』がいます」
その報告を聞き、タブレットを一通り目を通す。
「わかった。両艦に拘束者の収容と、後始末を頼んでくれ。『氷川丸』には軽傷者を乗せるように」
敬礼し、仕事に取りかかるクルーを尻目に、黒橋は艦橋で悩んでいた。
「我々だけで本隊の救援に向かうか……それとも、学生艦隊に支援を求めるべきか」
迷うのは物理的な距離からだった。学生艦隊はすぐ近くのフィリピンに寄港してはいるが、本隊がいる海域とは２００ｋｍ以上も離れているし、なにより向こうはこのドンパチに気付いていない。今から行って、間に合うものか……。そうして考えていると、艦橋に見知った声が聞こえる。
「黒橋艦長」
その声のする方を見ると、捕まっていた後輩、青木彩艦長が立っていた。敬礼する彼女に答礼すると、黒橋はその無事を喜んだ。
「青木艦長、無事だったようだな。ところで、その血痕は……」

と、ここで青木の胸元にべっとりと染み付いている赤黒い汚れに気付く。青木は困ったように頭を掻く。
「自分のではないので、ご安心を」
その一言でなんとなく察した黒橋は、それ以上血痕について言及しなかった。
「それよりも、本隊への救援に向かうべきでしょう。状況は理解しています」
青木の言葉に、黒橋も背筋が伸びる。
「そうだな。ここは他の艦に任せて本艦は直ちに救援に向かおう。だが……」
顎に手を当てて考えるポーズを取る黒橋。問題は、救援に動けるのが『まごじま』たった1隻なことだ。
「この艦だけでは、確かに心許ないです。なので……」
「なので？」
黒橋以下の『まごじま』艦橋クルーは固唾を飲んで、彼女の発案に耳を傾ける。
「後輩たちに……頼ろうと考えています」
艦橋クルーは各々驚きの声を上げる。
「つまり、学生艦隊を動員する気か？」
「はい」
簡潔で、力強い返事をするが、黒橋は反論する。
「しかし、学生艦隊は今フィリピンのラモン湾にいる。全速で向かったとしても、ここから2時間……さらに本隊のいる海域まで行くのなら最低でも5時間はかかる。到底間に合わない」
艦橋に落胆の空気が漂う。確かに土台無理な話だ。しかし、かといって単艦で向かうのは自殺行為だ。
「大丈夫ですよ」
しかし、そんなのお構い無しといった感じで、青木はにこやかに答える。
艦橋クルーからも口々に無理だ無理だと言われるも、彼女はめげない。

「大丈夫ってお前……根拠はあるのかい？」
あっさり答える青木に、黒橋は疑うような口振りだ。だが。
「僕の航海術なら可能です」
自信たっぷりにそう言いきる彼女に、黒橋は考えを改めざるを得なかった。
「……いいだろう。青木艦長、貴官の提案を受け入れよう」
黒橋の言葉に、艦橋クルーは口々に文句を言い始める。
「艦長、ムリムリですって！　今から学生艦隊を集めるなんて」
「望み薄ですよ、これ絶対！」
「そうですよ。第一、青木艦長はウチのクルーじゃないし……」
そこまで言うがしかし、黒橋の一喝で、クルーは鎮まる。
「じゃかあしい！　他の艦だからなんだい、同じブルーマーメイドだぞこちとらぁ！」
「ひぇ」
黒橋の言葉に、艦橋クルーは固まる。
「少しでも希望が見えるならやってやるのがぁ、海の女で即ち、ブルーマーメイドだ！　覚悟決めんかい！」
さすがの青木もたじろぐその気迫に、否定的だった『まごじま』クルーは一気に結束する。
「「り、了解！」」
「すみませんでした！　青木艦長」
一同は敬礼し、各自の持ち場へ走った。
「学生艦隊へオープン回線。参加の是非を学校へ確認します」
「八巻隊長以下の地上部隊は残留。以降の指揮は八巻隊長へ引き継ぎます」
「出航用意、錨を上げぇ！」
テキパキと準備を進め、艦は滑るように桟橋から離れる。
その様子を眺めながら、青木は黒橋に礼を言う。
「ありがとうございます。僕の意見を聞いてくれて」
よせやい、と照れ隠しする黒橋。青木に秘策があるというのは、黒橋もよくわかっていた。

「じゃあ、航海指揮を頼めるかな」
その”お願い”に青木は快く応じる。
「お任せを」
青木の航海術を間近で見れると、黒橋はどうやら浮かれているようにも見えた。
「見せてもらうよ、お前の”対話する航海術”を」
ここまで期待されると少し恥ずかしい。苦笑してそれをごまかすと、ブリッジから海の向こうを見つめる。
「待っててね、久美。すぐに……すぐに行くよ」
今の彼女には、水平線の向こうにいるはずの、親友兼副長の無事を願うことしか出来なかった。
時刻は夜の１０時過ぎ。まだ彼女らに安眠できる余裕はなかった。

第11話　包囲網で大ピンチ!?

フィリピン東方のとある海域。まもなく日付が変わろうとしていたが、海域を覆い尽くす熱は冷める気配を見せなかった。
まだ夜は始まったばかりだった。

ブルーマーメイド・ホワイトドルフィン連合艦隊は絶体絶命のピンチに陥っていた。包囲網に閉じ込められた各艦は徐々に連携を欠いて行き、とうとう艦隊の先頭にいた『たきゆき』が艦隊から落伍し始めていた。
「艦長、機関部に被弾多数。推進軸シャフト損傷と機械室浸水により、航行不能です」
右舷への傾斜が高まりつつある艦内。艦内で作業するクルーの怒号や、爆発音、船体がきしむ不気味な音がブリッジにも聞こえてくる。
「そうか……」
艦長席でじっと耐えていた藤崎も、そろそろ限界であることを受け入れていた。
艦長帽を脱ぐと、静かに立ち上がり、副長を呼ぶ。
「副長、いるか?」
「はい、艦長……」
不安げな彼も、『たきゆき』の最期の時が近付いていることを悟っていた。
「総員最上甲板。……離艦用意だ」
艦橋クルーは一様に息を飲む。呼吸も忘れて立ち尽くすクルーに、藤崎は艦長として最後の言葉をかける。
「みんな……ご苦労だった。一番近い艦まで、各自内火艇とスキッパーに分乗し、脱出せよ」
まだ何か言いたげなクルーたちだが、次の言葉でその迷いを打破する。
「急げ!」
「は、はい!」

クルーたちは持ち場に付く。スキッパーや内火艇の始動準備に駆け出す者、艦内電話が使えないため、機関室まで走って伝令に出る者、甲板の救命筏を準備する者。
各員が持ち場についたのを見計らい、藤崎も、艦長として最後の仕事をこなすべく、狭いラッタルを落ちるようなスピードでかけ降りていく。

「『たきゆき』の救命筏が降ろされています。……艦を放棄した模様です」
『たきゆき』のすぐ後ろを航行していた『なぎさぎり』、『ちちじま』、『ほたか』の3隻は直ちに救助に向かおうとするが、一筋縄では行かなかった。
「右舷に雷跡、1、2……3本。3本来ます！」
右舷見張り員の関からの報告に、艦長代理の神余は顔をしかめる。
「回避運動、面舵一杯。それと、ジャマー散布を」
「了解。面舵一杯、ヨーソロー！」
艦は滑るように転舵する。しかし、避け続けるのも限界が来ていた。
「艦長代理、機関はあと1時間も持たない。このままじゃ燃えちまう！」
機関室から聞こえる悲鳴に、歯ぎしりする。
「ごめん、月島さん。まだ全力維持して。30分だけでいいから」
「……あぁ、あぁ、わかったよ！　でもあと30分で本当にぶっ壊れるぞ?!」
機関室からの電話を切り、次の指示を飛ばそうとするが、また至近弾が着弾し、艦は大きく揺れる。
「久美、ここからどうするの?」
不安げに言うのは航海長の斉賀だ。
「とりあえず、『たきゆき』の乗員を救助しよう。攻撃を避けながら、極力速度を落とさずに」
頷く斉賀と目配せし、続いて、具体的な指示をする。

「関さん、柿沼さん」
「は、はい！」
「なんですか、艦長代理？」
右舷見張り員の関と、補助操舵手の柿沼の２人を呼ぶ。
『たきゆき』離艦者の救助を指揮して。救助チームは航海科と主計科の手すきクルーを向かわせるわ」
２人は敬礼し、艦橋から駆け出して行く。その後ろ姿を見届けたあと、気難しい顔で黒丸が呟く。
「しかし……もう限界だぞこれ……」
先程落伍した『たきゆき』だけでなく、『あねじま』も既に航行不能となっている。旗艦『ほたか』は被雷が重なり、速度も落ちている。『ちちじま』と『なぎさぎり』は被弾、被雷こそ少ないが、戦闘機動を続けたことで燃料が枯渇し、噴進魚雷も使い尽くしていた。
それでもピンチというのは重なるものだ。眼前に展開する敵艦隊の中央に陣取る大型艦が、その最たる物だった。
「イージス艦……あれが現れてから、戦いは一方的ね」
包囲艦隊の中央に見えるイージス艦こと、タイコンデロガ級巡洋艦を睨む。
基準排水量７２４２トン、全長１７２ｍという大型艦で、２門の５インチ砲に、前後あわせて１２２セルのＶＬＳ、その他２０ｍｍ機関砲や魚雷発射管など、大量の兵器を有する重攻撃型の艦船だ。さらに、飛行中の噴進魚雷を探知する最新レーダーを持ち、ロケット艦を遥かに超える防空能力で噴進魚雷飽和攻撃から味方を守ることを目的として建造された世界初のイージスシステム搭載艦だ。
アメリカ支部で運用されていた旧式艦で、退役後も多くが予備役艦隊として保管されていた。
「あんなものまで持ち出すなんて、連中もよっぽど本気で私たちを沈めたいみたいね」
「実際、もう２隻やられてる。こっちは噴進魚雷も撃ち尽くしたし、デコイも残り少ない。このままじゃいずれ……」
艦橋の誰もが黙り込む。この先の連合艦隊の運命を予見したから

だ。
　重い空気が流れるのは、『ちちじま』だけではなかった。
「要救助者、全員収容しました」
「わかった。機関始動、離脱用意」
『あねじま』のクルーを収容し、離脱準備をする『いもうとじま』。敵前で停船救助するという危険をおかしつつも、無事に救助を終えた同艦の艦長、高崎直子は安堵の表情を浮かべていた。
　しかし、『いもうとじま』が離脱した直後。
「艦長、『あねじま』が急速に沈没します！」
「……まじか」
　双眼鏡で、まだ水上にあったはずの『あねじま』の方を見るが、すでにソコに艦はなく、漏れ出た油と燃え盛る残骸だけが残されていた。全クルーを助け出した直後の沈没に、艦橋は騒然とする。
「よく、頑張ったね。お疲れ様」
　直子は消え去った艦を直立不動の敬礼で見送る。艦の意地を見た気がしたからだ。
　艦橋クルーも敬礼で『あねじま』を見送る中、１人のクルーが艦橋に入ってくる。
「艦長、『あねじま』の艦長が貴女に会いたいと……あ、ちょっと！」
　クルーの言葉が終わるのを待たず、艦橋に弾丸のような速度で人影が入ってくる。その人物、姉の高崎直葉はまっすぐに直子に飛び掛かり胸ぐらを掴む。
「てめぇ、なぜわざわざ助けに来やがったんだ!?」
　鬼の剣幕をする姉に怖じけず、直子は慌てるクルーを制止する。
「自分のことは自分で出来る。いつまでガキ扱いする気だ！　てめぇの艦を危険に晒してまで……」
　直葉の剣幕に怯むことなく、毅然と返す。
「海の仲間は家族。家族を見捨てる奴がどこにいるのさ」
　直葉の怒りは収まらない。
「含みのある言い方だな。私が身内だからエコヒイキしたみてぇじゃ

ねぇか。そんな不公平認めねぇぞ！」
　より強く襟首を掴まれ、さすがの直子も表情が歪む。
　心配するクルーたちだが、手出しが出来ない。
「スグ姉こそ、自意識過剰じゃない？」
「……なんだと？」
　勢いを増す怒気に、さすがにたじろぐ。
「あの、艦長……もうその辺で……」
　なんとか止めようとするクルーだが、直子にそうする考えはない。
「自分が私の身内だから何？　海の仲間は家族。身内かどうかは関係ない、スグ姉こそ自分を特別視してんじゃないの？　どうなの？」
　直葉の表情から怒気が消えていく。
「……」
　黙り込んでしまう直葉。
「離してくんない？」
　そのまま、ゆっくりと手を離す直葉。直子は崩れた制服を正す。
「……旧『あねじま』クルーは怪我人以外はダメコンと各種補充要員に回して下さい。重傷者は後部格納庫で医療班の手当てを受けるように」
　半ば放心状態の直葉だが、直子はすでに切り替えていた。
「いや、私は……」
　妹に正論を叩き付けられ、いつもの勢いを無くしている直葉。しかし、そうしていられる時間は多くなかった。
「高崎監督官！」
　直子の言葉の真意に気付き、直葉もすぐにブルーマーメイド隊員としての責務に復帰する。
「……了解した、高崎艦長」
　踵を返して艦橋から降りていく直葉を見届け、艦長帽を被り直す直子。艦橋クルーのほっとした溜め息を聞き、直子もようやく休まる。
「危なかったですね、艦長」
「殴り合いになるかと思いましたわ」
　そう言うクルーに、苦笑いで返す。

「あの単純姉、こういう正論には意外と弱いんだよ。考えるより先に体が動くクセに、頭はやたら回るんだよなぁ」
　大袈裟な手振りを交えて言う直子。艦橋クルーたちは笑みをこぼす。
「さぁ、艦長。お姉さんもやる気になったみたいですし、次はどうします？」
　クルーの一言に、直子は仕事モードに切り替えて指示を飛ばす。
「本艦は、旗艦『ほたか』を支援する。旗艦の後方へ。機関最大戦速、取り舵９０度」
「了解！」
　クルーたちの復唱と共に、艦は甲高いエンジン音を響かせ海上を滑って行く。
　最悪な戦況でも、ブルーマーメイドの若き隊員たちの目から闘志が消えることはなかった。

「艦橋、ソーナーに感あり。潜水艦と見られる反応1、接近中」
『ちちじま』主任オペレーター柊の報告に艦橋はざわつく。
「識別信号は？」
「出てません。しかし、敵艦隊に近付いて行きます。妙な動きです」
　このタイミングで近付いてくる潜水艦とは、確かに妙だ。敵の増援にしては数が少ないし、味方にしては敵艦隊に近付きすぎている。どっち付かずで、識別信号も無い不穏な潜水艦。敵もそう思っているのか、気付いてないのか、今のところ静観している。
　だが、クルーたちはこの謎の潜水艦に唯一の心当たりがあった。
「久美、これってもしかして」
　斉賀も同じことを思ったのか、少し浮わついた声になる。もしそうならこのピンチを切り抜けられるかもしれない、という希望が見える。
「注視しよう。艦首を不明潜水艦に向け、取り舵１５度、進路３―１―５。ソーナー聴音始め」
「取り舵１５度、進路３―１―５ヨーソロー」

艦は緩やかに転舵し、不明潜水艦に艦首を向ける。遠心力で若干傾斜する艦内。
その直後、艦内に不快な警報音が響く。
「なに!?」
「まさか……魚雷?!」
ＣＩＣから悲鳴に近い声が聞こえる。
「魚雷です、不明潜水艦から！　雷数２、進路は……敵艦隊に向かっている模様！」
急いで双眼鏡で確認する。すると、艦隊進路左側を包囲していた敵艦が、水柱の中に消えていく光景が見えた。
「敵を攻撃してる……てことは……！」
神余たちは自然と笑みをこぼす。不明潜水艦の正体を確信したからだ。
「『ながしお』だ！　草川（あんにゃろ）め、遅いじゃねーか！」
双眼鏡を覗きながら歓喜する黒丸。
「敵包囲艦隊、陣形が崩れています。艦長代理！」
すかさず旗艦に通信を繋ぎ、神余は撤退を進言する。一筋の希望が見えた瞬間だった。

「不明潜水艦はやはり『ながしお』と見られます。全長７７ｍ、基準排水量２４５０トン、水中最大速力２０ノット、魚雷発射管６門。ホワイトドルフィンの標準的な潜水艦です」
「第２包囲艦隊へ攻撃を集中しています」
「敵艦隊、単縦陣に陣形を変更しつつある。突破を図る模様」
「先頭は情報通りなら『なぎさぎり』と見られる」
「データと照合、大船長のパッドに回します」
『マンボウ旅団』の海賊艦隊旗艦イージス艦『べんぼう』の艦橋は、潜水艦の急襲への対処と、逃走を始めた連合艦隊の対処に追われていた。
しかし、慌ただしい艦橋の中央に仁王立ちする男、大船長の大河原は落ち着き払っていた。古風なデザインの制服の上からもわかる細

い体躯と、生者とは思えない顔色からは想像できないほどの眼力を放ちながら、パッドの情報を睨み付けていた。
「おい、貴様ら何を……勝手に入るな！」
「うるせぇ！」
「邪魔だ、どけどけ！」
クルーの制止に耳を貸さず、大袈裟に騒ぎながら青いつなぎを着た5人の男たちが艦橋に押し掛けてきた。
「何だ、騒がしい」
目線をパッドから外さず、大河原は無機質な声で男たちに尋ねる。
「何だかんだの騒ぎじゃねーよ、どうしてくれんだ。話が違うじゃねーかよ」
男の1人が不満そうに叫ぶ。その意味をよく理解できなかった大河原は不思議そうな目で男を見る。
「話が違う……とはどういう意味かな？」
「敵が逃げようとしてんだぞ」
だから何だ。と言わんばかりに冷たい目で彼らを睨み付ける。だが、男たちは怯まない。
「お前よぉ、俺たちはお前が”女が選り取り見取りの抱き放題”って言うから参加したんだぜ」
「そのために、わざわざ保存記録まで消して、本国の連中に根回ししてまでこの艦をお前らに譲ったんだ」
「なのに、敵は逃げようとしてんじゃねぇか」
「だから、俺たちは話が違うって言ってんだよ！」
「そうだそうだ！　どうしてくれんだよ！」
口々に文句を言い始める男たち。彼らは元は予備役艦隊基地のスタッフ、もしくは保存艦艇の旧クルーたちだ。彼らは本国から切り離された離島で、半永久的に使うかもわからない艦艇を保存維持していく仕事に飽き飽きしていた。
そんな彼らが、刺激を求めて海賊行為に走り、現役ブルーマーメイド隊員を堪能しようと考えるのはごく自然のことだったかもしれない。

だが、大河原にはそんな旧スタッフたちの考えなど、心の底からどうでもよかった。むしろ、彼らのことは無駄に騒ぎ立てて気分を不愉快にさせる腹立たしいだけの肉塊程度にしか考えていなかった。
そして、気の短い彼にとって、騒ぐ馬鹿を黙らせる方法は1つしか無かった。
「おい、だんまりかよ……母ちゃんにちゃんと返事しろって教わんなかったのかべ……あぇ？」
軽い破裂音のような音が響いたあと、先頭に立っていた小太りの中年男の眉間には、風通しの良さそうな小さな穴が空いていた。
「は？」
男たちが困惑するより先に、中年男は眉間の穴から真っ赤な鮮血を吹き出して倒れ込んだ。
「えぇぇぇぇ!?」
「ちょっと待てやオイ……」
「こここ、殺しやがったな!?」
さっきの威勢は何処へやら、口々に怯える男たち。
そんか彼らに耳を貸さず、銃を構えたまま、大河原は吐き捨てるように言う。
「俺の前で、下品な真似をするな。……と、出航前にさんざん確認させた筈だが？」
「う……」
男たちはようやく、自分達が対話を試みて何とかなる相手ではないことを思い出した。
「報酬なら、女でもドラッグでも、何でも望むものを与えるさ。……奴らに勝てさえすれば……な？」
おおよそ人間らしさを同封していない冷たい眼光に、男たちはたじろぎ、小声で悪態をつきながら中年男の死体を引きずって艦橋から足早に去っていった。
「いきなり撃つのはびっくりするんで、やめてくださいよ」
文句を言うのは他のメンバーと同じ古風な制服に、金色の飾緒を着けた大河原専属の副官だ。

「すまない。今度からは気を付けるよ」
　さっきとは打って変わり、優しい笑みで副官に言う大河原。彼の歪な性格に、彼含めた古参クルーは慣れ始めていた。
「それよりも、大船長。どうしますか？」
　指示を請う副官に、彼はパッドを見つめながら指示を出す。
「一先ずこの潜水艦を沈めろ。噴進魚雷を使っても構わん。全艦の時間差爆雷攻撃で一撃で確実に沈めるんだ」
　彼の命令に、艦橋クルーは慌ただしく動き始める。
「それと、第2包囲艦隊に援軍を。『いしん』と『てんちゅう』を向かわせろ」
「了解」
「第3包囲艦隊は敵艦隊の背後を固めろ。無理に攻撃しないように。味方に誤射する可能性がある」
　的確に指示を飛ばす。薬物中毒で情緒不安定になっていても、持ち前の指揮能力とセンスは健在だった。
「対潜爆雷、準備整いました」
　オペレーターからの報告に、大河原は頷く。
「攻撃準備。全艦の攻撃システムを本艦に同期」
「敵潜水艦、魚雷発射を確認。本艦に向かってきます！」
　オペレーターの報告に艦橋は緊張感を高めるが、大河原は怯まない。
「構うな、攻撃始め！」
　大河原の命令で、数十発もの対潜爆雷が投射される。着水した弾頭は規定の深度で爆発し、水圧と衝撃波で潜水艦を破壊する。
　ソナーマンは海水が暴れる音や、反響する爆発音の裏に聞こえる破壊音に耳を傾ける。
「どうだ、やったか？」
「まだ音が反響しています。もう少し海中が落ち着くまでお待ちを」
　ソナーマンはそう言うが、あれだけの数の爆雷攻撃を受けて無事で済む潜水艦などそう多くはない。撃沈できなくとも、大損害で戦闘不能になっているだろうという確信があった。

「よし、敵潜水艦はこれで片付いた。第2包囲艦隊と合流する。敵艦隊の右翼を抑えるぞ」
　逃走を図る敵艦隊へ増速して追いすがる。時折飛んでくる砲撃は疲労と損傷が重なって精度も低く、数少ない魚雷やロケットもイージス艦の防空能力の前には無力だった。
「あとは全艦で取り囲んで、押し潰すだけです」
「案外最後は呆気ないもんですな」
　オペレーターたちの言葉に首肯し、大河原は次の指示を出していた。

「『なぎさぎり』に攻撃が集中しています。『ほたか』さらに速力低下、最大発揮速力6ノット」
「通常魚雷、残弾ありません！」
「『ながしお』が爆雷攻撃を受けています」
「敵の第3グループが後方に展開。後ろも塞がれました！」
「『いもうとじま』機関部に命中弾！　航行不能！」
「敵艦隊、全艦が急接近。包囲の幅が狭まります」
　各艦のオペレーターは途切れることなく悪い報告を飛ばし続ける。どの艦ももはや戦う力を残しておらず、たった1つの逃げ道さえ塞がれ、全滅は必至の状況だった。
「……ここまでか」
『いもうとじま』艦長の直子は、敗北を悟りつつあった。
「降伏など言語道断だ。僕たちは海の平和を守るホワイトドルフィンだ。悪党になど、決して屈しない！」
『なぎさぎり』艦長の国分は、ハナから諦めるなど考えてもいなかった。
「へっ、奴さん俺たちを沈めた気になってるみてぇだな。生憎この艦はそんなにヤワじゃねーんだよ」
『ながしお』艦長の草川は、発令所で足首まで水に浸かりながらも戦意をくじかれることはなかった。
「いや……もうこれ以上は……」

『ほたか』座乗の豊島は、唯一のチャンスを逃したことで、諦めそうになっていた。
「艦長代理！　指示を……」
「……」
『ちちじま』艦長代理の神余は押し黙って震えていた。絶体絶命のピンチに差した一筋の希望さえも打ち砕かれた彼女の心は、すでに限界だった。
　親友兼艦長から預かった艦長帽を抱きしめ、震える彼女の姿に、『ちちじま』のクルーは息を呑む。
「彩……ごめんなさい。……この帽子、返せなくなりそう……」
　嗚咽混じりで消えるような声が響く。
「久美……」
　未だ爆音が轟き、艦は大きく揺れる。クルーはその度によろけて倒れかける。
「艦尾に被弾、推進器中破！」
「格納庫被弾、艦載機使用不能！」
「レーダー破損、使用不能です」
「艦首０１区画浸水発生！」
「遮蔽急いで、排水ポンプ全力！」
　絶えず響く破壊音、悲鳴、船体が軋む音、全てがクリアに聞こえる。明確な死そのものが近付いていた。
　その時だった。
「艦隊２時の方向……飛翔する物体あり……噴進魚雷です！」
　オペレーターの報告に、大河原は反射的にその方向を睨む。
「２時方向だと？」
「はい、敵艦隊ではありません。違う艦からです！」
　艦橋はざわつく。目前の敵艦隊に集中しすぎたあまり、近付いてくる艦に気付かなかったことへの衝撃があった。
「６番艦被雷、損害不明！」
　瞬く間に降り注いだ魚雷は確実に、かつ正確にフリゲート艦の舷側を捉え、破裂する。３０００トンクラスの艦は木の葉のように水面を

フラフラと揺れ、破片を撒き散らす。
「何が……起こっているんだ?」
艦橋メンバーは誰もそれに答えられなかった。２本ずつ飛んでくる噴進魚雷の迎撃を始めた直後、旗艦のレーダーに犯人の姿が映し出された。
「レ、レーダーに感あり！　驚いた、こんな近くなのに気付かないなんて」
艦隊２時方向、まさに噴進魚雷が飛んできた方向には隠れる素振りもなく、堂々と艦隊と同航する艦影があった。
「目視で確認しました。……艦番号ＢＰＦ―３８、ブルーマーメイド作戦艦艇『まごじま』です！」
「なんだと!?」
「いくらなんでも到着が速すぎる……」
艦橋クルーやオペレーターに衝撃と動揺が走る。アジトからこの海域までは４時間はかかるはず。あり得ないスピードだった。
「だ、大船長！　敵艦がオープン回線に通信を流しています……平文で！」
「平文……だと?」
副官の言葉が耳に入らない大河原は、直ぐにその内容を問いだす。
「なんと言っている?!」
オペレーターは気迫に押され、たじろぎながら内容を読み上げる。
「よ、読み上げます……。⊠我々ハ、コレヨリ貴艦隊ノ撤退ヲ支援ス。遅レテスマヌ―アオキ⊠……以上です！」
その通信を聞いていた隊員たちは一瞬、時間が止まったかのように硬直する。
その硬直から真っ先に解き放たれたのは斉賀だった。
「アオキ……本当にアオキと言ってるの?!」
「はい……はい！　間違いなくアオキと……！　何なら繰り返し言っています！」
マイク越しに通信員の嬉しそうな声が聞こえる。

「！……」
まだ呆気に取られたような表情をする彼女の親友兼副長は、硬直から解放されないままだった。ただ嬉しさのあまり、大粒の涙を溢していた。
「よかった、彩……無事だったんだ……」

「ここまでは作戦通りだな、青木艦長」
数十隻の海賊艦隊が追い縋っているのに、何故か余裕なのは『まごじま』艦長の黒橋だ。
「ええ、むしろここからです」
急機動を始めた艦の動きを物ともせず、黒橋の隣に立っているのは『ちちじま』艦長の青木だ。
「ほ、本当にうまく行くんですよね……？」
不安げなクルーの言葉に、黒橋は笑いながら返す。
「さぁ、どうだろうな。敵が追いつく方が早いかもしれん！」
「んなことウソでも言わんでくださいよ……」
呆れるクルーを尻目に、黒橋は次の指示を出す。
「ポイントまで敵を引き付けるぞ。追いつかれたら噴進魚雷の雨あられだ、気を抜くな！」
「はい！」
クルーの返事が来るのを見て、黒橋はウイングに出て敵艦隊の動きを注視する。
「……そろそろ射程内か」
「そうですね」
黒橋の横で、同じく双眼鏡を覗いていた青木が呟く。
艦橋クルーを激励した時とは打って変わり、黒橋は少し不安げな顔をする。
「本当に上手く行くのか？」
しかし、そんな彼女の不安を掻き消すように青木は笑みを浮かべる。
「成功しますよ。絶対に」

自信ありげな彼女の笑みに、黒橋はゆっくりと頷く。その間にも艦橋からの報告は途切れない。
「間も無く敵艦隊射程内です！」
「ポイントまであと５分！」
「！……敵艦発砲。まだ射程外なのに！」
慌てるクルーを落ち着かせるように、黒橋はウイングから指示を飛ばす。
「どうせ当たらんから気にするな。とにかくポイントまで敵を誘い込め！」
緊張感を増す艦内とは裏腹に、青木は落ち着き払っていた。
目をつぶり、深く深呼吸をしながらその時を待っていた。
雑音が消えて行き、波と風の音がクリアに聞こえる。
その音の先に見える彼女らを、見逃さない。
「……ポイント到達！」
クルーの報告を聞き、青木はやさしく微笑する。
「照明弾、発射」
待ち望まれていた合図がようやく打ち上がる。
反撃の狼煙だった。
直後、海賊艦隊の外周に２０発の巨砲が降り注ぐ。

「８番艦、浸水発生。航行不能！」
「１５番艦、被弾。損傷不明！」
「なんだ今度はどうしたんだ!?」
「５インチどころの騒ぎじゃないぞ。もっと……桁外れにデカイ！」
海賊艦隊は突如として降り注いだ巨砲に大混乱していた。
旗艦からは、小型艦をすっぽり包んでしまいそうな程に巨大な水柱がいくつも見えた。そのどれもが、これまでの戦闘で見てきた物とは全く異なっていた。
「……なんだ、これは……何が起こっているんだ……」
衝撃でたたらを踏みながら、大河原は誰にでもなく問いかけるが、答えはしばらく返ってこなかった。

第3射が来るころ、ようやく砲撃の正体が判明する。
「だ、大船長！　砲撃は……」
よほど信じられない、とでも言いたいのか、報告するオペレーターは言い淀む。
「砲撃は、なんだ!?　はっきり言え！」
その態度が癪に障ったのか、大河原は大声で問いただす。
オペレーターはようやく、報告の内容を伝える。
「は、はい。砲撃は……学生艦隊（ハイスクール・フリート）からのものです！」
震える声で報告するオペレーターの言葉に、艦橋は静まり返る。砲声がやたらと遠くから聞こえてくるように感じられる。
「バカな……あり得ない。奴らが間に合うはずが……」
自身の作戦が、全く予想し得ない形で崩壊しつつあることに、大河原は動揺を隠せなかった。目の前の事実を認識したくなかったが、いくら目をこらしても、味方がブルーマーメイド作戦艦艇では持ち得ない火力で嬲られている事実は変わらない。自身のパッドに映し出されている学生艦隊（ハイスクール・フリート）の文字が消えることもない。
「奴だ……こんな小賢しいことをするのは奴しかいない……許さないぞ……」
怒りに震える拳に血が滲む。
生気の無い顔に太い血管がはち切れんばかりに浮き出る。そのまま憤死してしまいそうなほどの勢いだった。
「許さないぞ青木……許さないぞぉぉぉぉぉぉ!!」
大河原の絶叫が轟く。もはや誰にも止められない彼の怒りは海を震わせた。『まごじま』にも届くほどに。

自分に向けられた、明確な殺意を感じて身震いする。
誰がそんな殺意を向けたのかは、考えなくてもわかることだった。
「青木監督官……どうかなさいましたか？」
隣で重スキッパーの用意をする隊員の声が聞こえる。殺意はもう感じられなくなっていた。
「いや、なんでもないよ。用意を続けて」

隊員は腑に落ちないような表情だったが、そのまま準備に戻る。
「青木監督官」
自分を呼ぶ声に振り向くと、アサルトスーツに身を包み、重厚なタクティカルベストを装備した隊員たちが整列していた。
「敵旗艦強行臨検隊、準備整いました。いつでも行けます」
敬礼するのは『まごじま』の強行乗込班のメンバーと、ホワイトドルフィン特殊部隊隊員たちだ。もしもに備え、『まごじま』に残っていたのだ。
「わかりました。準備が出来次第、発進します」
「了解！」
答礼すると、隊員たちはそれぞれのスキッパーへ分乗する。
ふと鈍い砲声が聞こえ、解放されている艦尾格納庫のハッチから敵艦隊の方を見る。
黒煙を上げながら逃げ惑う艦を見据え、青木は静かに宣告する。
「これで、終わりにしよう……君も僕も、長いこと呪縛されすぎたんだ」
後に、『ナルガ島沖海戦』と呼ばれる戦いの最後の局面に達しつつあった。
２０１６年　１１月１３日　午前１時３２分のことであった。

最終話　決着でピンチ！

フィリピン東方のナルガ島沖２００ｋｍの海域。そこは未だに大海戦の真っ只中にあった。
時刻は午前２時を回ろうとしていた。

「『ほたか』はなんとか航行できますが、傾斜が拡大しつつあります。現在排水作業中」
「『いもうとじま』航行不能。乗員が脱出しています」
「『ながしお』が浮上しました。かなりやられた様子です」
「『なぎさぎり』から発光信号、☒我、航行可能ナリ☒。マジか、あれでよく動けるな……」
「スキッパー、内火艇、機動ボート、出せるものは全部出して。全員助けるわよ！」
「もちろんです、艦長代理！」
１０ノット程度しか速力は出ないものの、なんとか航行可能な『ちちじま』は、航行不能になった味方艦の救助に追われていた。
「千春、艦橋（ここ）頼める？」
「任せな」
サムズアップと満面の笑みで答える斉賀。
「ありがとう」
礼を言って、素早く艦橋から駆け出す。未だに砲声は止むことは無いが、こちらに向けられた弾は１発もない。学生艦隊サマサマだ。
甲板で直接救助指揮を執るべく通路を走っていると、インカムに通信が入る。
「艦長代理、報告が……」
駆ける脚を止めず、応答する。
「どうしたの？」
「『まごじま』から重スキッパーが出ています。敵艦へ乗り込むみたいです」
なるほど。学生艦隊に敵が引き付けられている間に敵艦を直接制

圧するつもりか。この混乱に乗じるいい作戦だ。そう思っていると1つ、確実的な予感を感じる。
「まさか……」
駆ける脚を止め、インカムの向こうに集中する。予感が的中したことを確信する。
「はい、そのまさかです。突入隊を率いているのは……ウチの青木艦長です！」
目を丸くして思わず立ちすくむ。まだ無茶をする気なのか。という心配より不安が大きくなる。
「どうしましょう、援護しましょうか……？」
「……援護してる余裕はない。私たちは救助に専念しよう」
努めて冷静に、艦長代理として指示を出す。インカムを切り、改めて甲板へ駆け出す。
「全く、彩ってば……」
しかし、自分達には対抗する力は残されていない。彼女らが隙を作っている間に撤退するより他無かった。
そうわかっていても、歯がゆい思いは変わらない。落ち着かない心と、嫌な予感を押し込み、神余は自分の仕事を果たすべく甲板へ向けて駆け出す。

大型直接教育艦『愛宕』、『土佐』からの砲撃で混乱する敵の隙を突き、4隻のスキッパーが高速で近付く。
先頭の中型スキッパーに乗るのは青木2官（2等監督官）。その後方には銃手（ガンナー）と操縦士（パイロット）、2人の搭乗者を守る防弾板と、防弾キャノピーを備えた装甲スキッパー2隻が続き、さらにその後方に最大10名の武装隊員を運ぶことが出来る輸送スキッパー1隻が追随する。
部隊は敵旗艦を直接制圧し、戦いに決着を着けようとしていた。
「思った通り、敵は『愛宕』に夢中のようです。」
青木のすぐ後ろを走る装甲スキッパー（2番艇）のパイロットが言う。波風のノイズを排する高性能マイク越しの、クリアな音声で答える。

「うん。でも、もし敵がこっちに気付いたら台無しだ。気を抜かないようにね」
「わかってますって。輸送スキッパーは必ず守り抜きます」
２番艇パイロットは笑顔で答える。部隊は低速の重スキッパーに速度を合わせているため、中型スキッパーも速度を落としていた。
つまり、敵の攻撃を受けた時に避けられる確率が低いということになる。
慎重に、かつ大胆に。それが作戦成功の要だった。
「もうすぐ敵艦隊外縁に到達する。総員、警戒を厳と成せ」
青木の指示に復唱する隊員たち。このままならあと１０分もすれば敵旗艦に取り付ける。全神経を使って周囲の影に気を配る。後続の重スキッパーからも、緊張感が伝わってくる。
しかし、順調に進む作戦に想定外の邪魔が入る。
突入隊は突如、目映い光に包まれる。
「い……!?」
青木含め、全員が最大限に警戒していたつもりだったが、見落としがあった。敵艦隊外縁にもう1隻、フリゲートがいたのだ。
探照灯に照らされた直後、毎分３０００発の発射速度を持つ機関砲から放たれた２０ｍｍ弾が、突入隊に無慈悲に降り注ぐ
「各艇、回避運動！　敵艦の死角へ！」
命令を飛ばすも、一足遅かった。２０ｍｍ機関砲は正確に目標を撃ち抜き、２番艇のフレーム、エンジン、そしてコクピットを破壊する。
「……！」
声にならない声が出る。迂闊だった、無警戒だったと後悔するより先に、後続のスキッパーへ指示を出す。
「３番艇は４番艇の前方へ、輸送スキッパーの盾になってください！」
「り、了解！」
残った装甲スキッパーと輸送スキッパーは機関砲の死角である敵艦艦首方向へ舵を取る。
一方の青木は、敵の注意を引くため、全速で敵艦の周囲を走り始める。

「僕が注意を引き付けます。その間に敵旗艦まで突っ切ってください！」
「無茶ですよ！　スキッパー単騎で敵フリゲートとなんて……」
そう言う3番艇パイロットだが、迷っている暇はなかった。
「速く！」
「っ……了解！」
青木の言葉に、3番艇は発揮可能な最大速力を持って、敵旗艦の方へ向かう。4番艇もこれに続くのを見届けて、青木は敵艦艦尾で時間を稼ぐ。20mm機関砲の射角に入り、ジグザグ航行……したと思えばまたすぐに死角に入り。を繰り返し、時間を稼ぐ。
しかし、限界はすぐに来た。照明弾が次々と撃ち上がり、付近の敵艦が近付いてくる。夜のアドバンテージはもう効かない。レーダーに映らないほどの小さな艇とはいえ、これだけ照らされれば夜闇に隠れることなど出来ない。
「潮時か……」
幸い、輸送スキッパーがすり抜けたことはバレていない。というより青木の姿を確認して躍起になっているようだった。
フリゲートやコルベットが探照灯と照明弾で青木を炙り出していく。
とうとう追い詰められた青木は、いつの間にかすっかり包囲されていた。
「やれやれ、こんなに人気者になるのは久しぶりだな」
スキッパーのエンジンを止め、観念したように両手をあげる。しかし、降伏のジェスチャーとは裏腹に、敵艦の全ての兵器がこちらに向けられる。76mm砲に、20mm機関砲、機関銃まで見える。
砲はギリギリと不気味な音を立てながらゆっくりと旋回する。
無機質な鉄の筒の先には夜よりも暗い闇が見えた。
全ての武器が青木を捉える。
「……ほら、絶好の獲物だぞ……」
今日だけでも何度目か分からない絶体絶命のピンチにも関わらず、笑みを浮かべる。

海賊たちからすればこの状況で笑うなど、理解不能だろう。
しかし、海賊たちは直後にその笑みの理由を知ることになる。
海賊の指揮官が腕を高々と掲げ、大きく振り下ろす。
「撃……!?」
が、合図は途中で途切れた。彼の座乗するフリゲートが被弾したためだ。このフリゲートだけでなく、包囲していた艦は次々と被弾し、夾叉弾、至近弾が途切れなく飛んでくる。
「ほらね、絶好の獲物だったでしょ……後輩くんたち」
包囲していた敵艦を攻撃したのは、小型巡洋直接教育艦『川内』と、教員艦『いさはや』率いる水雷戦隊だ。
「さすがは寺内教官。完璧なタイミングだ」
満足そうにする青木だが、彼女の仕事はまだまだ続いていた。
インカムを起動し、突入班に通信をつなぐ。
「そっちはどうかな?」
向こうからはテンション高めな声が聞こえる。
「お陰様で、今敵旗艦に取り付きました！　青木さんの囮、こうもうまく行くとは思いませんでしたよ！」
嬉しそうに言うが、あまり面と向かって褒められることでもない。乾いた笑い、もとい苦笑いを返して状況を伝える。
「こっちは寺内教官が何とかしてくれる。僕もすぐ敵旗艦（そっち）に行くよ」
スキッパーのエンジンを再始動して、アクセルを入れる。甲高い音と共にスキッパーは水飛沫を上げて疾走する。
「わかりました。こっちも何とか甲板を制圧して……あ！」
激しい銃声が聞こえた後、通信は途切れてしまった。
戦況有利とはいかないらしい。
「もしもし？　もしもし！　……急がなきゃ」
アクセルを最大まで吹かし、リミッターも外して抑制された最大速力を優に超えて加速する。艇はどうなってもいい、間に合えばそれでいい。その一心でアクセルを回す。
「月島さんに怒られる……かな」
終わった後のことを心配する余裕は、まだ少しあった。

ものの1分も経たず、スキッパーは敵旗艦に到達する。既に銃撃戦が起こっているようで、爆竹のような乾いた破裂音が断続して響いている。スキッパーを乱暴に舷側に付けると、かけられているロープを登り、後部ＶＬＳ甲板に降りる。
「これはひどいな」
後部ＶＬＳ甲板は死屍累々の様相だった。しかし、いずれも海賊のようで、味方のそれは確認出来ない。
周囲を警戒しつつ、腰のホルスターに挿してある９ｍｍ拳銃を引き抜き、構える。
「一先ず味方と合流しなきゃ」
後部ＶＬＳ甲板から一段上がった所にある飛行船甲板に登る。既に前線は格納庫から艦内に広がっているらしい。
艦内から聞こえる銃声を頼りに、艦内へ駆け出していく。
「こちら青木、敵旗艦に突入した。そちらと合流したい」
通信回線に呼び掛けるも応答はない。無機質なノイズが響くだけだった。
「敵の通信妨害かな。困ったぞ、どうやって味方と合流しよう」
ここまでは考えがあったものの、肝心の味方との合流方法は考えてなかった。通信が使えない状況を失念するミスを嘆く前に、この状況をどうするのかを考えることにした。
(無闇に艦内を探しても迷うだけ。敵と遭遇する確率も上がるし、それは避けたい。と、なると……)
通路を一つ一つクリアリングして、味方を探すしかない。合同訓練の時に見たタイコンデロガ級の艦内を思い出しながら、手探りで艦首の方へ向かう。
(そういえば、マップを貰うのも忘れてたな……こんな時に限って準備不足が目立つなぁ)
次々と失敗したことが頭に浮かぶが、それを気合いで押し返す。こんな時にこそ、弱気になってはダメなのだ。
思っていたよりも静かな艦内を、ひたすら艦首の方へ向かう。人気

のない通路に違和感を覚えるも、順調に進んでいく。
武器は拳銃1丁で心許ない上に、敵中に孤立。敵がどこにいるかも分からず、マップも無しで右往左往。目的地への経路が合っているかも分からない。
角から顔を出す度にいやな汗がドッと流れる。何処から来るか分からない死の恐怖に、手先は震える。
味方どころか、敵にすら会わないまま、艦内を進んでいく。
そして、いつの間にか艦橋へ登るラッタルに辿り着いていた。
(出来すぎだ……)
思わずそう独白する。しかし、大河原がいるとしたら艦橋しかない。艦を振動させるエンジンの響きしか聞こえないことから、既に突入している味方もまだ艦橋には辿り着いていないらしい。
「行くしかない、か」
意を決して狭いラッタルを登る。すぐ先に敵がいないか警戒しつつ、最大限素早く駆け登る。やはり誰もいないことを訝しむも、今は好機と捉えるより他なかった。
とうとう艦橋最上部、つまり航海艦橋へたどり着く。銃を構え、照明が落とされた暗い室内へ飛び込む。
海賊の司令部要員がいると思っていた室内は、がらんどうで、人影はなかった。
計器類が点滅していたり、海図台には製図用具が転がっているのを見るに、使われてはいるはずだったが、肝心のクルーが見当たらない。
敵が複数いるものと思っていた青木は少し拍子抜けし、銃を下ろす。
その時だった。
「俺を探しに来たんじゃないのか?」
「っ!?……」
すぐ近くで知っている声が聞こえる。全身の毛が逆立ち、血液が逆流するような感覚に襲われ、冷や汗でシャツが濡れる。
声のする方に銃を向ける。瞳孔は開き、端から見れば冷静さを喪っているように見えただろう。

艦長席に座っていた男は、ゆっくりと立ち上がる。古風な軍服の上からもわかる細い体躯、痩けた頬に無機質な機械の右腕。しかし、それに見合わない鷹のような鋭い眼光を備えた男、大河原はゆっくりと振り返る。
「大河原……」
銃を握る手に、冷や汗が滲む。最後の戦いが幕を開けた。

「とうとう……ここまで来たか」
鋭い眼光で睨む大河原。それに負けじと睨み返し、銃を向ける。震える手を誤魔化すため、力を込める。
「なんだ、いたのか。気付かなかったよ」
平静を装っているつもりだったが、声は明らかに震えている。しかし、弱っていることを彼に悟られてはいけない。そこにつけこまれて喰われてしまうからだ。
「口は減らないようだな。よく我がアジトから逃げ出せたものだ」
感心するように言うが、表情は一切動かない。
「ギリギリだったけど、なんとかね。味方が来なかったら今頃死んでたかも」
少しおどけて言ってみる。相変わらず表情は動かないが、少しだけ眼力が強まった気がした。
「そうか。そのまま死ねば良かったものを」
殺気の籠ったそれは重く耳に響く。青木は気にせずに、またおどけて言う。
「君が殺したかったんじゃないのか？」
彼の瞼がピクリと動いた。図星か、それとも気に障ったか。
「相変わらず痛い所を突いてくる女だ。しかも俺の行くところ行くところ、必ず現れて邪魔をする。腹立たしい、不愉快だ」
機械仕掛けの右腕が軋む音が聞こえる。人工筋肉を収縮させる小さなポンプ音が彼の怒気を加速させる。
「俺の右腕がこうなったのも、お前のせいだ。何故俺がこんな目に合わなきゃならないんだ？　俺は英雄と呼ばれてたんだぞ。それがな

ぜ、犯罪者、テロリストとして追われるようになったんだ？」
　不気味な機械音が響く。つい数時間前に身をもって体験した義手のパワーに身震いする。
「俺は英雄だったんだぞ。国からも表彰されて、雑誌の表紙にもなった。ブルーマーメイド（貴様ら）の手に追えない海上暴力団も殲滅した。その仕打ちが、これなのか？」
　さらに怒気を増して行く彼の心情を表すように、爆音が轟き、巨大な水柱が上がる。どうやら『愛宕』からの砲撃が旗艦が布陣する艦隊中央まで届き始めたようだった。
　だが、２人は砲撃も意に介さない。次の瞬間には４１サンチ砲が直撃して無惨に砕けるかもしれない恐怖は、２人にはなかった。
　青木はより強く銃を握り締める。
「君には同情もできないね」
　冷たく、一言だけ言い返す。大河原は明らかに怒っていた。
「……そうだろうな。貴様のような国家の犬に、俺のような犯罪者の気持ちなどわからないか」
　彼の拳が震える。顔面に浮き出た血管がはち切れんばかりに膨張する。彼の眼は、確実に相手を殺す異様な光を放っていた。
「そういう話ではないよ。そもそも君が戦争犯罪やったから捕まったって話なんだし、話をすり替えるのは良くないよ」
　次の瞬間、銃声が響く。弾丸は音を置き去りにする速度で空中を侵犯し、青木の顔のすぐ横を掠める。
　壁にめり込み、薄く煙を上げる弾丸。冷や汗が全身を濡らす。
「……黙れ。黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ……黙れ!!」
　錯乱し、銃を乱射する大河原。あまりに唐突な攻撃に虚を突かれ、避けきれなかった青木は右腕に被弾する。銃創からは、壊れた蛇口のように赤黒い血が溢れる。
「っあ……!?」
　衝撃で倒れたのが幸いして、それ以上被弾することはなかった。コンソールの後ろに隠れるも、銃撃はしばらく止まなかった。
「やっぱり、イカれてる……！」

スカートを破って即席のヒモを作り、右腕の止血をする。強く縛り付けると、昂った体に痛みが走り、顔を歪める。
「痛っ……」
特大の脂汗を拭うと、コンソールの向こうから楽しそうな声がする。
「まさか死んではいないよな？　俺を追い詰めた女が、この程度では死なないよなぁ、ええ？」
明らかに嬉しそうに言う大河原の声を聞き、痛みに苦しむ時間は無いことを悟る青木は、すぐさま反撃の意思を固める。
「あぁ……。残念ながら生きてるよ」
ある程度止血したものの、流血が止まらない右腕を労る暇はなかった。どうにかして次の手を考えなければならなかった。
（何か、何か無いか……反撃の決め手……）
小さなコンソールの裏から見える景色は狭い。有効な反撃が出来そうなアイテムは少なく、利き腕をやられたのもあって万事休すといった所だった。
その時、ゆっくりと歩み寄る足音がした。ガラス片を踏み締める嫌な音がする。
（まさか、近付いてる……？）
その予感は当たっていた。不気味に笑いながら、彼はゆっくりと近付いていた。
「いいのか、そんな所に隠れて？　すぐに見つけるぞ。見つけて殺してやるぞ……」
とても正気とは思えない。手早くリロードする軽い音と、義手の機械音は恐怖を促進させる。
位置を悟られまいと移動する。最初に隠れていたコンソールの隣へ、体を見せないように這って行く。
（まだ弾はある。けど、利き腕がこれじゃ正確な射撃は無理。出たとこ勝負で決めるか？　……ダメだ、血を流しすぎて集中力も落ちてる……）
なんとか現状を打破しようとしても、絶望的な状況を噛み締めるこ

としか出来ない。
「ほう、隠れ家を変えたか。だが、何処に行ってもわかるぞ」
重い靴音は変わらず、ゆっくりと近付く。血溜まりを踏みしめるべチャリという水音が響く。
(!……しまった、血痕か)
右腕から流れる血が目印になってしまうことまでは頭が回らなかった。
血を弄ぶ不快な水音が近付く。狭い艦橋で、死角を移動するのは直ぐに限界が来た。とうとう艦橋の角に追いやられる。
(まずいな……このままじゃ、殺される)
ひたすら目線に入る物が使えないかと思案するが、効果的な活用法は思い付けない。
だが、それ以上に目がぼやけるのが気になった。まさかこの極限状態で眠くなっている訳がないし、目を負傷したわけでもない。目を擦っても視界の違和感は消えない。
(なんだこれ……視界が……それに吐き気も……)
込み上げる不快感と、視界の違和感、そして吐き気。動揺と焦りが同時に押し寄せる。
(吐き気、視界不良、止まらない流血……まさか……!)
以前読んだ資料で、これとよく似た症状を見たことがあった。そうだ、たしかこれは……。
「もう気付いているだろう? ……指定毒劇物52号、貴様らが”ゴーニー”と呼んでいる化学合成毒だ。それがこの銃弾に塗り込まれている。1時間もすれば、苦しみの内に衰弱死する強力な毒だ」
「っ!……やっぱり、そうか」
指定毒劇物52号。近年、海賊や海上暴力団などが裏社会で広く流通させている新しい合成毒物だ。単に新ヤク、合成毒と呼ばれ、特に決まった名前は存在しない。そのため、日本政府が名付けた52号という名前に因み、”ゴーニー”と呼ばれている。少量ならば覚醒剤としての効果もあり、裏社会で爆発的に広がっている違法薬物だ。
青木もブルーマーメイド隊員として、不審船を臨検した時に押収し

たことがあり、よく目にする薬物の1つだった。
いや、それ以上に彼女には因縁深いもの(薬物)だった。
「……4年前に、あの勝ち気で生意気な女を殺したのもコイツさ」
体の芯がざわつく。不快な音を立てて心が騒ぐ。やめろ。
「ふふ、ふはは、お前の名を叫んで見苦しいったら無かったぞ」
宿してはいけない感情が沸き上がる。やめろ、こらえろ、いや無理だ。
「具合は良かったが、なにぶん五月蝿かったのでな。少し黙らせようとしたんだが、加減を間違えてついうっかり殺してしまった」
銃を握る手が震える。握りしめたプラスチック製の銃床にヒビが入る、銃創から血が勢いよく吹き出す、髪は逆立つ。やめろ、それではお前も同類だぞ。
「確か、そうだな。名前が……山本エリカ……だったかな」
だめだ、あの邪悪は殺さねば。やめろ、いやだ、違う。
「う、うぅあ……あぁぁぁぁぁぁぁアアアアアアア!?」
何かが弾けた。ぶちんと音を立てて、最後の防壁を崩す。残っていた全ての力を振り絞り、無我夢中で銃を構える。満足そうに狂った笑みを浮かべる男に向け、迷うこと無く、引き金を――
？やめて？
突如、脳内に響く優しい声。
一瞬時が止まったような感覚だった。
一言、たった一言だけ響いた言葉は、彼女の意識を引き戻す。
視界が晴れた。見えていなかった物が見える気分だった。
数秒にも、数時間にも感じる静寂は、1人の人間を復讐の鬼という呪縛から解き放った。
鼓膜が周囲の音を拾い始めた時、意識は覚醒した。
力無く銃を下ろし、呆然と宙を見つめていた青木の目に光が戻る。
不機嫌そうな大河原の声が聞こえる。
「思い留まったか、つまらん。そのまま俺を殺せば、お前も俺と同じになれたものを……相変わらず惜しい女だ」
白々しく言う彼の言葉は、あまり入ってこなかった。ただ、今自分

が自分の意思で生きていることを自覚し、安堵していた。
「……ありがとう」
声に出して、謎の声にお礼をする。大河原は不思議そうにしているが、説明する義理はない。
「……さて、面白いものが見れると思っていたが、興醒めだな。毒の効果で死ぬのを待つ時間もない。今すぐ殺してやるよ」
義手と一体化した拳銃を眉間に突き付けられる。だが、焦りも恐怖もない。人生で一番の集中力を発揮していた彼女は、既に反撃の手段を考えていた。
「ふふ……」
「何が可笑しい？」
この状況で笑みをこぼすのは、気が触れてると思われても仕方がないだろう。
だが、そうではなかった。
「キミはまた負けるよ」
大河原の殺気が伝わる。だが、怯まない、震えない。
「負け犬の遠吠えか？　不愉快だな」
冷たい銃口が眉間に押し付けられる。慌てない。
「勝つ方法を思い付いたんだ」
引き金に力が加わる。チャンスは一度、数秒だけだ。
「もういい、悪足掻きはたくさんだ。……死ね」
彼の目が血走る。目の前で自分が殺す女に全ての意識を集中させる。
「わかった、死ぬよ」
青木は躊躇無く、自身のこめかみに銃口を押し付け、引き金を――引く。
「……は？」
次の瞬間、大河原の目には飛び散る血潮がスローモーションで写っていた。

大量の血を吹き出し、スプリングやパイプ、人工筋肉を撒き散らして倒れ込んだのは、大河原だった。
「な……に……が……起こっ……」
状況が飲み込めない大河原の目に飛び込んで来たのは、部品が飛び散り、崩壊する自身の義手と……したり顔の青木だった。
「人ってさ、想定外のことされると何も出来なくなるんだよ。強制的に不意が突けるのさ」
左腕で銃を構える青木。遅れてやってきた痛覚に悶絶する大河原の義手に2発の銃弾を撃ち込み、完全に破壊する。
「あ……あぁ、あ……がぁぁぁぁぁぁぁぁ!?」
声にならない悲鳴を上げる大河原を見下ろし、満足げに呟く。
「僕の親友兼恋人を貶した罰だよ。甘んじて受け入れるんだね」
のたうち回る大河原、だがまだ衰えない眼力でこちらを睨み付ける。
「なぜだ……明らかに自分を撃ち抜いたのに……なぜ俺が撃たれてるんだ……!?」
悶える彼の疑問は最もだが、1つだけ間違っていた。
「さて、なんのことやら。最初の銃声は僕じゃないよ」
「……はぁ?」
目を見開いて驚く彼。しかし、直後にそのカラクリが明かされる。

「青木監督官！　ご無事ですか!!」
　声のする方へ、大河原も振り向く。そこには、アサルトライフルを構えたホワイトドルフィン強行乗込班の隊員がいた。
「うん、なんとかね……いや、完全に無事ではないんだけど……」
　呆気に取られる大河原だが、すぐさま駆け付けたブルーマーメイド強行乗込班の隊員に捕縛される。
「海賊のリーダーを確保しました！」
「『愛宕』に攻撃中止を命令しろ、急げ！」
　手錠をかけられ、押さえ付けられる大河原は観念したように静かに言う。
「……なるほど。最初の銃声はあのホワイトドルフィンのものか……俺は、敵の接近に気付かなかったわけか」
　一瞬で味方の接近を察知し、タイミングをあわせて意識を自分に向けさせる捨て身の作戦に素直に感心しているようだった。さっきまでの野蛮な男と同一人物には見えなかった。
「今度こそ、キミの負けだ。もう2度と日の光を見ることはない」
　流血が止まらない右腕を抑えながら、大河原を見下ろす。
「手厳しいな……だが、そうだな。もう流石に終わりにしよう。俺は疲れた」
　彼と初めて会った時の感覚に戻っていた。犯罪者とは思えないほど礼儀正しく、好青年な印象があったあの頃に。
「そうだね。僕も……もうキミの顔は……見たく……ない……。永遠に……さよ、なら……だ……」
　意識が遠退く。そういえば毒を盛られていたんだ。全てが終わった安心感で、忘れていた吐き気と視界不良が一気に押し寄せる。
　自分を呼ぶ声が遠くから聞こえた気がした。いや、実際にはすぐ近くの隊員の声なのだが、遠退く意識はそれを遥か彼方から聞こえる声であるかのように錯覚させる。
（ごめん、久美、千春、みんな。必ず帰るって約束、守れなくなるかも……）

暗くなる視界の向こうに見える友の影に名残惜しさを感じる間も無く、視界はゆっくりと暗転した。
長くて深い、闇の中へ堕ちた感覚だった。

目が覚めたのは白い部屋だった。
（ここが天国かな……それとも地獄？）
白い部屋は殺風景というわけではなく、規則的な音を立てる大きな機器、無数のケーブル、簡素な棚やテレビが整然と並べられていた。
（この部屋見たことあるな……）
見知らぬ白い部屋ではなく、そこが病室だと気付くのにそう時間はかからなかった。数回、瞬きをすると視界はクリアになっていき、白い部屋の正体がわかってきた。
視覚よりも先に、聴覚が部屋の正体を見極めた。
ベッドの奥深くから響くスチーム缶の重低音。艦首が波を切り裂く音。
学生時代によく世話になっていた、氷川丸の病室だ。
「ふふ……生き残れたみたいだね」
白い天井に向けて、独り言を呟く。すると、それを聞き付けてか、ベッドの周りを囲んでいたカーテンが勢いよく開けられる。突然のことに驚くが、それよりも先に特徴的な泣き顔が目に写る。
「艦長……艦長……よくぞご無事で……」
よっぽど泣いていたのか、目を真っ赤に腫らしているのは艦橋見張員の関さんだ。
「関さん……ふふ、どうやら夢じゃないんだね」
その言葉を聞き、感極まって泣きじゃくる関さんは、何か意味不明なことを叫びながら何処かへ走っていってしまった。皆の所へ報告にでも行ったのだろうか。

入れ違いに、機関長の月島さんが入ってくる。
「ようやく目が覚めたな艦長。だいぶ寝坊したじゃねぇか」
「月島さん……心配かけてすまなかったね」
月島は気にするなと手をヒラヒラさせながら、ベッドの横に置いてある椅子に腰かける。
「その言葉は副長宛てにとっておきな。あいつが一番あんたを心配してたからな」
その言葉が、少し胸に刺さる。あれだけの無茶をして心配させたのだ。怒られるのは目に見えている。
「うん……そうだろうね。きっと、あの子はそうなるだろうね」
今回は彼女に負担をかけすぎた。彼女が来たら、まず謝ろう。
そう思いながら、体を起こそうとする。が、しかしうまく起きれない。腕に力が入らず、違和感がする。その様子を見かねて月島が手伝ってくれた。
「月島さん……ありが……」
礼を言おうとした時、目覚めてから初めて見た自分の体に言葉を失う。
右腕が、なかった。
本来それが伸びているはずの肩には血が滲む包帯と、細かい管が数本刺さっているだけで、右腕は無かった。
絶句する青木に、月島はバツが悪そうに教える。
「……右腕は毒の回りが早くてだめだったらしい。毒の流れを抑えるためにも、切断するのはやむ無しだったそうだ」
目を逸らさず、コチラを見て答えてくれる月島に、青木は静かに礼を言った。
「……ありがとう、月島さん。……腕は、生き残った代償なんだね」
申し訳なさそうに俯いてしまう月島。整備班のキャップを深く被り、ただ一言呟く。
「すまない、艦長……」
「月島さんが謝る必要はないよ。僕が無茶しすぎたのが原因なんだし……」

そこまで言った所で、言葉は中断された。病室の扉が勢いよく開き、誰かが部屋に入ってきた騒々しい音が聞こえたからだ。
「ちょっと、ちょっと、ちょっと！　困りますって、病室にそんな慌てて入ったら」
看護学生が注意する声が聞こえるが、彼女はお構いなしにズンズンと足音を立てて部屋に入ってくる。
足音の主はカーテンを乱暴に開くと、青木の顔をじっと見つめる。
久し振りに見れたその顔に、自然と笑みが溢れる。
「久美……久し振りだね」
その言葉に、親友兼副長は一瞬、笑みを見せるが、直ぐに口を真一文字に結び、腕を大きく振りかぶる。
何をするつもりか、病室の誰もが察するが、止めることはできなかった。
全力を込めた平手打ちが、青木の頬に炸裂する。一瞬で時間が凍り付いたようだった。
最初に解凍されたのは看護学生だった。
「……いやいやいや、何してんすか、神余監督官!?　怪我人、それも3日間意識不明だった超重傷者に！　先輩だからと言って許容できるやつじゃないですよ!?」
騒ぎを聞き付けた看護学生たちがにわかに集まり始めていたが、そんなことはどうでもよかった。
彼女が自分をどれだけ心配してくれていたのか、どれだけ心細かったのか、どれだけ待っていてくれたのか。
文字通り痛いほど伝わったからだ。
生きていることを実感させてくれる頬の痛みが染み入る。
「ごめん、久美……」
心配させていたこと、無茶をしすぎたこと、怖がらせてしまったこと、全てに謝りたかった。
だが、今にも泣きそうなほど目尻に涙を溜めて、今にも崩れ落ちそうなほどに細く見える彼女の姿に、それ以上の言葉はかけられなかった。

「う、うぅ……う、わぁぁぁぁぁぁぁぁん!!」
とうとう堪えきれずに泣きじゃくる彼女は、そのまま青木の胸に飛び込んできた。呆気にとられる一同を尻目に、強く、強く抱きしめる久美は、親友兼艦長の心音を捉える。
「……よかった……生きててよかった……もうこのまま目を覚まさないんじゃないかって……怖かった……すごく怖かったの……」
最初は目を丸くしていた青木だが、静かに、静かに抱擁を返す。片腕が無い違和感など忘れて、2人で抱き合った。泣きじゃくる彼女の髪を撫でる。赤みがかったクセの無いキレイな長髪を撫でる。安心する、落ち着いたあの匂いがする。
「心配かけて本当にごめん。久美こそ、ありがとう。僕たちの家を守ってくれて……」
ひとしきり胸の中で泣く久美は唸るだけで、言葉になら無い声を上げる。
自分をこんなに心配してくれて、自分のために泣いてくれる。そんな親友兼副長の姿に、青木も釣られて落涙する。
看護学生や見舞いに来ていたクルーたちも、ホッとして顔を見合わせる。

こうして、ようやく戦いは終わった。長い夜は明け、暖かい日の差す方へ、艦は進む。
空は雲一つ無い晴天。凪いた海が、水平線の向こうまで果てしなく広がっていた。

エピローグ

ナルガ島沖海戦の終結から１０日後（青木が目覚めてから１週間後）。横須賀市内の保安監督隊中央病院。

保安監督隊中央病院は、保安監督隊（ブルーマーメイド）の隊員、またはその家族が入院できる病院で、横須賀市郊外の住宅街から少し離れた山中にある。

その３階にある、高官向けの個室の一つに、ナルガ島沖海戦の一番の功労者にして英雄、青木彩２等保安監督官が入院していた。

その病室に、１人の見舞い客が来室しようとしていた。

ブルーマーメイドの制服に身を包み、波打つような黒の長髪を揺らす彼女は、病室の扉を静かにノックする。

「どうぞ」

部屋の中から聞こえる声に会釈しながら、見舞い客は入室する。

「失礼します」

扉を開けると、懐かしい笑顔が見えた。彼女は嬉しそうに手を振り、見舞い客に声をかけた。

「やぁ、久しぶりだね。宗谷くん」

「青木先輩こそ、お久しぶりです。……お元気そうで何よりです」

見舞い客……というのは、現在のブルーマーメイドの最高責任者であり、安全監督室室長を務める宗谷真霜のことだった。

「何もない部屋だけど、ゆっくりしていきな……っと」

体を起こそうとするが、まだ右腕が無いことに慣れず、体勢を崩す。

「青木先輩！」

真霜はあわてて彼女の身体を支える。ゆっくりと、青木の身体を起こし、ベッドを操作して起きやすいように角度を変える。

「ありがとう、宗谷くん……すまないね、君に手伝わせてしまって」

申し訳なさそうに言う青木だが、真霜は首を横に振りながら言う。

「いえ、大丈夫ですよ、先輩。たまには後輩に世話を焼かせて下さい」

満面の笑みを溢す真霜に苦笑いを返し、ベッド横の椅子に座るよう

に促す。
「今回はまた大変な戦いでしたね」
「まぁね。でも、２６年連れ添った右腕と別れるだけの価値はあったと思うよ」
右腕があった場所、今では肩から少しだけ根元が伸びるだけの右腕だった場所を擦りながら言う青木。
「……右腕は……残念でしたね」
いたたまれない表情を浮かべる真霜に少し申し訳なく思い、青木は笑って誤魔化す。
「君が気に病むことはないさ。仕方のないことだしね」
気にしないでくれと言っても優しい真霜のことだから気にしてしまうのだろう。いい後輩を持ったものだ、と改めて思う。
「それはそうと、久美たちには会ったかい？」
重くなった空気を軽くしようと、青木は話題の転換を試みる。
真霜は少し困り顔をしながら答える。
「はい。さっき病院のエントランスで……ついさっきまでお見舞いに来ていらしたそうですね」
真霜がお見舞いに来る少し前、久美と千春が仕事終わりにお見舞いに来てくれていたのだ。２人は入院中暇だろうからと、時間を見つけてはよく会いに来てくれていた。
「自分達の仕事はいいのかって、いつも言ってるんだけどね。もう僕もいい年だし、そんなに心配しなくたっていいのに」
やれやれ困った。というように身振りをするが、満更でもないことは緩んだ表情からすぐにわかった。
青木のペースに乗せられ、いつもの調子を取り戻した真霜はとある噂を思い出す。
「久美先輩といえば……勢い余ってキスしたって、本当ですか？」
瞬間、青木の動きが固まる。髪の毛の先まで意識が宿ったように逆立つ。ハリセンボンが膨らむ様子と似ていた。
「……それ、誰から聞いたんだ……？」
突然、図星をつかれて分かりやすく混乱する青木。その様子を見

て、真霜は堪えられずに吹き出してしまう。
「やっぱり！　本当だったんですね、ふふ」
自慢の後輩の可愛らしい笑顔なんて楽しむ余裕はなかった。脳内コンピューターはすぐさま噂好きなクルーを探るが、心当たりが多すぎて対象を絞れない。そもそもこの混乱状態ではまともに動作しない。
頭を抱えて耳まで赤くなる。
「いや、あれは事故というか、勢い余ってというか、テンション上がっちゃってというか……」
しどろもどろに謎の言い訳を始める青木。いつの間にか腹を抱えて笑う真霜に、それ以上は何も言えなかった。今世紀で一番大きなため息を付き、布団に籠る。恥ずかしさの余りそのまま消え入りそうな気がしてしまう。
そうして布団の中で悶絶していると、ひとしきり笑った真霜がいつものあの声で言う。
「学生の頃に戻ったみたいですね……青木先輩」
「……え？」
布団からまだ冷めない顔を出すと、優しい笑顔の彼女が見えた。
「青木先輩って、あの事件以来、ずっとあの事をを抱え込んでいて、まるで何かに取り憑かれているみたいでしたわ」
取り憑かれている。という言葉に心当たりがあった。あの狂気に駆られた義手の海賊のことだ。体を布団から出し、遠くを見つめる。
「あの頃は……ずっと心に錨が落とされていたんだ。重くて、錆びていて、それでいて大きな錨が。上げようにも海が邪魔していた。流れが強くて、上げられないんだ。そうこうしている内に、錨鎖まで錆び付いて動かなくなった。……もう、2度と上げられないと思っていた。あの海に囚われて、もう2度と航海出来ないと思っていた。……でも、今は違う」
真霜は静かに話を聞いていた。
「その錨は……上げられましたか？」
真霜の方をちらりと見てから、さあ？と前置きし、話を続ける。

「錨を付けたままでも走ることはできる。浅瀬を抜ければいい。錨鎖が伸び切れば、それで自由だ。不恰好でもなんでもいい。もう一度……外海を目指すのも悪くはないなと思っているよ」
話を聞いていた真霜は静かに頷く。
「なんて、よくわからない話になっちゃったね。このくらいにしておこうか」
適当に誤魔化すと、真霜と顔を見合わせて笑った。彼女とこんなに楽しく会話できるのはいつ以来だろうか。自慢の後輩との交流の時間はあっという間に過ぎていった。

「あら、もうこんな時間ですね」
かなり話し込んだ2人。結局この日は時間の限界までずっと喋り混んでいたらしい。真霜が来てから3時間。あっという間の一時だった。
「ふふ、久し振りに会ってついつい話が盛り上がっちゃったね。今日の所はここまでにしようか」
お茶を一口飲みながら、青木もお開きにしようとした。
荷物を手に取り、制帽を被り直す真霜。
「じゃ、しっかり休んでくださいね、先輩。また今度」
手を振って病室の出口へ歩き出す真霜。彼女を手を振って見送ろうとするが、大事なことを言い忘れていたことに気づく。
「じゃあね。また今度……って、ちょっと待って宗谷くん！」
扉に手を掛けた所で呼び止める。真霜は不思議そうな顔で振り返る。
「はい？」
ベッドの方まで戻ってくる真霜に耳打ちする。
「近くに人はるかい？」
「いえ……いないと思います。このフロアに入院してるのは先輩だけなので」
青木の意図が読めない真霜は、混乱を加速させる。
「なら良かった」

ベッドの横にあるチェストに手を伸ばし、ノートとＵＳＢメモリを取り出す。
「君にこれを託したい」
差し出されたノートと青木の顔を交互に見る真霜。
「なんですか、これ？」
青木は先程までのオフモードから、ブルーマーメイド隊員としての仕事モードに切り替えていた。その眼力に、真霜は身構える。
「ブルーマーメイド隊内のスパイに関する非公式報告書だよ」
「……は?!」

寄せては返す波のように、ピンチというのは去ってはまたやって来る。
大きな波がやって来れば、その次はもっと大きな波がやってくるものである。
しかし、まだその事は知る者はいない。まだ少し先のことだからだ。